

姫路市

飯田遺跡

—(二)船場川水系船場川流域治水対策河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成29(2017)年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

飯田遺跡

—(二)船場川水系船場川流域治水対策河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 29 (2017) 年 3 月

兵庫県教育委員会



飯田遺跡遠景（北東上空から）



飯田遺跡遠景（東上空から）



飯田遺跡遠景（西上空から）



飯田遺跡遠景（北上空から）



飯田遺跡近景（南上空から）



飯田遺跡近景（東上空から）



調査区全景（南から）



調査区全景（北西から）



調査区北半遺構検出状況（南から）



SH01全景（北西から）



出土土器集合



遺構出土土器



旧河道出土土器



庄内窯



他地域の特徴を示す土器

例　言

1. 本書は、姫路市飯田に所在する飯田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は（二）船場用水系船場川流域治水対策河川事業に伴うもので、兵庫県中播磨県民センター姫路土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
3. 調査の推移
(発掘作業)
試掘調査 平成15年6月6日～平成15年6月20日
実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
本発掘調査 平成27年1月14日～平成27年2月25日
実施機関：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：有限会社戸田建設
(出土品整理作業)
平成27年4月1日～平成28年3月31日
実施機関：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
平成28年4月1日～平成29年3月24日
実施機関：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
4. 空中写真測量は、株式会社オーシスマップに委託した。
5. 調査成果の測量は、電子基準点兵庫御津、加古川、姫路をもとに行った。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
6. 本書に用いた方位は、座標北を示す。また、水準高は東京湾平均海水準(T. P.)を基準とした海拔高である。
7. 遺物写真撮影は、株式会社クレアチオに委託した。
8. 自然科学分析については、放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に、樹種同定及び胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
9. 本書の挿図第6図は兵庫県教育委員会発行『兵庫県遺跡地図－第3分冊－』(平成23年3月発行)の83「姫路南部」をもとに加工を行った。

10. 本書の編集及び第1～3章、5章の執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部渡瀬健太が担当した。第4章の執筆については、目次に記す通りである。
11. 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
12. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々及び機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。（敬称略・五十音順）
秋枝芳（姫路市教育委員会）、黒田祐介（姫路市教育委員会）、小柴治子（姫路市教育委員会）、関梓（姫路市教育委員会）、高橋学（立命館大学）、中川猛（姫路市教育委員会）、福井優（姫路市教育委員会）、渡辺界（播磨町教育委員会）、姫路市教育委員会

凡　例

1. 遺物には通し番号をつけている。ただし、石製品及び木製品には、番号の頭にそれぞれS、Wをつけて、土器と区別している。
2. 土器の種別は実測図断面の色を、須恵器は黒ベタ、弥生土器及び土師器は白抜きとすることで区別している。
3. 遺構は、その性格ごとに分類し、それぞれ通し番号をつけた。遺構の種類は次の略称を用い、区別している。

SH：堅穴住居跡 ／ SB：掘立柱建物跡 ／ SP：柱穴 ／

SK：土坑 ／ SD：溝 ／ SR：旧河道

なお、遺構番号は検出時につけたが、その後の調査の経過の中で、遺構の性格の解釈が変更になったものも存在する。変更になった遺構は以下のとおりである。

調査時の遺構番号→本報告書における遺構番号

SK06 → SD03

SK07 → SD04

SK08 → SK05

SK09 → SK06

4. 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1992年版を使用した。

【本文目次】

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 発掘調査の概要	8
第3節 整理作業の概要	10
第3章 調査の成果	
第1節 遺構	12
第2節 出土遺物	16
第4章 自然科学分析	
第1節 飯田遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)(株式会社加速器分析研究所)	43
第2節 飯田遺跡における出土木製品の樹種同定(パリノ・サーヴェイ株式会社)	46
第3節 飯田遺跡における出土土器の胎土分析(パリノ・サーヴェイ株式会社)	49
第5章 結語	57

【巻頭写真図版目次】

卷頭写真図版 1 飯田遺跡遠景(北東上空から)	卷頭写真図版 5 調査区北半遺構検出状況(南から)
飯田遺跡遠景(東上空から)	SH01全景(北西から)
卷頭写真図版 2 飯田遺跡遠景(西上空から)	卷頭写真図版 6 出土土器集合
飯田遺跡遠景(北上空から)	卷頭写真図版 7 遺構出土土器
卷頭写真図版 3 飯田遺跡近景(南上空から)	旧河道出土土器
飯田遺跡近景(東上空から)	卷頭写真図版 8 庄内堀
卷頭写真図版 4 調査区全景(南から)	他地域の特徴を示す土器
調査区全景(北西から)	

【挿図目次】

第1図 飯田遺跡(姫路市)の位置	2	第11図 飯田遺跡・長越遺跡調査区の位置	11
第2図 境上山古墳(南西から)	3	第12図 壺・壺・鉢の分類	17
第3図 長越遺跡調査状況(昭和49年度調査)	4	第13図 高杯・器台の分類	18
第4図 姫路城跡(南から)	4	第14図 歴年較正年代グラフ	45
第5図 姫路市街地遠景(南東から)	4	第15図 飯田遺跡の木材・炭化材	48
第6図 飯田遺跡周辺の遺跡	5	第16図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	52
第7図 平成15年度調査風景 (『播磨・長越遺跡Ⅱ』より引用)	7	第17図 胎土中の砂の粒径組成	54
第8図 平成20年度調査風景 (『播磨・長越遺跡Ⅲ』より引用)	8	第18図 砕屑物・基質・孔隙の割合	54
第9図 飯田遺跡調査前風景(南から)	9	第19図 飯田遺跡胎土薄片(1)	55
第10図 包含層人力掘削状況(西から)	9	第20図 飯田遺跡胎土薄片(2)	56
		第21図 壁穴住居跡・掘立柱建物跡分布図 (右:本調査区 左:平成20年度調査区)	60

【表目次】

表1 飯田遺跡周辺の遺跡一覧	6	表6 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、 歴年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)	45
表2 飯田遺跡調査一覧 (長越遺跡Ⅱ・長越遺跡Ⅲ含む)	10	表7 飯田遺跡の樹種同定結果	47
表3 飯田遺跡出土石製品観察表	42	表8 試料一覧及び胎土分類結果	52
表4 飯田遺跡出土木製品観察表	42	表9 薄片観察結果	53
表5 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)	44	表10 飯田遺跡出土土器観察表	61

【図版目次】

図版1 調査区平面図	国版5 SH01実測図
図版2 調査区土層断面図(1) 東壁	国版6 SB01実測図
図版3 調査区土層断面図(2) 北壁・調査区中央部アゼ南壁	国版7 SB02実測図
図版4 旧河道堆積状況確認トレンチ土層断面図	国版8 SB03実測図
	国版9 SB04実測図

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 図版10 SK01～04実測図 | 図版16 土器実測図(5) |
| 図版11 SK05・06、SD01～04実測図 | 図版17 土器実測図(6) |
| 図版12 土器実測図(1) | 図版18 土器実測図(7) |
| 図版13 土器実測図(2) | 図版19 土器実測図(8) |
| 図版14 土器実測図(3) | 図版20 土器実測図(9)・土器文様他拓影 |
| 図版15 土器実測図(4) | 図版21 石製品・木製品実測図 |

【写真図版目次】

- | | |
|------------------------|-------------------------------------|
| 写真図版1 空中写真（北東上空から） | 写真図版11 SB01（南西から） |
| 空中写真（南上空から） | SB01 SP02（西から） |
| 写真図版2 調査区近景（北西上空から） | SB01 SP09（南東から） |
| 調査区近景（南上空から） | SB01 SP11（南西から） |
| 写真図版3 調査区全景（真上から） | SB01 SP14（南西から） |
| 写真図版4 船場川対岸からの風景（南東から） | 写真図版12 SB01 SP46（南西から） |
| 調査区と船場川（北から） | SB01 SP47（南から） |
| 写真図版5 調査区全景（南から） | SB02～04（南西から） |
| 写真図版6 1～2区全景（西から） | SB02 SP06（南西から） |
| 調査区全景（南東から） | SB02 SP06土器出土状況（南西から） |
| 写真図版7 遺構検出状況（南から） | 写真図版13 SB02 SP07（南西から） |
| 遺構検出状況（北から） | SB02 SP07石組検出状況（南西から） |
| 写真図版8 SH01全景（北西から） | SB02 SP23（南西から） |
| SH01全景（南から） | SB02 SP30（東から） |
| 写真図版9 SH01炭化部材検出状況 | SB02 SP36（南東から） |
| 【平成20年度調査】（西から） | SB03 SP04（東から） |
| SH01炭化部材 | SB03 SP21（左）（東から） |
| 【平成20年度調査】（西から） | SB03 SP27（南東から） |
| 写真図版10 SH01北辺アゼ（東から） | 写真図版14 SB03 SP45（南から） |
| SH01中央土坑（西から） | SB03 SP38（左）・SB04 SP37（右）
(南東から) |
| SH01南周壁溝沿い焼土（南東から） | SB03 SP40（右）・SB04 SP39（左）
(北西から) |
| SH01周壁溝検出状況（南東から） | SB04 SP05（南西から） |
| SH01周壁溝（東から） | SB04 SP20（南から） |
| SH01周壁溝とSP01（北東から） | SB04 SP35（南から） |
| SH01 SP17（南から） | |
| SH01 SP19（南から） | |

SB04 SP41 (南から)	写真図版20 旧河道堆積状況確認用
SP04噴砂検出状況 (南から)	トレンチ土層断面
写真図版15 SP10 (東から)	調査風景
SP16 (南から)	現地説明会風景
SP18 (南から)	飯田遺跡現況 (北東から)
SP22 (南から)	写真図版21 SH01出土土器
SP26 (左)・SP44 (右) (南から)	SB01～03出土土器
SP28 (南から)	SK03出土土器
SP42 (南東から)	写真図版22 SK06出土土器
SP48 (右)・SP49 (左) (東から)	SK07出土土器
写真図版16 SK01 (北から)	写真図版23 旧河道出土土器 (1)
SK02 (東から)	写真図版24 旧河道出土土器 (2)
SK03 (東から)	写真図版25 旧河道出土土器 (3)
SK03 南西アゼ (西から)	写真図版26 旧河道出土土器 (4)
SK03 東西アゼ (南から)	写真図版27 旧河道出土土器 (5)
写真図版17 SK04 (南から)	写真図版28 旧河道出土土器 (6)
SK05 (南から)	写真図版29 旧河道出土土器 (7)
SK06 (北西から)	写真図版30 旧河道出土土器 (8)
SK07 (西から)	写真図版31 旧河道出土土器 (9)
SD01 (南から)	写真図版32 旧河道出土土器 (10)
SD03 (東から)	写真図版33 旧河道出土土器 (11)
SD04 (南から)	写真図版34 旧河道出土土器 (12)
写真図版18 SD02 (西から)	写真図版35 旧河道出土土器 (13)
旧河道検出状況 (南から)	写真図版36 旧河道出土土器 (14)
旧河道士器出土状況 (1)	写真図版37 旧河道出土土器 (15)
写真図版19 旧河道士器出土状況 (2)	包含層出土土器
調査区東壁北半土層断面 (西から)	写真図版38 出土石製品 (1)
調査区東壁南半土層断面 (北西から)	写真図版39 出土石製品 (2)
調査区北壁土層断面 (南から)	出土木製品
調査区中央部アゼ南壁土層断面 (南から)	

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

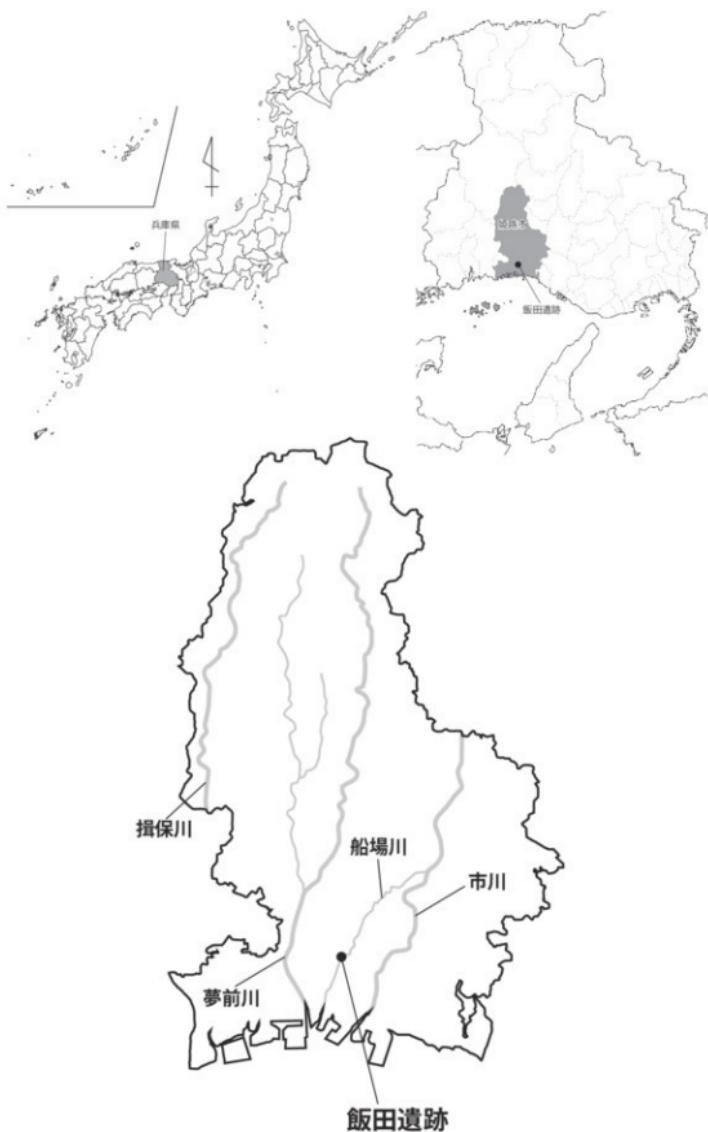
飯田遺跡は姫路平野南側の姫路市飯田字長越・湯田に所在する遺跡である。姫路市は兵庫県の南西部、播磨平野（姫路平野・播州平野）のほぼ中央部に位置する西播磨の中核都市であり、人口は53万4,362人（平成28年12月現在）と兵庫県第2の人口規模を有する。平成28年時点での市域面積は約534km²である。

奈良時代には播磨国府や播磨国分寺が置かれたことで旧播磨国の中核として発展し、江戸時代には姫路城の城下町として都市形成が進められた。また、城下町外には沖積平野や海岸に近い砂堆・砂州上に点在して集落が営まれた。その後、市街地は徐々に拡大し、広畠・飾磨等の臨海部の住宅地化及び工業化が促進された。太平洋戦争では2度の空襲を受け、大きな被害を出したが、戦災復興土地区画整理により道路網の整備が進むなど、現在の都市の骨格が形成され、近代的な市街地へと変容していった。戦災からの復興とともに、さらなる発展を目指し、昭和21年に隣接する1市3町3村と合併し、市域を広げた。その後も編入合併を行い、平成18年（2006年）には隣接する旧神崎郡香寺町・旧飾磨郡夢前町・旧宍粟郡安富町・旧飾磨郡家島町の4町と合併し、今日に至る。

姫路市の地形は、北部には増位山・広嶺山・書写山・雪彦山などの山々が連なり、南部は中国山地を水源とする市川・夢前川・揖保川等の河川により形成された沖積平野となる。南は瀬戸内海に面しており、家島諸島を市域に含む。

姫路市内の山地・丘陵部の地質は、主に流紋岩・火碎岩・花崗岩からなる火成岩が占める。北部山地は流紋岩などの酸性火山岩や凝灰質砂岩など火山噴出物を含む堆積岩からなり、中生代白亜紀（約1億4千5百万年前～6千6百万年前）に属する。平野部は沖積層と大阪層群からなり、沖積層は主として完新世（約1万年前以降）に属する。河川沿いの低地は主として砂・疊が堆積し、下流に向かうほど泥・砂が多くなる。大阪層群は主に鮮新世（約530万年前～260万年前）から更新世（約260万年前～1万年前）に属する地層であり、市東北部の市川沿いの地域や東部の段丘でみられる。

飯田遺跡は姫路市の平野部、船場川河口から約3.5km上流の右岸に位置し、完新世に形成されたと考えられる沖積層上に立地している。二級河川である船場川は、姫路市街地北部の保城地区で、同じく二級河川である市川から分かれ、姫路城の西側、手柄山の東側を南流し、播磨灘に注ぐ。手柄山以南では、約20°東に振って直線的に南流しており、復元されている条里に平行する。現在の船場川は市川と比較すると小規模な河川であるが、本来は市川の本流であったと考えられており、姫路城主池田輝政が城下を水害から守るために瀬替を行い、現在の市川の流れになったとされる。『播磨国風土記』には、市川は小川と記され、西側に大川が存在したとされており、『大日本地名辞典』では船場川を大川に比定している。



第1図 飯田遺跡(姫路市)の位置

第2節 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

姫路市内の旧石器時代の遺跡としては国分寺台地遺跡や御着城跡、兼田遺跡などが挙げられるが、これらは市川の東岸に立地しており、飯田遺跡周辺に限ると、手柄山北丘遺跡（61）、池ノ下遺跡（45）が挙げられるのみである。これらの遺跡からは、ナイフ形石器や槍先形石器が出土した。

縄文時代に入ると遺跡数は増加し、船場川沿いには大鳥遺跡（11）や飯田カスカエ遺跡（7）、畠田遺跡（3）、橋詰遺跡（59）、椎現遺跡（20）、堂田遺跡（49）などが形成される。その他、市内における当該期の著名な遺跡としては、中期の屈葬人骨や晩期の土器棺が検出された辻井遺跡や彩文土器などの出土品が県指定文化財となっている丁・柳ヶ瀬遺跡などが挙げられる。

弥生時代

弥生時代になると遺跡数は飛躍的に増大する。JR姫路駅の東に位置する市之郷遺跡は西播磨における拠点集落の一つで、弥生時代前期の木棺墓や中期・後期の堅穴住居跡などが多数検出された。姫路城北西部に位置する八代深田遺跡では中期から後期の土器がまとまって出土しており、編年資料とされる。JR姫路駅周辺には南畠町遺跡（67）、豆腐町遺跡（70）がある。南畠町遺跡、豆腐町遺跡は、弥生時代中期から營まれた遺跡で河道や土坑が確認されている。

飯田遺跡の対岸には、畠田遺跡（3）が存在し、姫路市教育委員会による発掘調査によって、弥生時代中期から集落が營まれていたことが判明している。また、後期から庄内期にかけては堅穴住居や円形周溝墓が築かれ、飯田遺跡と同時期にも大規模なムラを形成していたことが明らかとなった。

古墳時代

古墳時代中期には姫路市御国野町に全長145mの前方後円墳である壇場山古墳や一辺60m前後の方墳である山之越古墳が相次いで築造される。飯田遺跡の周辺では、中期末から後期にかけて、手柄山北丘古墳群（60）や手柄山南丘古墳群（53）、御旅山古墳群（83）などが築かれる。

集落遺跡である小山遺跡（57）では、初期須恵器が出土している。市之郷遺跡も継続して集落が營まれており、韓式土器などの渡来系遺物が多数出土している点は注目される。

飯田遺跡の北側には、弥生時代末から古墳時代初頭の集落遺跡として著名な長越遺跡（2）が立地しており、これまでの調査から、飯田遺跡は本来長越遺跡と同一の集落であったと考えられている。長越遺跡からは、堅穴住居跡が多く検出され、庄内式土器が多数出土した。また、在地の土器だけでなく、他地域の土器も多く出土しており、西播磨地域における交易拠点的な性格を有していたとみられる。上述の畠田遺跡も、弥生時代末から古墳時代前期にかけて最盛期をむかえ、堅穴住居跡や柵列などが確認され



第2図 塚上山古墳(南西から)

ている。また、軟質土器や初期須恵器なども出土しており、渡来人の存在が想定される。

奈良時代以降

姫路南側に位置する本町遺跡（73）は播磨国府と推定されており、「播磨国府系瓦」と呼ばれる瓦や碇などの遺物が大量に出土している。JR姫路駅付近に広がる豆腐町遺跡や北条遺跡（77）では、掘立柱建物跡や井戸などの遺構が検出されるとともに、墨書き土器や漆紙文書・二彩壺・円面鏡などの官衙的遺物が多く確認できる。豆腐町遺跡では鉄滓や羽口、多量の製塙土器などが出土することから、播磨国府に付随する工房としての機能を有していたと考えられる。

中世の集落は、市之郷遺跡・北条遺跡・畑田遺跡・南通り遺跡（35）などで調査が行われており、墓や掘立柱建物跡が検出されている。しかし、中世の姫路については不明な点が多く、奈良時代から平安時代にかけて整備拡充されたとみられる国府は、律令制の衰退に伴い、次第にその機能を失っていったと考えられる。以後、姫路が再び播磨の中心地となるのは、黒田氏による姫路城の築城期、さらに羽柴秀吉による初期城下町の形成期である。

近世に入ると、池田輝政によって現在の姫路城（72）の建築及び城下町（71）の整備が行われた。その後、城下町として発展を続け、明治維新を経た後も、その方向性は維持される。明治21年（1888年）12月には、山陽鉄道会社により、兵庫－姫路間の鉄道が開通した。豆腐町遺跡では、兵庫県教育委員会による発掘調査によって、初代及び2代目の機関車転車台や扇形車庫が見つかっている。



第3図 長越遺跡調査状況(昭和49年度調査)



第4図 姫路城跡(南から)

第5図 姫路市街地遠景(南東から)



第6図 飯田遺跡周辺の遺跡

表1 飯田遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代	No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代
1	飯田遺跡	姫路市飯田	弥生～古墳	42	大淨口道路	姫路市玉手	中世
2	長越遺跡	姫路市飯田	弥生～古墳	43	丁田遺跡	姫路市町坪～中地	弥生～古墳
3	畑田遺跡	姫路市飯田	縄文～中世	44	豆田遺跡	姫路市町坪	平安～中世
4	竹の前遺跡	姫路市手柄	弥生～古墳	45	池ノ下遺跡	姫路市苦縮 他	平安～中世
5	三宅遺跡	姫路市飾磨区 三宅1丁目 他	奈良	46	四ツ池遺跡	姫路市苦縮 他	古墳
6	善慶寺遺跡	姫路市飯田	弥生～古墳	47	法輪寺山遺跡	姫路市井ノ口	弥生
7	飯田カスカエ遺跡	姫路市飯田	縄文～古墳	48	村前遺跡	姫路市井ノ口	弥生
8	カスカエ遺跡	姫路市飯田	弥生～平安	49	堂田遺跡	姫路市岡田	縄文
9	石ヶ坪遺跡	姫路市亀山	縄文～弥生	50	八反長道路	姫路市岡田	弥生
10	菴山田遺跡	姫路市飯田	平安	51	町田遺跡	姫路市岡田	古墳
11	大鳥遺跡	姫路市飯田	縄文	52	土山遺跡	姫路市西庄	弥生
12	構遺跡	姫路市飾磨区 構3丁目	縄文～弥生	53	手柄山南丘古墳群	姫路市西延末	古墳
13	真福寺遺跡	姫路市飾磨区 構5丁目	弥生～古墳	54	生矢神社裏遺跡	姫路市手柄	弥生
14	大塚遺跡	姫路市飾磨区 構5丁目	弥生	55	浜田遺跡	姫路市手柄	弥生
15	大町遺跡	姫路市飾磨区 構5丁目	弥生	56	古屋敷遺跡	姫路市 手柄1丁目	弥生～古墳
16	東久保遺跡	姫路市中地南町	弥生	57	小山遺跡	姫路市延末	弥生～古墳
17	邨東遺跡	姫路市中地	弥生	58	黒表遺跡	姫路市東延末	弥生～古墳
18	西久保遺跡	姫路市中地南町	弥生	59	横詰遺跡	姫路市延末	縄文～古墳
19	中地天神遺跡	姫路市中地南町	弥生～中世	60	手柄山北丘古墳群	姫路市西延末	古墳
20	推現遺跡	姫路市中地南町	縄文～弥生	61	手柄山北丘遺跡	姫路市西延末	旧石器～古墳
21	中ノ町遺跡	姫路市玉手	弥生	62	手柄山北丘頭上古墳	姫路市西延末	古墳
22	大石橋遺跡	姫路市玉手	弥生～中世	63	山崎遺跡	姫路市西延末	弥生
23	東川遺跡	姫路市玉手	弥生	64	村瀬遺跡	姫路市延末 1丁目	弥生
24	石田遺跡	姫路市飾磨区 構4丁目	縄文～弥生	65	君田遺跡	姫路市東延末	弥生
25	南雲遺跡	姫路市飾磨区 構3丁目	弥生～古墳	67	南畠町遺跡	姫路市南畠町	弥生
26	坂川遺跡	姫路市飾磨区 構1丁目	古墳	68	千代田遺跡	姫路市千代田町	縄文～弥生
27	タテノ遺跡	姫路市飾磨区 構1丁目	弥生～古墳	69	今宿丁田遺跡	姫路市東今宿 1～4丁目	縄文～奈良
28	石や田遺跡	姫路市飾磨区 加茂北	古墳～中世	70	豆腐町遺跡	姫路市豆腐町	弥生～平安
29	今在家平塚遺跡	姫路市飾磨区 今在家7丁目	古墳	71	堀城城下町跡	姫路市西二階町 他	近世
30	栗木遺跡	姫路市飾磨区 今在家6丁目	弥生～古墳	72	特別史跡姫路城跡	姫路市本町	近世
31	加茂遺跡	姫路市飾磨区加茂	中世	73	本町遺跡	姫路市紀本町	奈良
32	横石田遺跡	姫路市飾磨区構	中世	74	駅前町遺跡	姫路市南駅前町	弥生～近世
33	光明寺跡	姫路市飾磨区御堂	中世	75	朝日町遺跡	姫路市北条	弥生～奈良
34	西通り遺跡	姫路市飾磨区中島	古墳～中世	76	神屋町遺跡	姫路市神屋町 3丁目	弥生～平安
35	南通り遺跡	姫路市飾磨区中島	平安～中世	77	北条遺跡	姫路市北条	弥生～古墳
36	ヒジ倉遺跡	姫路市飾磨区阿成	古墳～中世	78	国府山城跡、 甲山遺跡	姫路市飾磨区妻鹿	弥生、中世
37	横枕遺跡	姫路市玉手	中世	79	甲山經塚跡	姫路市飾磨区妻鹿	中世
38	出手遺跡	姫路市玉手	中世	80	御旅山12号墳	姫路市飾磨区妻鹿	古墳
39	鹿谷道遺跡	姫路市玉手	弥生～中世	81	御旅山14号墳	姫路市飾磨区妻鹿	古墳
40	城田付城跡	姫路市飾磨区高町	中世	82	舞磨高等学校周辺遺跡	姫路市飾磨区妻鹿	弥生
41	辻堂遺跡	姫路市玉手	中世	83	御旅山古墳群	姫路市飾磨区妻鹿	古墳

第2章 調査の概要

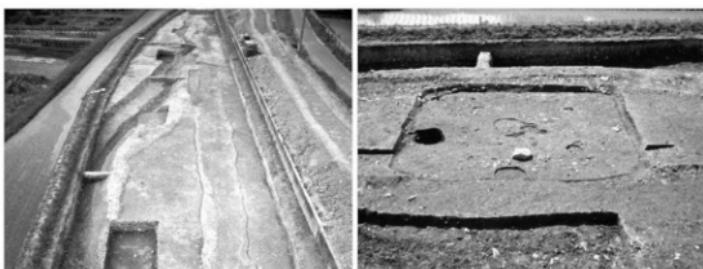
第1節 調査に至る経緯

姫路平野を南流し、姫路城の西側外堀の機能も果たす船場川は比較的の水量が多い河川であるが、川幅が狭く、河床勾配が緩やかなため、大雨の際に越流し、姫路市街地の低い部分が浸水することが重なった。そのため、船場川の河川改修事業が計画されることとなり、河口から順次施工されている。これまでに、昭和43年～平成4年には高潮対策事業として、昭和51年～昭和56年には激甚災害対策特別緊急事業として、昭和58年からは都市一般河川改修事業として、河川拡幅及び河床掘削が行われてきた。これらの河川改修事業に伴って、兵庫県教育委員会では河口側から順に調査を実施している。

今回の調査の契機となった（二）船場川水系船場川流域治水対策河川事業に伴って行われた平成13年度の分布調査では、土器片が数点採集された（遺跡調査番号2001232）。また、事業予定地は著名な集落遺跡である長越遺跡の南東に接し、船場川の対岸には畠田遺跡（平成13年度当時は「仮称船場川東区遺跡」と呼称）が立地するなど、周辺に弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落が広がることから、当該地においても遺跡の存在が予想された。

そのため、平成14年度には兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土本事務所（当時）からの依頼（平成14年4月19日付け中播（姫土）第227号）により、飯田橋以南で確認調査を行った（遺跡調査番号2002075）。調査は飯田橋以南の、幅20m、長さ220mの範囲内に、 2×4 mを基本としたトレンチを14ヶ所設定し、平成14年6月10日・11日の2日間で実施した。確認調査の結果、全面に広がる遺物包含層や溝などの遺構の存在が明らかとなった。包含層中からは主に弥生時代後期の土器片や須恵器片等が出土している。

確認調査の成果を受け、協議を行った結果、本発掘調査が必要とされ、兵庫県中播磨県民局長の依頼（平成15年2月18日付け中播（姫土）第2980号・平成15年10月31日付け中播（姫土）第1964号）を受け、平成15年度に兵庫県教育委員会が2回にわたって本発掘調査を行った（遺跡調査番号：2003003・2003212）。1回目の調査は平成15年5月19日～6月30日、2回目は平成15年12月22日～平成16年1月30日に行われた。調査の結果、5棟の竪穴住居跡や溝が検出され、弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が多く出土した。なお、調査成果から、畠田遺跡は長越遺跡と一連の遺跡であると考えられたた



第7図 平成15年度調査風景（「播磨・長越遺跡Ⅱ」より引用）

め、報告は「長越遺跡」の名称で行われ、書名も『播磨・長越遺跡Ⅱ』として刊行された。

1回目の本発掘調査時に、飯田橋以北での確認調査を併せて実施することとなり、長越橋から飯田橋間の南北約110m、東西約20mの範囲でトレンチを5ヶ所設定した(遺跡調査番号2003004)。調査の結果、北側においても溝や土坑状の落ち込みが検出された。また、トレンチの全面で遺物包含層が確認され、飯田橋以北においても遺跡が広がることが明らかとなった。遺物包含層は古墳時代初頭の土器片を大量に含んでおり、畿内や瀬戸内、山陰など他地域の特徴をもつものも確認された。

このため、飯田橋以北においても本発掘調査が必要となり、再び中播磨県民局長の依頼(平成20年7月22日付け中播(姫土)第1255号)を受け、平成20年度に兵庫県立考古博物館が本発掘調査を実施した(遺跡調査番号：2008171)。平成20年度調査では、堅穴住居跡14棟、溝11本など多くの遺構が検出された。また、調査区の南半を北東から北西に流れる幅14.5mの旧河道も検出されており、昭和49・50年度に行われた長越遺跡Ⅰの調査において検出された大溝との関係が指摘されている。出土遺物は古墳時代初頭の古式土師器が多く、遺構の大部分も当時期に属すると考えられる。調査成果から、平成15年度調査と同様に長越遺跡の一部であると判断されたため、当調査の報告書は『播磨・長越遺跡Ⅲ』の名称で平成24年3月に刊行された。

平成20年度調査において、遺構が調査区を超えて、東に続くことが明らかとなったが、當時調査区と船場川の間に舗装路が通っており、調査を行うことが不可能であった。そのため、舗装路の撤去が完了した後、平成26年度に中播磨県民センター長の依頼(平成26年4月7日付け中播(姫土)第1017号)を受け、未調査であった箇所の本発掘調査を実施することとなった(遺跡調査番号：2014130)。なお、調査は兵庫県教育委員会の委託を受け、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターが行った。



第8図 平成20年度調査風景
(『播磨・長越遺跡Ⅲ』より引用)

第2節 発掘調査の概要

平成20年度調査結果を受けて、平成26年度に本発掘調査を実施した。平成27年1月14日(水)に調査準備に入り、調査範囲を確定した。範囲は南北方向に約40m、東西方向に約8mの長方形を呈する。なお、調査区は10mごとに分割し、北から1区、2区、3区、4区と呼称した。16日(金)から機械掘削を開始した。平成20年度の調査結果を参考とし、盛土・旧耕土等を重機によって除去した。1区は掘削深度が深くならないことから、全面と同じ深さで掘削したが、2区以降は掘削深度が増したため、東側を2段掘りとして安全の確保を図った。なお、掘削残土は河川改修事業用地内に仮置きした。

20日(火)には、機械掘削が進み、安全な距離を確保できる状態となつたため、人力による掘削を開始した。なお、機械掘削は1月27日に完了した。人力掘削では、遺物包含層を掘削し、遺物の回収に努めた。遺構面については、包含層掘削後に精査を行い、遺構の検出を図った。その結果、1～2区北半で堅穴住居跡や土坑、柱穴等を、2区南半～4区で旧河道を検出した。検出した遺構は、写真

等による記録を行い、埋土を人力によって掘削した。遺構を掘削する際には、堆積状況を確認・記録するためにアゼを設定し、土層断面図の作成及び写真撮影を行った。また、遺物の出土状況についても適宜記録（写真撮影及び実測図作成）を行っている。全景写真は2月6日（金）に高所作業車を用いて、北、南、西の方角から撮影した。

遺構面全体図についてはヘリコプターによる空中写真測量とし、同時に調査区全景写真、遠景写真撮影を行った。撮影業務は株式会社オーシスマップに委託し、2月9日（月）に実施した。

2月10日（火）には記者発表を行い、14日（土）には現地説明会を開催して調査成果の公開を行った。説明会には播磨地域からだけでなく、他府県からも足を運んでいただくななど多数の参加者を得た（参加者計115名）。

2月18日（水）には現地にて、中間検査を受けた。その後、一部断ち割りや柱穴の完掘などの作業及び記録作成に20日（金）まで費やした後、現地で整理作業を行い、25日（水）に全ての調査を終了した。



第9図 飯田遺跡調査前風景（南から）



第10図 包含層人力掘削状況（西から）

調査体制

調査主体：兵庫県教育委員会

事務担当：兵庫県立考古博物館

館長 石野博信

副館長 若生晃彦

総務部埋蔵文化財課

課長 種定淳介

主査 山本 誠

主査 池田征弘

調査担当：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部調査第2課

課長 平田博幸

副課長 中川 渉

技術職員 渡瀬健太

調査補助員 小谷義男

室内作業員 藤田由美

調査業務委託業者：有限会社戸田建設

空中写真測量委託業者：株式会社オーシスマップ

第3節 整理作業の概要

整理作業は平成27・28年度の2ヶ年で実施した。本発掘調査と同じく兵庫県中播磨県民センター長と兵庫県教育委員会が契約を交わし、兵庫県教育委員会からの委託を受けた公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターが作業を実施した。

平成27年度は出土遺物の水洗いから接合・復元、実測作業までを行った。なお、発掘調査時においても一部出土遺物の水洗いを行っている。平成28年度には遺物の写真撮影及び遺物実測図のトレース、遺構図面のトレースを実施し、報告書の原稿執筆及び編集作業を行った。いずれの年度も整理作業は兵庫県立考古博物館で行った。

整理体制

調査主体：兵庫県教育委員会

事務担当：兵庫県立考古博物館

名譽館長 石野博信

館 長 和田晴吾

副 館 長 小林亮介

埋蔵文化財課

課 長 山本 誠

主 査 池田征弘(平成27年度)、上田健太郎、深江英憲(平成28年度)

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課

課 長 高瀬一嘉(平成27年度)、多賀茂治(平成28年度)

副 課 長 池田征弘(平成28年度)、岡本一秀、長濱誠司(平成27年度)、

菱田淳子

調査担当：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部調査課

技術職員 渡瀬健太

嘱 託 員 石田典子、今村直子、上田沙耶香、上西淳子、小野潤子、

栗山美奈、佐々木誓子、鳥村順子、寺西梨紗、坂東知奈、

平宮可奈子、藤池かづき、宮田麻子、八木和子、吉村あけみ

第2表 飯田遺跡調査一覧(長越遺跡Ⅱ・長越遺跡Ⅲを含む)

調査年度	調査番号	調査種別	調査期間	担当者	調査面積(m ²)
2001	2001232	分布調査	2002/03/18	森内秀造	約2000
2002	2002075	確認調査	2002/06/10 ~ 06/11	山田清朝	112
2003	2003003	本発掘調査	2003/03/19 ~ 06/30	吉誠雅仁・渡込 異	858
2003	2003004	確認調査	2003/06/06 ~ 06/20	吉誠雅仁・渡込 異	47
2003	2003212	本発掘調査	2003/12/22 ~ 2004/01/30	吉誠雅仁・上田健太郎	309
2008	2008171	本発掘調査	2009/02/02 ~ 03/24	渡込 異・上田健太郎	440
2014	2014130	本発掘調査	2015/01/14 ~ 02/25	中川 渉・渡瀬健太	320



第 11 図 飯田遺跡・長越遺跡調査区の位置

第3章 調査の成果

第1節 遺構

1 概要

検出した遺構は、堅穴住居跡1棟・土坑6基・溝4条・柱穴数十基と旧河道である。柱穴の並びから4棟の掘立柱建物跡を復元できた。調査は古墳時代初頭と考えられる1面で実施したが、より上層には複数の耕作面も確認でき、古代から現代にかけて長期にわたり耕作地として利用されてきたことがわかる。

遺構は調査区北半部の微高地上に集中しており、南北に流れる旧河道沿いの微高地端部まで、認められる。調査区南半は全面が旧河道となり、遺構はみられない。

2 堅穴住居跡

堅穴住居跡を1棟検出した。平成20年度調査において検出された「SH01」の未調査部分である。

SH01(図版5 巻頭図版5 写真図版8~10)

調査区北西の西壁沿いで検出した隅丸方形プランの堅穴住居跡である。焼失住居であり、平成20年度の調査では多くの炭化材が出土した。炭化材には板材も認められ、板壁を有していたことが想定されている。平成20・26年度調査で行った自然科学分析では、壁材はコナラ属コナラ亜属クヌギ節、垂木はヒノキ、柱はコナラ属コナラ亜属コナラ節であるとの分析結果が示されている。

住居の規模は長辺4.7m、短辺4.4mを測り、幅約7~16cm、深さ約2~13cmの周壁溝をもつ。平面積は約20.7m²である。東半分は遺構面が削られており、北東部では周壁溝を確認することができなかった。南東辺と南西辺の一部では、周壁溝が2本平行して検出されており、内側の溝の規模は幅約8~16cm、深さ約5cmである。内側の溝が外側の溝を切っていることから、ほぼ同じ場所に建て替えが行われた可能性が考えられる。主柱穴はSP17及びSP19の2本であり、両柱穴からは柱材が立位で検出された。SP17の柱材は炭化した状態で、SP19は生木の状態で残る。柱穴間の距離は1.6mである。柱木の方向はN39°Wをとる。SP17は円形で、直径37cm、検出面からの深さ35cmを測る。SP19は掘形が南北方向に長く、長さ64cm、幅24cm、検出面からの深さ28cmを測る。両柱穴とともに直径13~15cmの柱を用いていたとみられ、ほぼ同規模の柱を立てていたと考えられる。

中央部には長軸約75cm、短軸約50cm、深さ約10cmの楕円形を呈する土坑がある。炭化材や土器片を含むものの、焼土や被熱痕跡はほとんど認められない。北西側にはL字状の高床部が認められる。高床部の掘には一部に溝状に掘りくぼめられた箇所が認められることから、高床部と低床部の境は板材による壁があった可能性が考えられる。また、南東側には、高床部は残存しないものの、北西側の高床部と対称の形状に溝が掘られており、逆L字状の高床部が設けられていたとみられる。なお、北東辺及び南西辺の中央部には高床部は続かない。高床部の幅は約1mである。本来の高床部の面は削平により失われており、低床部との比高差は現状で約5cmである。南辺の沿いの高床部が途切れる箇所には焼土を多く含むピットが存在しており、炉が存在していた可能性が考えられる。北東辺中央に

は周壁溝に隣接して台石(*S4*)が置かれる。上半部のみ被熱痕跡が認められることから、SH01が焼失した際に、上半が露出した状態であったとみられる。炉跡の可能性が考えられる箇所の対面に位置しており、壁際で高床部が途切れる箇所の中央に置かれることから、住居入口のステップとして転用された可能性も考えられる。

出土遺物は、土師器片が出土した。そのうち、甕や高杯、製塙土器など4点(*I*～*J*)を図化した。

3 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡を4棟復元した。いずれも1間×2間の建物である。

SB01 (図版6 写真図版11～12)

調査区の北東隅に位置する。南北方向は2.3m、東西方向は3.0mの規模をもち、平面積は約6.9m²である。桁行1.4～1.5m、梁間2.2～2.4mを測る。主軸方向はN54°Wをとる。

構成する柱穴はSP02、SP09、SP11、SP14、SP46、SP47である。柱穴は円形や梢円形で、直径32～40cmを測る。検出面からの深さは12～60cmで、柱穴底の標高は3.0～3.2mである。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は11～16.5cmである。柱穴からは土師器片が出土しており、弥生土器の壺底部や庄内甕体部、高杯脚部がみられる。そのうち残存状況が良好であったSP02から出土した高杯(*5*)を図化した。

SB02 (図版7 写真図版12～13)

調査区西壁沿い、SH01の南側に位置する。南北方向は3.6m、東西方向は3.2mで、約11.5m²の規模をもつ。桁行1.7～2.0m、梁間3.1～3.3mを測り、主軸方向はN34°Eをとる。構成する柱穴はSP06、SP07、SP23、SP30、SP36で、南西隅は調査区外に延びる。南西隅に当たる場所には前回調査において柱穴が検出されており、この柱穴がSB02を構成するものであると考えられる。柱穴は円形・梢円形が主であるが、SP23のみ、東西方向に長い振形をもつ。大きさは直径35～60cmを測り、検出面からの深さは43～58cmで、柱穴底の標高は2.9～3.2mである。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は12.5～21cmである。SP06、SP07、SP23、SP30には振形内に10～20cmの川原石を詰めている状況が認められた。中でもSP07は柱の周囲を取り巻くように石を組んでいる。旧河道に近く、地盤が軟弱であるため、柱を補強する意図があったとみられる。いずれの柱穴からも土師器片が出土しており、庄内甕体部や高杯脚部などが認められる。そのうち残存状況が比較的良好であったSP06から出土した高杯(*6*)を図化した。

SB03 (図版8 写真図版12～14)

調査区北半部のはば中央、SH01の南東に位置する。南北方向は3.2m、東西方向は3.1mで、約9.9m²の規模をもつ。桁行1.6～1.7m、梁間3.1～3.3mを測り、主軸方向はN7°Wをとる。構成する柱穴はSP04、SP21、SP27、SP38、SP40、SP45である。柱穴は円形で、直径29～44cmを測り、検出面からの深さは32～54cmで、柱穴底の標高は3.0～3.2mである。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は11～25cmである。SP38及びSP40が、SB04を構成するSP37及びSP39にそれぞれ切られる。

SP38を除く各柱穴から、甕口縁部や胴部、製塙土器の脚部が出土した。そのうち残存状況が良好であったSP27出土の庄内甕口縁部(7)を図化した。

SB04 (図版9 写真図版12・14)

SB03とはほぼ同一の位置に築かれており、上述の通りSB03を切る。南北方向は2.9m、東西方向は2.5mで、約7.3m²の規模をもち、SB03に比べてやや小型である。桁行1.3~1.6m、梁間2.5~2.6mを測る。主軸方向はN14° Wをとる。構成する柱穴はSP05、SP20、SP35、SP37、SP39、SP41である。柱穴は円形・梢円形で、直径26~37cmを測り、深さは21~46cmで、柱穴底の標高は30~3.2mである。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は13~22cmである。柱穴埋土中からは庄内甕の肩部や鉢の体部などが出土したが、いずれも小片で摩耗が激しいため、図化は行っていない。

4 土坑

SH01内の土坑を除き、6基の土坑を検出した。いずれも性格は不明である。

SK01 (図版10 写真図版16)

1区北端中央部で検出した土坑で、南北51cm、東西52cmの円形を呈する。深さは約9.5cmで、底部は平坦である。遺物の出土は少なく、土師器小片のみが出土している。

SK02 (図版10 写真図版16)

SK01の東側、1区北端中央部で検出した土坑で、長さ92cm、幅64cmの梢円形を呈する。深さは約18cmで、底部はU字形である。長軸の方針はN55° Wをとる。遺物の出土は少なく、土師器小片のみが出土している。

SK03 (図版10 写真図版16)

規模は長さ2.0m、幅0.9mの細長い不整形を呈し、深さは最も深い箇所で約15cmを測る。長軸の方針はN75° Eをとる。埋土中には白色の粘土ブロックや焼土、炭化物などが含まれる。焼土及び炭化物は中央部に多く認められる。甕口縁部や底部、庄内甕の口縁部や胴部などの土師器片が出土した。そのうち、残存状況の良い土師器の壺や鉢など4点(8~II)を図化した。

SK04 (図版10 写真図版17)

SK03を切る土坑で、長さ90cm、幅66cmの水滴形を呈する。上部が削平されているとみられ、深さは浅く、約6cmである。底は平坦で、埋土には青灰色のシルトがブロック状に入る。遺物は土師器片が数点出土しており、壺の口縁部や庄内甕の体部と考えられるが、いずれも小片のため図化は行っていない。

SK05 (図版11 写真図版17)

2区の西端で検出した土坑であり、SD01を切る。3方を平成20年度調査で検出された遺構や擾乱によって切られており、北辺のみ残存している。残存長1.4m、残存幅1.4mである。埋土中からは土師器片が出土したが、小片で摩耗が激しく、器種も不明である。

SK06 (図版11 写真図版17)

2区の南西寄りで検出した土坑である。長さ1.4m、幅0.6mの不整形を呈する。深さは約20cmで、底部は平たく掘りこまれている。埋土中には炭化物や3cm大の円錐を含む。上層から庄内甕や高杯などの土師器片が出土した。そのうち、5点(12~16)を図化した。

SK07 (図版1 写真図版17)

2区の中央部付近で検出した土坑である。長さ1.2m以上、幅1.2mの不整梢円形を呈する。深さは約24cmである。微高地の端に位置しており、庄内甕が2個体(17~18)出土した。

5 溝

SH01に伴う周壁溝を除き、4条検出した。

SD01 (図版11 写真図版17)

調査区中央部で検出した幅10.2~32cmの溝で、長さは3.6mである。主軸はN49.5° Eをとる。深さは11cmを測り、横断面はU字形を呈する。SD04を切る。出土遺物は少なく、小片のみである。

SD02 (図版11 写真図版18)

調査区西壁沿いで検出した幅10~14cmの溝で、残存長23m、深さ約8cmである。主軸はN30.6° Eであるが、北端から約20mでS39° E方向に屈曲する。平面形状から堅穴住居の周壁溝であった可能性も考えられる。SD03、SB03(SP45)、SB04(SP35)に切られる。出土遺物は小片のみである。

SD03 (図版11 写真図版17)

1区南端の西壁沿いで検出し、規模は幅48~56cm、残存長89cmである。深さは約7cmである。主軸方向はS69.5° Eをとる。SD02を切っており、SB02(SP36)に切られる。出土遺物は少なく、小片のみである。

SD04 (図版11 写真図版17)

1区中央部から2区の北手にかけて検出し、規模は幅44~72cmを測る。残存状況は悪く、所々途切れている状態で検出された。残存長は5.6m、深さは6.5cmである。主軸方向はN62° Eをとる。SK03、SB02(SP07)、SD01に切られる。庄内甕や壺の口縁部が出土しているが、いずれも小片のため、図化していない。

6 旧河道（図版1 写真図版18~20）

北東から南西に向けて流れていたとみられ、調査区の南半はほぼ全域が旧河道内に含まれる。流れは安定しなかったと考えられ、遺構が検出された微高地上にも氾濫によるとみられる土砂の堆積が認められる。2区以南は、深さが増し、何層にもわたる堆積が認められる。深さは1.26m以上を測る。下層は砂礫層（堆積状況確認トレント東壁第9~11層）で、その上に土壤化したシルト層と砂層が交互に堆積する（東壁第25層・堆積状況確認トレント東壁第4~8層）。なお、これらの層には遺物は含まれない。砂層の上には灰色極細砂質シルト（東壁第23層）や黒色シルト～細砂層（東壁第21層・調査区中央部アゼ南壁第10層）、灰黄褐色粗砂混じりシルト質極細砂層（調査区中央部アゼ南壁第9層）が堆積しており、弥生時代末から古墳時代初頭の遺物を大量に含む。その上には7~10単位程度の植物遺体とシルトの互層からなる土層が認められる（東壁第17~20層）。植物遺体には、イネ科植物の葉や樹皮の残る木片が多く含まれる。旧河道の埋没が進んだ状況においては、ヨシなどの植物が多く生息する湿地のような状態であったと考えられる。東壁第17層上面からは古墳時代後期の須恵器壺が比較的残りの良い状態で出土しており、古墳時代後期には埋没が進んだ状態であったことが推測できる。

第2節 出土遺物

1 土器

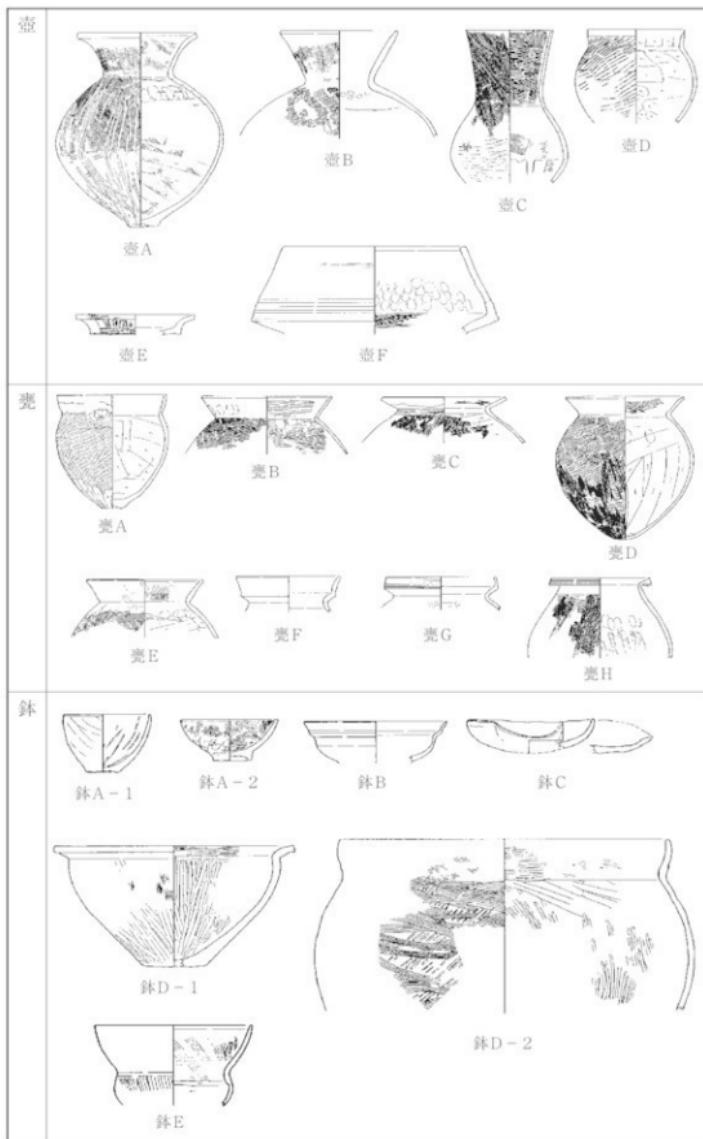
器種ごとに分類し、報告する。壺は6種に分けられる。壺Aは頸部から外反して広がる口縁部をもつ広口壺、壺Bは頸部から外傾し、直線的にのびる口縁部をもつ直口壺、壺Cは長頸壺、壺Dは短頸壺、壺Eは二重口縁壺、壺Fは四国東部系のものである。

甕は8種に分けられる。甕Aは鏡内V様式の系譜を残すもの、甕Bは庄内甕で外面にタタキを残すもの、甕Cは庄内甕で外面にタタキを残さない甕、甕Dは庄内甕で河内からの搬入品、甕Eは布留傾向甕、甕Fは山陰系の二重口縁のもの、甕Gは吉備系のもの、甕Hは弥生土器である。

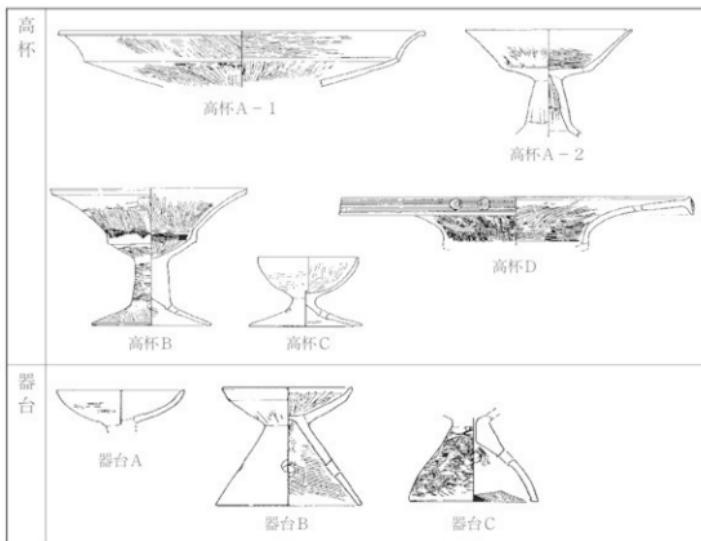
鉢は5種に分類した。小型で単純な口縁をもつものを鉢Aとし、そのうち器高が高いものをA-1、低いものをA-2とする。鉢Bは小型で二重口縁をもつもの、鉢Cは浅い皿状を呈するもの、鉢Dは大型のもので、口縁部が外反して外側に広がるものをD-1、内湾しつつ上方に延びるものをD-2に細分した。鉢Eは小型丸底鉢である。なお、小型丸底壺についても鉢Eにまとめている。

高杯は4種に分けられる。高杯Aは杯部が稜線によって下半部と上半部に分割される有稜高杯である。大型のもの（A-1）と小型のもの（A-2）に細分できる。高杯Bは杯部上半部に段をもつ有段高杯、高杯Cは椀状の杯部をもつ椀状高杯である。高杯Dは凹線や浮文によって装飾が施された装飾高杯である。杯部と脚部の接合には複数の製作技法が認められる。本調査において確認できた技法は、脚部を先に作成し、脚頂部側面に粘土を張り足して杯部を成形する「付加法」と平坦な脚頂部を杯底部に差し込むようにして、接合する「脚頂部凸面接合法」である。

器台は3種に分けられる。器台Aは浅い皿状の受部をもち、端部が尖るもの、器台Bは直線的な受部をもち、端部を上方に屈曲させ、棱をもつもの、器台Cは内湾する脚部をもつものである。



第12図 壺・甕・鉢の分類



第13図 高杯・器台の分類

(1) 壺穴住居跡出土遺物

SH01出土遺物（1～4）（図版12 写真図版21）

壺穴住居跡出土の土器片は全体的に保存状態が悪い。**1**は壺Fで、搬入品と考えられる。北東隅部から出土した。内外面ともに強いヨコナデが施される。口縁部は外反し、端部を丸く收めている。胎土は比較的精良で、0.5mm以下の細かい砂粒を多く含む。外面はにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。因縁VI-2期に属すると考えられる。**2**は壺Aの底部と考えられる。ドーナツ底で、底径は5.3cmを測る。外面には右上がりのタタキが、内面には横・縦方向のハケメが施される。胎土は比較的精良で、0.5～3mm大の白色砂粒を含む。外面は浅黄色を、内面は黄灰色を呈し、両面ともに黒斑が認められる。**3**は高杯Cの杯部である。残存状況は良くないが、口径を復元すると11.9cmとなる。杯部は内湾し、口縁端部は丸い。杯部中央には沈線が1条施される。中央土坑中より出土した。外面はナデによって整形される。内面は摩滅により不明瞭であるが、ヘラミガキ状の痕跡が認められる。胎土は精良で、0.5～2mm大の白色砂粒をわずかに含む。内外面ともに灰白色を呈し、断面は暗灰色である。外面には黒斑がみられる。**4**は脚台Ⅲ式の製塩土器である。中央土坑から出土した。体部はユビ成形の後ナデによって整形され、内面には工具痕が認められる。体部は内湾し、脚部は斜め下方に直線的に伸び、端部を丸く收める。胎土は粗く、1～3mm大の赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。内面はにぶい黄橙～浅黄橙色、外面は黄灰色を呈する。

(2) 挖立柱建物跡出土遺物

SB01出土遺物（5）（図版12 写真図版21）

5は器台Dである。SB01-SP02より出土した。脚柱部から脚裾部で、脚裾部が直線的に広がる。外面の調整は摩減により不明瞭であるが、脚柱部には縦方向の板ナデ、脚裾部にはヨコナデを施す。なお、脚柱部の下端には、一部にタタキ状の調整痕も確認できる。内面の調整は脚柱部、脚裾部とともにナデが施される。胎土は0.5～25mm大の赤色砂粒や白色砂粒を多く含み、粗い。内面は橙色から灰黄褐色、外面は橙色を呈し、一部黒褐色となる。

SB02出土遺物（6）（図版12 写真図版21）

6は高杯である。SB02-SP06から出土した。中空の脚柱部から、明確な屈折点をもって脚裾部がさらに広がり、端部は尖る。脚柱部外面には縦方向の板ナデが、脚裾部にはヨコナデが施される。内面には絞り目が認められる。また、脚裾部には径1cmの円形透孔が3ヶ所みられる。「付加法」により作成されたとみられる。胎土はやや粗く、0.5～2mm大の赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色～浅黄色を呈する。

SB03出土遺物（7）（図版12 写真図版21）

7は壺Bである。SB03-SP27から出土した。口縁部が外傾し、端部は丸く收める。外面は口縁部にはヨコナデ、肩部には目の細かい右上がりのタタキが施される。内面は横方向のハケメを行う。胎土は比較的精良で、0.5～1mm大の白色砂粒をまばらに含む。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄褐色である。外面にはススが厚く付着する。口縁部外面に、明瞭にヨコナデを施すことから庄内4に相当すると考えられる。

(3) 土坑出土遺物

SK03出土遺物（8～11）（図版12 写真図版21）

8は壺Bである。口縁部が外傾し、長く延びる。端部は尖る。体部は大きく内湾する。口縁部外面はヨコナデによって調整されるが、粘土の垂ぎ目が明瞭に観察できる。粘土紐1段の高さは約1.4cmである。体部外面には右上がりのタタキを行った後ハケメを施す。内面調整は口縁部下半から肩部にかけて横方向のハケメを施し、体部上方には斜め方向の強いユビナデが、下方には横方向のヘラケズリがみられる。肩部外面にはヘラ描きの沈線がU字状に入る。胎土はやや粗く、2mm以下の赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色を呈する。庄内3と考えられる。9は壺Aの口縁部から頸部である。頸部が強く外反し、口縁端部を上方につまみ上げて面を作る。外面調整は頸部に縦方向のハケメの後縱方向のヘラミガキを施す。内面は口頸部上半に横方向のヘラミガキ、頸部下半に横方向のハケメやユビナデを行う。頸部内面の中央には粘土の接合痕が認められる。胎土は比較的精良で、2mm以下の暗灰色砂粒をまばらに含む。内外面ともに灰白色から橙色を呈する。庄内2～3の可能性がある。10は壺Bと考えられる。歪みが大きく、円弧を描く部分から、図上で復元を行ったが、詳細な口径や傾きの復元は難しい。頸部から直線的に伸び、端部は尖る。中央部にはわずかに段をもつ。全体が強く摩減しているため、調整は不明である。胎土は粗く、1～2mm大の赤色砂粒や

灰色砂粒を非常に多く含む。内外面ともに灰白色からにぶい黄橙色を呈する。*I1*は口縁部の破片資料であるが、大型の鉢と思われる。口縁部端部を肥厚させて上方に面を形成する。外面は全体にヨコナデを施し、内面には口縁部～頸部上半にヨコナデ、下半に板ナデを施す。口縁端部の面には、沈線が1条入る。胎土はやや粗く、2mm以下の白色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色を呈する。

SK06出土遺物(12~16) (図版12 写真図版22)

*I2*は壺Bである。体部は球形に近く、口縁部は外傾し、端部を上方につまみ上げる。外面調整は口縁部にはヨコナデを施し、体部には右上がりの細いタタキを行う。その後、左斜め上方向にハケメを施す。内面は口縁部に横方向のハケメを施し、肩部以下は横～斜め方向のヘラケズリを行う。胎土は1mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を多く含み、やや粗い。内外面ともに灰白色を呈し、外面には大きな黒斑が認められる。庄内4に位置づけられる。*I3*は壺Bである。口縁部は外傾し、端部を内側上方につまみ上げる。外面調整は口縁部にはヨコナデを施し、体部には右上がりの細いタタキを行う。その後、左上がりのハケメを施す。内面は口縁部～肩部にかけて横方向のハケメを施し、体部には横方向のヘラケズリの後斜め方向の強いヘラナデが施される。胎土は1mm以下の白色砂粒や暗灰色砂粒を多く含み、やや粗い。内外面ともに灰白色を呈し、両面ともに黒斑が認められる。布留1に位置づけられる。*I4*は壺Aの体部下半から底部である。ドーナツ底で、体部はゆるく内湾する。体部の器厚はやや厚い。外面には縱方向のハケメを施す。内面には板ナデを行っており、板状工具痕が多くみられる。胎土は1mm以下の赤色砂粒や石英を含み、比較的精良である。内面は褐灰色から黒色を、外面はにぶい黄橙色から黒褐色を呈する。庄内1とみられる。*I5*は高杯の脚部である。脚柱部は中実で、脚裾部は水平に近い状態で広がる。外面調整は、脚柱部には縱方向のヘラミガキを、脚裾部には縱方向のハケメの後ヨコナデを施す。内面には、ハケメを施した後弱いヨコナデによって仕上げている。また、脚柱頂部にヘラミガキが認められることから、「付加法」によって製作されたことが推測できる。胎土は精良で、0.8mm以下の白色砂粒や石英を少量含む。内外面ともににぶい黄橙色から褐灰色を呈する。*I6*は大型の鉢もしくは瓶の可能性が考えられる。体部は直線的に伸び、端部が肥厚し、面をもつ。外面調整には縱方向のハケメが、内面調整には斜め方向の板ナデがみられ、端部周辺にはユビオサエや横方向のヘラケズリが施される。外面調整は目の細かいハケメの後に目の粗いものが施されており、2種類の工具を用いていたことが推測できる。内外面ともに粘土紐の接合痕が顕著に認められ、各粘土紐の幅は約1.3cmである。胎土は在地のものとみられ、1mm大の赤色砂粒や暗灰色砂粒、石英を多く含み、粗い。内面は黄灰色、外面は灰白色から黄灰色を呈する。

SK07出土遺物(17~18) (図版12 写真図版22)

*I7*は壺Bである。球形の体部で、口縁部はわずかに外反する。端部は角張り、面をもつ。底部は丸底である。外面調整は、口縁部にユビオサエやヨコナデ、体部には右上がりのタタキの後下半部に目の粗いハケメを施す。内面は口縁部に横方向の板ナデによる調整が行われ、板状工具痕が認められる。体部はユビオサエの後に強めの板ナデが施される。胎土は2mm以下の赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含み、やや粗い。色調は内外面ともに灰白色から褐灰色を呈し、口縁部や体部の外面にはススが

付着し、体部内面の下半にはコゲがみられる。庄内4に属すると考えられる。*I8*は壺Aである。倒卵形の体部をもち、口縁部はゆるく外反し、端部は丸い。底部は尖底であるが、一部焼き爆ぜている。外面は口縁部にはヨコナデ、体部には右上がりのタタキの後縦方向のハケメを施す。内面は全体を横方向のハケメによって調整する。胎土はやや粗く、1mm大の赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。内面は灰白色を、外面は灰黄褐色から灰赤色を呈し、口縁部や体部の外面にはススが付着する。庄内3～4か。

(4) 旧河道出土遺物

旧河道中から出土した土器は大半が東壁第21層から出土している。弥生時代後期から布留初期にかけての遺物が含まれ、中でも庄内3から布留1に位置づけられるものが多くみられる。上層に位置する黒色シルト層からは古墳時代後期のものと思われる須恵器壺が出土しており、古墳時代後期には埋没が進んだ状態であったことが推測できる。

壺(19～60) (図版12～15 写真図版23～27)

*19*は須恵器の短頭壺である。扁平な球形の体部で、頸部以上は欠損する。外面には回転ヘラケズリ、内面には回転ナデを施し、体部中央には幅0.5cmの浅い沈線が2条入る。TK209型式併行期に相当する。胎土は1～4mm大の砂粒をまばらに含むものの、比較的精良である。内外面ともに灰白色を呈する。旧河道埋土上層から出土しており、旧河道がほぼ埋没した状態の際に埋まったものと考えられる。

*20～28*は壺Aである。*20*は頸部が外反し、口縁端部を丸く収める。外面調整は口縁部～頸部にヨコナデが、肩部にはナデが行われ、一部横方向のヘラミガキもみられる。内面は口縁部～頸部にヨコナデが、肩部にユビオサエが施される。内面の頸部下端には粘土紐の接合痕が確認でき、幅1.3cmの粘土紐を用いていたことが分かる。胎土は比較的精良で、1mm大の砂粒を含む。内外面ともに灰白色を呈する。*21*は頸部が外反し、口縁端部は上方に肥厚し、面をもつ。頸部から口縁部にかけての外面調整は斜め方向のハケメが施され、肩部は右上がりのタタキの後ハケメで調整する。内面は口縁部には横方向のヘラミガキが、頸部にはナデが施される。胎土は精良で、0.5～1.5mmの砂粒をまばらに含む。内面は黄灰色から灰色、外面は黄灰色から灰白色を呈する。*22*は完形に復元することができた。球状の体部から頸部が外反して伸び、口縁端部は上方に肥厚する。底部は突出し、上げ底となる。外面調整は口縁部にヨコナデ、頸部に縦方向のハケメの後横方向のナデ、肩部以下から体部上半に右上がりのタタキの後縦から斜め方向のハケメを行い、その後縦方向のヘラミガキを加える。体部下半はタタキの後、縦方向のヘラケズリを行い、その後縦方向のヘラミガキを施す。内面調整は口縁部にヨコナデ、頸部に斜め方向のハケメの後ナデ、肩部から体部上半にユビオサエの後ナデ、体部下半に横方向のハケメを行う。体部内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残り、幅1.4～1.6cmの粘土紐を積み重ねて製作していることがわかる。胎土はやや粗く、2mm大の白色砂粒を多く含む。内面は明褐色から灰白色、にぶい橙色、外面は橙色から淡赤橙色を呈し、体部外面の中央には黒斑が生じる。*23・24*は、当初別個体として同化を行ったが、調整や胎土、色調が共通しており、接合点を持たないものの同一個体と判断した。球状の体部をもち、頸部はわずかに外反する。口縁部は外傾して、端部を大き

く肥厚させ、面を形成する。底部は尖底で、中央がわずかにくぼむ。外面調整は口縁部にヨコナデ、頸部に縱方向のヘラミガキ、肩部以下に縱から斜め方向のヘラミガキを施す。内面は口縁部にヨコナデ、頸部に横方向のヘラミガキ、肩部以下に板ナデやナデを行う。肩部内面にはユビオサエの痕跡も残る。また、体部内面下半には工具痕が複数確認できる。口縁端部外面に形成された面には径0.8~0.9cmの円形浮文が6ヶ所に認められる。口縁端部は約1/2残存していることから本来は12~13ヶ所程度浮文が貼り付けられていたと考えられる。胎土は比較的精良であるが、2mm以下の白色砂粒を多く含む。内面は灰白色からぶい赤褐色、外表面は赤褐色から褐灰色、灰黄褐色を呈し、底部外面に黒斑、頸部内面にススが付着する。**25**は口縁部から肩部の破片資料である。頭部は外反し、口縁端部が下にわずかに肥厚して面をもつ。器厚は厚く、重量感がある。外面調整は口縁部から頭部にかけて縱方向の板ナデの後ヨコナデ、肩部以下にヨコナデを施す。内面調整は口縁部から頭部にナデ、頭部から肩部にユビオサエを行なう。胎土はやや粗く、0.5~1mm大の白色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色を呈し、断面は暗めの灰色となる。**26**は頭部から肩部の破片資料で、口縁部がわずかに残る。頭部はわずかに外反し、口縁部は外側に大きく屈曲する。口縁端部は上下に肥厚し、面をもつ。外面調整は口縁部から頭部にヨコナデ、頭部下端から肩部上端に縱方向のハケメ、肩部以下に横方向のハケメを施す。内面は口縁部にヨコナデ、頸部に斜め方向のハケメ、肩部以下にユビオサエの後板ナデを行なう。胎土は精良で、1mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を少量含む。色調は内外面ともに灰黄色から橙色を呈し、頸部外面に黒斑が認められる。**27**は口縁部から体部が残存する。球形の体部から外反する頭部が伸びる。口縁端部は上下に肥厚し、面を形成する。外面調整は口縁部から頭部にかけてヨコナデ、肩部から体部中央にかけて縱方向のハケメ、体部中央以下に横方向のハケメを施す。内面調整は口縁部から頭部にかけてヨコナデ、肩部以下にユビオサエの後縱方向のナデを行なう。口縁端部の面は摩滅しているものの、3条の擬凹線が認められる。また、体部内面には粘土の接合痕が顯著に残り、幅1.6~2.3cmの粘土紐を積み重ねて製作していることが分かる。胎土はやや粗く、3mm以下の白色砂粒を多く含む。色調は内面が灰白色や黄灰色、にぶい黄橙色、外表面がにぶい黄橙色やにぶい橙色、灰白色となる。**28**は口縁部から頭部の破片資料である。頭部はわずかに外反し、口縁部は大きく外側に屈曲する。口縁端部は上下に肥厚し、面をもつ。外面調整は口縁部から頭部にかけて強いヨコナデを施し、わずかに残る肩部には横方向のハケメがみられる。内面調整は口縁部に強いヨコナデ、頭部に横方向のハケメ、肩部にユビオサエを行なう。胎土は比較的精良で、0.5mm~1.5mm大の白色砂粒や暗灰色砂粒を含む。内面は灰黄色から黄灰色、外表面は灰黄色を呈する。

29~37は壺Bである。**29~33**は口縁部が強く外傾し、広がる。**34~36**はわずかに外傾し、前述のものより口径が小さい。**37**はほぼ直立した口縁部をもつ。**29**は口縁部から頭部が残存する。口縁端部はわずかに屈曲し、丸く取める。外面調整は全面にヨコナデを、内面調整は口縁部に横方向のハケメを施す。頭部から肩部の上端にはユビオサエの後ナデを行なう。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒をわずかに含む。内外面ともに灰黄色を呈し、口縁端部に黒変する箇所が認められる。布留1と思われる。**30**は口縁部から体部上半が残る。口縁端部は丸く取める。外面調整は口縁部から頭部に縱方向のハケメ、肩部以下に右上がりのタタキを施す。内面調整は口縁部から頭部はヨコナデ、肩部上端にユビオサエ、体部にナデを行なう。他の壺B類に比べて口縁部の器厚が厚い。胎土はやや粗く、1~3mm大の赤色砂粒や白色砂粒を多く含む。内面は淡黄色から黄灰色、外表面は灰白色を呈する。**31**は

口縁部から肩部が残存する。口縁端部は内側に肥厚し、丸く仕上げる。外面調整は口縁部から肩部上半にかけて縦方向のハケメの後ヨコナデ、肩部下半に斜め方向のハケメを行う。内面調整は口縁部にヨコナデ、頸部に横方向のハケメ、肩部以下に横方向のヘラケズリを施す。胎土は比較的精良で、1mm大の白色砂粒や角閃石、黒雲母などの鉱物片を多く含む。口縁部は外外面ともに褐灰色を呈し、肩部以下はにぶい赤褐色となる。胎土や色調が在地のものと異なっており、河内地域からの搬入品の可能性が考えられる。庄内4～布留1と考えられる。**32**は口縁部～肩部が残る。口縁端部を肥厚させて面をつくる。調整は外外面ともに口縁部にはヨコナデを施す。わずかに残る肩部には外面に斜め方向のハケメ、内面にヘラケズリを行う。胎土は精良で、1mm以下の暗灰色砂粒をまばらに含む。色調は外外面とも灰白色から褐灰色を呈する。口縁端部には黒斑がみられる。**33**は口縁部から肩部まで残存する。口縁端部を上方につまむ。外面調整は口縁部から頸部にかけて縦方向のハケメ、肩部に右上がりのタタキを施す。内面は口縁部から頸部に斜め方向の板ナデの後ヨコナデ、肩部上方に縦方向の板ナデ、下方に横方向の板ナデを行う。頸部外面にはヘラ描きによる1条の波状文が描かれる。胎土はやや粗く、2mm以下の赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。色調は外外面とも灰白色を呈する。**34**は口縁部から肩部が残存する。口縁端部は丸い。外面調整は口縁部にナデ、頸部にヨコナデ、肩部に縦方向の板ナデを施す。内面は口縁部から頸部にヨコナデの後横方向のヘラミガキ、肩部にナデを行う。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒を含む。外外面ともに灰色から黄灰色を呈する。**35**は口縁部から肩部の一部が残る。口縁端部を丸く取める。外面調整は口縁部から頸部に縦方向のハケメの後、縦方向のヘラミガキを行う。内面調整は斜め方向のハケメの後、横方向のヘラミガキである。肩部内面にはユビオサエが残る。胎土は比較的精良で、2mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を含む。**36**は口縁部から体部が残存する。口縁端部は丸い。外面調整は口縁部から頸部に縦方向のハケメを施す。肩部以下には右上がりのタタキの後縦方向のハケメを施した後、部分的に強いナデを加える。一部にヘラミガキ状の痕跡も認められる。内面調整は口縁部から頸部は横方向のハケメの後ナデ、肩部以下にはハケメの後ユビオサエやナデを行う。内面には粘土紐の接合痕が明瞭に確認でき、幅1.2～1.4cmの粘土を積み重ねている。また、外外面の体部と頸部の境には粘土を貼り付けており、全体的に粗雑な作りである。胎土はやや粗く、3mm以下の赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。色調は外外面ともに灰白色から灰黄色を呈する。**37**は口縁部から頸部の破片資料である。口縁端部を丸く取める。外外面ともに板状工具による横方向のナデを施し、ハケメ状の痕跡が残る。外面には細いヘラ描きで線刻画を描く。胎土はやや粗く、2mm以下の赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。色調は外外面ともに灰白色を呈する。庄内3～4と思われる。

38は壺Cである。口縁部から体部下半部まで残存する。外傾し、直線的に伸びる長い頸部をもち、口縁端部は角張る。外面調整は口縁部から頸部にかけて斜め方向のハケメ、肩部に縦方向のハケメを施し、体部中央付近には右上がりもしくは横方向のタタキを行う。体部下半は不明瞭であるが、横方向のヘラミガキ状の痕跡が確認できる。内面調整は口縁部から頸部にかけて横方向のハケメ、肩部にナデ、体部中央以下に斜め方向のハケメを施す。内面には粘土の接合痕や工具痕もみられる。胎土はやや粗く、1mm大の赤色砂粒や白色砂粒を多く含む。内面は褐灰色や淡赤褐色、外外面は灰白色から明褐灰色を呈する。V期に位置づけられる。

39～40は壺Dである。**39**は口縁部から体部下半まで残存する。球形の体部をもち、頸部から口縁部

は直立する。外面調整は右上がりのタタキの後ナデを施す。内面調整は全体に板ナデを行い、所々に工具痕が確認できる。胎土は精良で、0.5mm大の暗灰色砂粒をまばらに含む。内面は灰白色から褐灰色、外面は黄灰色を呈し、外面の口縁部及び体部にはススが多く付着する。**40**は口縁部から肩部の破片資料である。頭部は短く外反し、口縁端部は肥厚する。外面調整は肩部に縱方向、体部に横方向のハケメを施す。内面調整は肩部以下に横方向のヘラケズリの後横方向のハケメを施し、細いヘラミガキで仕上げる。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。頭部には少なくとも2ヶ所に径0.3~0.4cm大の円形の穿孔を行う。粘土の盛上りや砂粒の動きから内側から穿孔していることが想定できる。孔の間隔は約1.5cmである。胎土は精良で、1mm以下の赤色砂粒をわずかに含む。内面はにぶい黄橙色、外面は灰黄色を呈する。

41~44は壺Eである。**41**は口縁部の破片資料である。一次口縁が水平に広がった後、二次口縁が外反してさらに広がる。端部は上下にわずかに肥厚し、面をもつ。外面調整は口縁端部にヨコナデ、口縁部に横方向のナデの後縦方向の細いハケメ、水平に広がる部分にはヘラミガキの後ナデを施す。内面には横方向のヘラミガキを行なう。一次口縁及び二次口縁の上部に波状文が、一次口縁外面の突出部には刻み目を施す。胎土は比較的精良で、2mm以下の白色砂粒をまばらに含む。内外面ともに灰白色を呈し、内面下半には黒斑が生じる。庄内1~3の範疇に収まるものと考えられる。**42**は口縁部の破片資料である。一次口縁が水平に広がった後、二次口縁が外傾して立ち上がる。現状の端部は丸く成形されており、口縁端部のようにみえるが、擬口縁であり、本来の口縁部はより長かったと考えられる。外面調整はヨコナデを施し、頭部に至る部分には縦方向のハケメがわずかに残る。内面調整もヨコナデで仕上げる。胎土は精良で、0.5mm以下の赤色砂粒や石英をまばらに含む。口縁部下端の外面にはヨコナデの後、板状工具を刺突することで山形文を施文する。施文具は幅1.7cm以上である。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。**43**は頭部が残存する。頭部は直立した後大きく外反し、一次口縁に至る。二次口縁は欠損しており、不明である。外面には斜め方向のハケメを、内面には上方にヨコナデ、下方に横方向のハケメを施す。胎土は非常に精良で、1~3mm大の白色砂粒をわずかに含む。内外面ともににぶい黄橙色を呈する。内面上方にはスス状の物質がみられるが、全体に均質に付着しているため、意図的に塗布している可能性も考えられる。**44**は頭部から肩部が残る。頭部はほぼ直立し、口縁部は大きく外側に屈曲していたとみられる。外面調整は頭部に縦方向のハケメの後横方向の細いヘラミガキ、肩部にナデを行なう。頭部と肩部の境には直帯を貼り付け、刻み目を施す。内面調整は摩減のため、不明瞭であるが、頭部下端にユビオサエを施した後、全体をナデしていると考えられる。胎土はやや粗く、1mm以下の白色砂粒を多く含む。色調は、内外面ともに灰白色を呈する。V期に位置づけられる。

45~49は壺Fである。**45**は口縁部が外傾し、端部は丸く仕上げられ、内側に1条の凹線が入る。外面は斜め方向にヘラミガキが認められるものの、摩減が進んでおり不明瞭である。内面には横方向のヘラミガキが施される。胎土は非常に精良で、0.5mm大の白色砂粒をまばらに含む。内面はにぶい黄橙色、外面は灰白色から黄灰色を呈し、内面にススが付着する。**46**は口縁部から頭部が残存する。口縁部は外傾し、端部を丸く取める。内外面ともに口縁部にヨコナデが、肩部にナデを施す。頭部外面の上方には粘土の接合痕が確認できる。胎土はやや粗く、1mm大の赤色砂粒や白色砂粒を含む。内面は褐灰色、外面は灰白色を呈し、肩部外面及び内面の口縁部下端から肩部にかけてススが付着す

る。47は口縁部から頸部が残る。口縁部は内傾し、端部が角張る。外面調整は口縁部と頸部に縱方向のハケメを施す。また、頸部にはヨコナデの痕跡も明瞭に観察できる。内面調整は口縁部にヨコナデを施す。胎土はやや粗く、1mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を多く含む。内面は灰白色からぶい黄橙色、外面は灰白色を呈する。胎土等の特徴から在地生産の可能性が高い。48~49は大型のものである。48は口縁部から頸部が残る。口縁部は内傾し、端部が角張る。外面調整は口縁部上方に横方向のハケメを施した後、全体にヨコナデを加える。口縁部下端には強いヨコナデによる凹線が3条入る。内面調整は口縁部上方にヨコナデ、下方にユビオサエを密に施し、頸部には横方向のハケメを行う。胎土は精良で、1mm以下の砂粒を含む。内外面ともに灰黄褐色を呈する。胎土分析を行った資料である。49は頸部から肩部が残る。外面調整は頸部に縱方向のハケメ、肩部に縱方向のヘラミガキを行った後全体にヨコナデを加える。口縁部下端の屈曲部には強いヨコナデによる凹線が現状で1条認められる。内面調整は全体にユビオサエを施し、ヨコナデによって仕上げる。器厚は厚く、重量感がある。頸部の内外面にはススが付着する。

50は口縁部から肩部の破片資料である。壺Aの可能性が考えられるが、詳細は不明である。肩部は横方向に伸びる。外面調整は頸部に縱方向のハケメの後ヨコナデを施し、肩部に横方向の細かいヘラミガキを行う。内面調整はユビオサエの後ナデを加えて仕上げている。頸部下端には粘土の剥離痕が認められる。胎土は比較的精良で、1mm以下の赤色砂粒や暗灰色砂粒を含む。内面は灰白色からぶい黄橙色、外面は灰白色を呈し、内面の頸部上方にはススの付着がみられる。51は頸部下端から体部中央までが残存する大型の壺である。外面調整は、頸部にヨコナデ、肩部以下に横方向のヘラミガキを施す。内面は頸部に横方向のヘラミガキ、肩部以下に横方向から斜め方向の板ナデを行う。肩部内面には工具痕とみられる縱方向の筋が数条認められる。胎土は1mm以下の白色砂粒を多く含み、やや粗い。また、角閃石などの鉱物片も顯著に認められ、撒入品である可能性も考えられる。内面は褐灰色から黄灰色、外面は明褐灰色から褐灰色を呈する。52は肩部以下が残存する。体部は倒卵形で、平底となる。外面調整は肩部に斜め方向、体部中央に横方向、体部下半に縱方向のハケメを施す。肩部のハケメは目が粗く、体部下半は細かい。内面調整は肩部に縱方向、体部中央は横方向に指による強いナデを施す。体部下半はナデを加えて平滑に仕上げ、底部にはユビオサエの痕跡が残る。胎土は精良で、1mm大の白色砂粒を含む。内面は灰黄色から暗灰色、外面は灰黄色から灰色を呈し、底部付近には黒斑が生じる。53は体部以下が残る。体部は球形に近く、底部は中央をくぼめ、上げ底とする。外面は摩滅が進んでおり、不明瞭であるが、右上がりのタタキやハケメが認められる。これらの調整の後にナデを施して仕上げているとみられる。内面にはヘラケズリを行った後、ナデを施す。体部内面には粘土紐の接合痕が確認でき、幅1.4cmから1.8cmの粘土紐を重ねて製作していることがわかる。また、底部内面には工具痕が複数残る。胎土は暗灰色砂粒を多く含むが、比較的精良である。内面は灰白色、外面は灰白色から黄灰色を呈する。

54~60は壺の底部である。54は平底である。外面調整は体部下半にハケメの後ヘラミガキを、底部にハケメを施す。内面はハケメによって仕上げる。胎土は非常に精良で、1mm大の砂粒をわずかに含む。内面はぶい黄橙色から灰黄褐色、外面は灰黄褐色を呈し、外面には黒斑やススの付着がみられる。55は突出した平底である。外面は右上がりのタタキ、内面はヘラミガキを施す。胎土は比較的精良で、1mm大の白色砂粒をまばらに含む。内面は灰白色を呈し、外面は残存部全体に黒斑が生じ

る。**56**も突出した平底である。外面調整は体部下半にハケメの後ヘラミガキ、突出部にユビオサエの後横方向のハケメを施す。内面にはハケメの後ヘラミガキを行う。器厚は厚く、重量感がある。底部には植物の茎などの圧痕が多数認められる。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒をまばらに含む。内面は灰白色や黒褐色、外面は灰白色を呈し、両面ともに黒斑が生じる。**57**は平底であるが、底部外面に径1cm程度の粘土粒を5つ貼り付けている。外面には板ナデ、内面にはハケメを施す。内面のハケメは回転させるように施しており、縦方向に伸びる静止痕が明瞭に確認できる。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒をまばらに含む。内面は灰白色から褐灰色、外面は褐灰色を呈し、外面にはススの付着と黒斑が認められる。**58**は平底である。内外面ともにヘラミガキを施す。胎土は比較的精良で、1mm以下の白色砂粒や暗灰色砂粒を含む。内面は灰白色から黄灰色、外面は灰白色を呈し、内面ともに黒斑が生じる。**59**は上げ底である。外面調整は右上がりのタタキを施した後ヘラミガキを行なう。底部にはヘラケズリを施す。内面調整には板ナデを行う。胎土は1mmの大砂粒を多く含み、粗い。内面は褐灰色、外面は灰白色を呈し、外面には黒斑が認められる。**60**は中央部がわずかにへこむ上げ底で、体部から顯著に突出する。外面にはタタキの後斜め方向のハケメを、内面にはハケメを密に施す。器厚は薄く仕上げる。胎土は1mmの大砂粒や赤色砂粒を多く含み、やや粗い。内面は灰白色、外面は灰白色から灰色を呈し、外面に黒斑及びススの付着がみられる。

甕(61~112) (図版15~17 写真図版28~31)

61~**71**は甕Aである。**61**は口縁部の破片資料である。口縁部は短く、端部を上方に屈曲させる。全体的に摩滅が進んでおり、調整は不明瞭であるが、頭部の外面にはハケメが確認できる。胎土は0.5mm大の赤色砂粒や暗灰色砂粒を含み、やや粗い。内外面ともに浅黄橙色を呈する。**62**は口縁部から頭部までが残る破片資料である。頭部は外反し、口縁部は二重口縁となる。口縁端部は外側につまむ。口縁部は内外面ともにヨコナデ、肩部内面にはナデ及びユビオサエを施す。肩部外面は残存状況が良くないため、詳細は不明であるが、わずかに残る痕跡から板状の工具を用いて調整を行ったことが想定される。胎土は精良で、3mm以下の白色砂粒をまばらに含む。また、角閃石や黒雲母などの鉱物片が多く含まれる。内面は灰白色から灰黄褐色、外面は灰白色からにぶい黄橙色を呈する。形態や胎土の特徴から、搬入品である可能性も考えられる。**63**は口縁部から肩部の破片資料である。口縁部は短く外反し、端部を丸く收める。外面調整及び口縁部内面はヨコナデ、肩部内面はナデによって仕上げる。肩部内面に斜め方向の筋がみられ、工具痕であると考えられる。器厚は薄く、軽い。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を多く含む。内面は灰白色、外面は灰白色から浅黄橙色を呈する。**64**は口縁部から体部が残る破片資料である。口縁部は短く外傾し、端部を丸く收める。外面調整は口縁部に縦方向のハケメの後ヨコナデ、肩部にヨコナデ、体部に縦方向の板ナデを施す。内面調整は口縁部に横方向のハケメの後ヨコナデ、頭部から肩部に横方向のヘラケズリ、体部に横方向の板ナデを行う。胎土はやや粗く、5mm以下の砂粒を含む。内外面ともに灰白色から黄灰色を呈し、外面にはススの付着が顯著である。**65**は口縁部から肩部が残存する。口縁部はゆるく外反し、端部はわずかに肥厚し、丸い。外面調整は口縁部にヨコナデ、肩部に板ナデを施す。内面には口縁部にヨコナデを行う。肩部は頭部周辺にユビオサエを施した後ナデによって仕上げる。ユビオサエを施した箇所には粘土の接合痕が明瞭に認められる。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒をまばらに含む。内面は灰白

色で、黒斑がみられる。外面は灰黄色を呈する。**66**はほぼ完形に復元できた。口縁部は外傾し、端部を丸く収める。体部は倒卵形で、底部は平底となる。外面調整は体部に右上がりのタタキの後縦方向の板ナデ、底部にナデを施す。内面調整は口縁部に斜め方向のハケメの後ヨコナデを行う。肩部にはユビオサエを施した後、肩部から体部にかけて斜めから横方向のナデを加える。底部はナデによって仕上げる。器厚は厚めで、他の壺と比較して重みがある。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を多く含む。内面は灰白色から明褐色を、外面は灰白色やにぶい黄橙色、明褐色を呈する。外面の頭部から体部上半にかけてはススの付着が、体部下半から底部にかけては黒斑がみられる。**67**は口縁部から体部が残る。口縁部はゆるく外反し、端部を丸く収める。外面調整は口縁部に斜め方向のハケメを施した後ヨコナデを行う。肩部から体部には右上がりのタタキの後縦方向のハケメで仕上げる。内面調整は口縁部にヨコナデ、肩部以下に横方向の板ナデを加える。胎土は1mm以下の白色砂粒を多く含み、やや粗い。内外面ともに灰白色を呈し、内面にはススの付着が認められる。**68**は口縁部から体部が残る。口縁部は外反し、端部が角張る。外面調整は肩部以下に粗い右上がりのタタキを施す。内面調整は口縁部に横方向のハケメ、肩部以下にユビオサエの後縦方向の板ナデを行う。ユビオサエは強く施されており、製作者の指紋も確認できる。内面には粘土紐の接合痕も認められ、幅約2cmの粘土紐を積み重ねて製作していることがわかる。胎土はやや粗く、1mm大の暗灰色砂粒を多く含む。内外面ともに灰黄色から黄灰色を呈する。**69**はほぼ完形に復元することができた。口縁部は短く外傾し、端部を上につまむ。底部は小さな上げ底となる。外面調整は体部に右上がりのタタキ、底部にナデを施す。体部中央にはタタキの後粗いハケメを横から斜めに行う。内面調整は口縁部にハケメの後ヨコナデ、体部にユビオサエの後粗いハケメを施す。胎土は3mm以下の白色砂粒や赤色砂粒を含み、やや粗い。内外面ともに灰白色を呈し、両面ともに黒斑が生じる。また、体部外面には、熱を受けたことにより、赤褐色に変色している箇所も認められる。**70**は口縁部から底部まで残存する。口縁部はゆるく内湾して立ち上がり、端部に面をもつ。底部は小さく、上げ底となる。外面調整は体部に目の粗い右上がりのタタキ、底部には板ナデを、内面は体部に板ナデを施す。胎土はやや粗く、1.5mm大の赤色砂粒や暗灰色砂粒、白色砂粒を含む。内面はにぶい黄橙色から灰黄褐色、外面はにぶい黄橙色から褐色を呈し、外面の口縁部から下にはススが付着する。**71**は壺の体部と考えられる。外面にはナデを施すが、粘土紐の接合痕を顕著に残す。接合痕から、幅1~2.8cmの粘土紐を積み重ねて製作していることが推定できる。内面は細い工具を用いた板ナデを施し、下部にはナデの前にユビオサエを行っている。外面調整は他の壺と比較して非常に粗雑であり、壺形I式の製塙土器である可能性も残る。胎土は1.5mm大の暗灰色砂粒や赤色砂粒を含むが、比較的精良である。内面は灰白色から黄褐色、外面は灰白色から浅黄橙色を呈する。

72~82は壺Bである。いずれも肩部から体部にかけての外面にタタキによる調整痕を明瞭に残す。また、口縁部から頭部にかけての外面調整にはヨコナデを施す。色調は灰白色から黄褐色のものが多い。**72**は口縁部から体部が残存する。口縁部が外傾し、端部を丸く収める。外面のタタキ調整は右上がりで、太い。内面調整は口縁部にヨコナデ、肩部にユビオサエ、体部に縦方向のヘラケズリを施す。肩部にはヘラケズリを行った際にいたと考えられる工具痕が多数認められる。太いタタキを用いることから壺Aである可能性も残るが、球形に近い体部を持つこと及び内面にヘラケズリ調整を施すことを重視し、壺Bとした。胎土は比較的精良であるが、白色砂粒を多く含む。**73**は口縁部から

体部が残存する。口縁部は短く外傾し、端部を丸く収める。外面のタタキ調整は右上がりが主で、下方の一部に横方向から左上がりのものも確認できる。肩部にはタタキの後板ナデを施している。内面調整は口縁部にヨコナデ、肩部から体部にヘラケズリを施す。肩部の器厚は厚く、体部に下るにつれて、薄く仕上げる。胎土はやや粗く、2mm以下の白色砂粒や石英等を多く含む。体部外面にはススの付着が認められる。*74*は口縁部から体部が残る。口縁部は外傾し、端部を丸く収める。外面のタタキ調整は右上がりである。口縁部の内面は摩滅しており、調整は不明であるが、肩部以下にはユビオサエの後横方向の板ナデが施される。胎土は粗く、2mm以下の砂粒を多く含む。*75*は口縁部の破片資料で、肩部がわずかに残存する。口縁部は外反し、端部が角張り、面をもつ。頭部外面には強い横方向の板ナデが施され、ハケメ状の痕跡が残る。肩部外面は遺存状況が悪く、不明瞭であるが、右上がりのタタキがわずかに認められる。胎土は精良で、1mm大の砂粒をまばらに含む。内面には黒斑がみられる。*76*は口縁部から肩部が残存する。口縁部はゆるく外反し、端部を上方につまむ。肩部外面のタタキは右上がりである。タタキの後に斜め方向に板ナデを施すが、タタキの調整痕を明瞭に残す。内面調整は口縁部にハケメの後ヨコナデ、肩部に板ナデを行う。他の庄内窯に比べて、器厚が厚い。肩部の内面には粘土の接合痕が残る。胎土は精良で、1mm大の暗灰色砂粒をまばらに含む。*77*は口縁部の破片資料で、肩部がわずかに残る。口縁部は外傾し、端部が肥厚し、面をもつ。肩部外面のタタキは右上がりとみられる。内面調整は口縁部に横方向のハケメを、肩部にヘラケズリを行う。頭部内面には粘土の接合痕が認められる。胎土は精良で、0.5mm大の赤色砂粒を含む。内面は灰白色から黄灰色、外面は黄灰色から黒褐色を呈し、口縁部外面にはわずかにススの付着も確認できる。*78*は口縁部から肩部が残存する。口縁部は外傾し、端部を肥厚させる。肩部外面のタタキは横方向である。内面調整は口縁部に横方向のハケメを施し、肩部に横方向のハケメの後ナデを行う。内面の頭部には粘土の接合痕が認められる。胎土は0.5mm以下の赤色砂粒や暗灰色砂粒を含むが、比較的精良である。*79*は口縁部から体部まで残存する。口縁部は外傾し、端部が肥厚する。外面のタタキ調整は左上がりで、一部横方向のものもみられる。内面調整は口縁部に横方向のハケメの後ヨコナデを、肩部から体部はヘラケズリを行う。胎土はやや粗く、0.5mm大の赤色砂粒を多く含む。口縁部外面にはススの付着が認められる。*80*は口縁部から肩部が残存する。口縁部は外傾し、端部が肥厚し、面をもつ。肩部外面のタタキは横方向で、一部に斜め方向のハケメがわずかに認められる。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にハケメを施す。頭部には粘土の接合痕が残る。胎土は粗く、1mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を多量に含む。口縁部及び肩部の外面に黒斑がみられる。*81*は口縁部から体部が残存する。口縁部は外傾し、端部が肥厚する。外面調整には口縁部から頭部にかけてユビオサエを行った後ヨコナデを施す。肩部から体部のタタキは右上がりである。内面調整は口縁部に横方向のハケメ、肩部から体部にユビオサエの後横方向のハケメを施す。胎土はやや粗く、2mm以下の赤色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色を呈し、口縁部外面にはススが付着する。*82*は口縁部から肩部が残存する。口縁部は外傾し、端部を上につまみ上げる。肩部外面のタタキは横方向であり、一部にタタキの後に施されたユビオサエが確認できる。内面調整は口縁部、肩部とともにユビオサエの後横方向や斜め方向のハケメを施す。胎土は比較的精良であるが、暗灰色砂粒や石英が多く認められる。胎土分析を行った資料である。

*83~89*は窯Cである。いずれも肩部から体部にかけての外面にタタキの後にハケメを施すことで、

タタキの痕跡を消す。外面調整のハケメはほとんどが縦方向から斜め方向で施されており、**89**のみが横方向にハケメが入る。口縁部から頸部の外面調整にはヨコナデが施される。色調は灰白色や黄灰色、褐灰色を呈するものが多い。**87**は口縁部から体部まで残存する。肩部から体部にかけてタタキが認められるが、タタキの後に縦方向のハケメが入念に施されることから壺Cとした。内湾する体部をもち、口縁部は外傾し、端部がわずかに肥厚する。肩部から体部の内面にはヘラケズリを行い、一部にハケメも認められる。胎土は1mm大の白色砂粒を多く含み、やや粗い。口縁部及び体部にわずかにススが付着する。**87**は口縁部から体部が残存する。内湾する体部から、口縁部が外傾して伸び、端部は上方に面をもつ。外面調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、肩部から体部に横方向のヘラケズリを行う。頸部内面には粘土の継ぎ目が残る。胎土は比較的精良で、1mm大の砂粒をまばらに含む。口縁部外面にはわずかにススの付着がみられる。**85**は口縁部から肩部が残存する。口縁部はわずかに外反して、端部が肥厚し、面をもつ。他の壺に比べて口縁部の器厚が厚い。口縁部の外面調整は縦方向のハケメの後ヨコナデを施す。内面調整は口縁部に横方向のハケメの後ナデ、頸部から肩部に板状工具による横方向のナデが施され、肩部内面には工具痕が残る。胎土はやや粗く、赤色砂粒や白色砂粒を多く含む。内面の口縁部上方には黒斑が認められる。**86**は口縁部から体部上方が残存する。口縁端部はわずかに肥厚し、面をもち、沈線が1条入る。頸部外面のヨコナデは強く、ハケメ状の痕跡が入る。内面は口縁部に横方向のハケメの後ヨコナデ、肩部から体部にヘラケズリの後横方向や斜め方向のハケメを施す。口縁部外面には粘土紐の接合痕が認められる。胎土はやや粗く、赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。**87**は口縁部が外傾し、端部を上方につまみ上げる。口縁端部はやや角張り、外側に面をもつ。肩部はわずかしか残存しない。口縁部の外面調整は縦方向のハケメの後ヨコナデを施す。内面は口縁部に横方向のハケメ、肩部にヘラケズリを行う。胎土はやや粗く、赤色砂粒を多く含む。口縁部外面にススが付着する。**88**は口縁部から肩部まで残存する。口縁部は外傾し、端部を上方につまみ上げる。口縁端部はやや角張り、面をもつ。外面調整は口縁端部にヨコナデ、口縁部から頸部には縦方向のハケメの後ヨコナデを施す。内面は口縁部に斜め方向のハケメ、頸部から肩部に板ナデを施し、体部の一部にはハケメ状の痕跡も認められる。頸部内面は鋸く屈曲する。胎土は比較的精良で、1mm大の白色砂粒や暗灰色砂粒を含む。肩部下方には黒斑が認められる。また、口縁部外面にはススが付着する。**89**は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は外傾し、端部を上方につまみ上げる。外面調整は口縁部にヨコナデ、肩部に横方向のハケメを施す。内面調整は口縁部に斜め方向のハケメ、肩部に横方向のヘラケズリを行う。胎土は精良で、0.5mm大の赤色砂粒や暗灰色砂粒をまばらに含む。口縁部外面にはススが付着する。

90~93は壺Dである。角閃石などの鉱物が多く認められ、生駒西麓産の土を使用していると推定できる。色調は灰褐色や黒褐色など、褐色がかった暗い色を呈する。**90**は口縁部の破片資料で、わずかに肩部が残る。口縁部は外傾し、端部を丸く収める。外面調整は口縁部から頸部にかけてわずかにハケメ状の痕跡が認められ、板状工具を用いたヨコナデが行われたものと推定できる。頸部から肩部には右上がりのタタキを施す。内面は口縁部にヨコナデ、頸部以下に板ナデもしくは弱いヘラケズリを施す。胎土は精良で、0.5mm以下の白色砂粒や鉱物片を含む。口縁部の外面にはススが付着する。**91**は完形に復元することができた。やや尖り気味の丸底で、腹径が最大になる箇所は中央より

やや上方に位置する。口縁部は外傾し、端部をつまむように整形する。外面の調整は口縁部にヨコナデ、体部上半は右上がりのタタキ、下半は左上がりのタタキの後縱方向のハケメを施す。内面は口縁部に横方向のハケメの後ナデ、体部にヘラケズリを施す。胎土は精良であるが、5mmの大いな小穢が複数含まれる。外面には多くのススが付着する。**92**は口縁部から体部上半まで残存する。口縁部は外傾し、端部を上方につまみ上げる。外面調整は口縁部に斜め方向のハケメの後ヨコナデ、肩部から体部は右上がりの目の細かいタタキの後下方に縱方向のハケメを施す。内面は口縁部に横方向のハケメの後ヨコナデを、肩部から体部にはヘラケズリを施す。口縁部から肩部の上方は器厚が比較的厚いが、体部の器厚は非常に薄く仕上げられる。胎土は精良で、0.5mm以下の細かい白色砂粒を多く含む。**93**は口縁部から肩部まで残存する。口縁部は外傾し、端部を上方につまみ上げる。外面調整は口縁部にヨコナデ、肩部以下には目の細かいタタキを右上がりに施す。内面は口縁部に横方向のハケメの後ヨコナデ、肩部以下には横方向のヘラケズリを行う。器厚は薄く仕上げられる。胎土は非常に精良で、0.5mm以下の砂粒をわずかに含む。胎土分析を行った資料である。

94は壺Eである。口縁部から体部上半が残存する。体部は大きく内湾し、口縁部は外傾し、端部が内側に肥厚し、面をもつ。外面調整は口縁部から肩部上端にかけてヨコナデを、肩部から体部にかけて縱方向のハケメの後横方向のハケメを施す。内面は口縁部に斜め方向のハケメを施した後ヨコナデを加える。肩部にはユビオサエの後ユビナデを、体部には横方向のヘラケズリを行う。器厚は比較的厚い。胎土は非常に精良で、1mm以下の赤色砂粒や白色砂粒をわずかに含む。内外面ともに灰黄色を呈し、頸部周辺に黒斑が認められる。また、ススの付着もわずかにみられる。

95~100は壺Fである。いずれも頭部が短く外反し、突出部をもって口縁部が伸びる。因縁VI~3~VII~1期に位置づけられる。**95**は口縁部から肩部の一部が残存する。低い突出部をもち、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く取める。内外面ともにヨコナデが施される。口縁部の内面にはわずかに屈曲する点が2ヶ所認められることから強いヨコナデが少なくとも3回に分けて行われたことが推定できる。また、わずかに残存する肩部の内面には横方向のヘラケズリが確認できる。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、比較的精良である。内外面ともに黄灰色を呈し、頸部外側にはススの付着がみられる。**96**は口縁部から肩部が残存する。低い突出部をもち、口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。外面調整は口縁部にヨコナデ、頭部から肩部に縱方向のハケメの後ヨコナデを施す。ハケメを施した際にいたとみられる工具痕も認められる。内面調整は口縁部から頭部にヨコナデ、肩部以下に横方向のヘラケズリを施す。胎土は精良で、1mmの大いな白色砂粒をまばらに含む。**97**は口縁部から肩部が残存する。突出部は低く、口縁部が外傾し、端部を丸く取る。外面調整は全体をヨコナデによって仕上げる。内面は摩滅が進んでいるため、不明瞭であるが、ヨコナデにより調整を施していると思われる。胎土は1mm以下の砂粒を多く含み、やや粗い。内面は灰白色、外面は黄灰色を呈する。**98**は口縁部から頭部が残る。突出部は低く、口縁部が外傾する。口縁端部は肥厚し、面をもつ。内外面ともに全体に強いヨコナデを施す。胎土は1mmの大いな赤色砂粒を多く含み、やや粗い。内外面ともに灰白色から褐灰色を呈する。因縁VI~3期と思われる。**99**は口縁部から頭部が残る。高く顯著な突出部をもち、口縁部は外反する。口縁端部は角張り、面をもつ。内外面ともにヨコナデが施され、わずかに残存する肩部の内面には横方向のヘラケズリが確認できる。胎土は精良であるが、1mm以下の砂粒を多く含み、黒雲母や角閃石などの鉱物も認められる。内面は灰黄色、外面はにぶい

黄橙色を呈する。**100**は口縁部から頸部が残る。高く顕著な突出部をもち、口縁部は外反し、端部に面をもつ。内外面ともにヨコナデが施され、わずかに残存する肩部の内面には横方向のヘラケズリが確認できる。胎土は0.5mm以下の砂粒を含み、精良である。内外面ともに灰白色を呈し、外面にはススの付着が認められる。ススは頸部に最も多く付着する。胎土分析を行った資料である。

101～106は壺Gである。いずれも庄内期以降のもので、肩部の張りは強くないことから高橋編年X-b期以降であろうか。**101**は口縁部から体部まで残存する。口縁部は直立し、端部は肥厚し、上方に面をもつ。外面調整は口縁部にヨコナデ、頸部にユビオサエの後ヨコナデ、肩部から体部に縱方向のハケメを施す。内面は口縁部にヨコナデ、頸部は斜め方向のハケメの後ナデ、肩部から体部はユビオサエの後ナデによって仕上げる。胎土は2mm大の白色砂粒や暗灰色砂粒を含み、やや粗い。内外面ともに灰白色を呈し、外面にはススが多く付着する。**102**は口縁部から体部上方が残存する。口縁部は直立し、端部を丸く収める。口縁部から頸部にかけては内外面ともにヨコナデを施す。肩部から体部の外側調整は左上がりのハケメ、内側調整は上方にユビオサエ及びナデ、下方に横方向のヘラケズリを施す。肩部内面には粘土紐を接合した痕跡も認められる。胎土は比較的精良で、1mm大の白色砂粒をまばらに含む。内外面ともに灰黄色を呈し、口縁部から肩部にかけてススの付着がみられる。**103**は口縁部から肩部が残存する。口縁部はほぼ直立し、端部はわずかに肥厚し、丸い。口縁部には8条の擬凹線が入る。調整は内外面ともに口縁部から頸部にかけてヨコナデを施す。肩部は外面にハケメの後ヨコナデ、内面に横方向のヘラケズリを行う。胎土は1mm大の白色砂粒を含み、比較的精良である。内外面ともに灰黄色を呈する。胎土分析を行った資料である。**104**は口縁部から肩部の上端が残存する。口縁部はわずかに内傾し、端部は若干肥厚し、丸く収める。口縁部には擬凹線が9条施される。外面は口縁部から頸部にかけてヨコナデが施される。肩部は残存部位がわずかで、摩耗も進んでいることから不明瞭であるが、縱方向のハケメ状の痕跡が確認できる。内面は口縁部から頸部はヨコナデ、肩部に横方向のヘラケズリを施す。胎土は精良で、1mm以下の砂粒をまばらに含む。少量であるが、黒雲母などの鉱物も確認できる。内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色から灰黄褐色を呈し、頸部にはススが付着する。**105**は口縁部から頸部までが残る。口縁部はわずかに内傾し、端部を丸く収める。口縁部の外面には13条の擬凹線が施される。摩耗が進んでいるため、調整は不明瞭であるが、外面及び内面の口縁部から頸部はヨコナデ、内面の体部は横方向のヘラケズリによって仕上げている可能性が高い。胎土は比較的精良で、0.5mm大の赤色砂粒や白色砂粒をまばらに含む。内面は浅黄橙色からにぶい橙色を、外面はにぶい橙色を呈する。外面の口縁部下端から頸部にかけてわずかにススの付着が認められる。**106**は口縁部から頸部が残る。口縁部は内傾し、端部が丸く肥厚する。外面調整は口縁部にヨコナデ、頸部以下に縱方向のハケメの後横方向のハケメを施す。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部以下に横方向のヘラケズリを施す。胎土は0.5mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を多く含み、やや粗い土を用いる。内外面ともに灰白色から浅黄橙色を呈する。

107～109は壺Hである。**107**は口縁部から肩部上端までが残存する。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部は主に下方向に肥厚し、面をもつ。端部の面には3条の擬凹線が入る。外面調整は全体にヨコナデ、内面は口縁部から頸部までヨコナデ、肩部以下をヘラケズリの後ユビオサエを施して仕上げている。胎土は2mm大の赤色砂粒や白色砂粒を多く含み、やや粗雑である。内面は

にぶい黄橙色から灰白色、外面はにぶい黄橙色を呈する。口縁部から頸部にかけてススが多く付着する。V-2と思われる。I08は口縁部から体部半ばまで残存する。体部が倒卵形で、口縁部は外側に大きく屈曲し、端部が上下に肥厚し、面を形成する。口縁端部の面には3条の擬凹線が浅く入る。外面調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデを、体部にはタタキの後縦方向の目の細かいハケメを施す。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部は縦方向のヘラケズリの後ナデを施す。また、成形時にいたとみられるユビオサエも確認できる。胎土は1mmの大赤色砂粒や白色砂粒を多く含み、やや粗い。内面はにぶい黄橙色からにぶい橙色、外面は灰白色からにぶい黄橙色を呈する。V-2～3期に位置づけられよう。I09は口縁部から体部上端までが残存する。二重口縁となっており、端部は上方につまみ上げ、面を持つ。面には2条の凹線が施される。外面調整は口縁部から体部上方にヨコナデを、それ以下に縦方向のハケメを施す。内面にはヨコナデが認められる。胎土は比較的精良であるが、1mmの大赤色砂粒や暗灰色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色を呈する。口縁部から頸部にかけてわずかにススが付着する。

I10～I12は壺の底部である。I10は平底の壺底部である。ユビオサエによってわずかに突出した底部を成形する。内面には目の粗いハケメを多方向に密に施す。胎土は1mm以下の白色砂粒や暗灰色砂粒をまばらに含み、精良である。内面は灰白色、外面は黄灰色を呈し、ススが多く付着する。壺Hに属すると考えられる。I11は上げ底の底部で、体部が外傾する。外面調整は体部に右上がりのタタキの後斜め方向のハケメを、底部にナデを施す。内面は摩滅により不明である。底部には製作の際にいたとみられる筋状の工具痕が確認できる。胎土は2mm以下の白色砂粒を多く含み、粗い。内面と外面上に灰白色を呈し、断面は橙色となる。壺Aである可能性が考えられる。I12は尖底で、体部はゆるく内湾する。外面には右上がりのタタキを施し、底部はナデによって仕上げる。内面は摩滅により不明瞭であるが、ナデが施されたとみられる。胎土は2mm以下の白色砂粒や黒褐色砂粒を多く含み、粗い。内面はにぶい黄橙色を呈し、外面は二次焼成によりにぶい赤褐色となる。内外面ともに黒斑が生じており、外面にはススの付着も確認できる。壺Aである可能性が考えられる。

鉢(113～135) (図版17～18 写真版31～33)

I13～I20は鉢Aである。I13～I18はA-1、I19～I20はA-2に細分できる。I13はわずかに上げ底で、体部内湾し、口縁端部が尖る。外面は体部に斜め方向のユビナデ、体部下端に横方向のナデを施す。内面には板ナデを行ったとみられ、筋状の工具痕が放射状に認められる。底部には工具痕とは異なる筋状の痕跡が残り、製作の際にいた葉脈痕の可能性も考えられる。胎土は精良で、1mmの大赤色砂粒や暗灰色砂粒をまばらに含む。内面は灰黄色、外面は灰白色から灰色を呈する。I14は平底で、内湾する体部をもち、口縁端部を丸く収める。外面調整は体部に横方向のハケメを、体部下端にナデを施す。内面は体部上半にヨコナデ、下半に横方向の板ナデを施す。板ナデによる調整を行った際にいたとみられる工具痕が放射状に認められる。胎土は1mm以下の白色砂粒や暗灰色砂粒、石英を含み、やや粗い。内外面ともに灰白色から黄灰色を呈し、外面の底部から体部下半にかけて黒斑が認められる。I15は平底で、体部はわずかに内湾して上方に立ち上がり、口縁端部は尖る。外面はユビナデを施し、内面には斜め方向のハケメを密に施す。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒や黒褐色砂粒、石英などをまばらに含む。内外面ともに灰白色から黄灰色を呈する。I16は小さな

平底で、体部がゆるく内湾し、口縁端部が尖る。内外面ともにナデによって調整されており、特に内面には丁寧なナデが施される。胎土は精良で、3mm以下の石英や微小な砂粒をまばらに含む。内外面ともに灰白色で、体部中央には黒斑が認められる。*I17*は深い椀状を呈し、口縁端部は内側に肥厚し、面をもつ。器厚を厚く仕上げる。底部は欠損しているが、底もしくは丸底であろう。外面調整は、面をもつ口縁端部にヨコナデを施す。タタキ状の痕跡も認められ、ヨコナデを施す前にタタキを加えている可能性も考えられる。体部は横・斜め方向のハケメが密に施される。内面は口縁端部にヨコナデ、体部にハケメもしくは板ナデを施す。底部周囲にはユビオサエの痕跡も認められる。胎土は白色砂粒、暗灰色砂粒を多く含むが、比較的精良である。内外面ともに灰白色を呈する。*I18*は尖底で内湾する体部をもつ。外面調整は体部にヘラケズリ、底部にナデを施す。体部と底部の境にはユビオサエの痕跡も残る。内面は板ナデによって仕上げており、部分的にハケメも認められる。また、幅1~12cmの工具痕も複数みられる。底部には焼成前に径0.7cmの円形の穿孔を行う。胎土は精良で、1mm大の白色砂粒や石英を含む。内外面ともに灰白色を呈し、外側の底部から体部にかけて黒斑が生じる。*I19*は椀状を呈する。上げ底で、体部が内湾し、口縁端部は丸く収める。外面調整は口縁端部にナデ、体部上半に右上がりのタタキの後ナデ、下半から底部にヘラケズリを施す。内面は上1/3に斜め方向のハケメを、下2/3にヘラケズリの後多方向のヘラミガキを行う。胎土は3mm以下の白色砂粒を多く含み、やや粗い。内面は灰色、外側は黄灰色を呈する。*I20*は椀状を呈する。ドーナツ底で、内湾する体部をもち、口縁端部は尖る。外側は口縁端部にヨコナデ、体部から底部にはナデを施す。内面は板ナデを行い、幅0.9~1.1cmの工具痕が複数確認できる。胎土は1mm以下の赤色砂粒、白色砂粒を含み、やや粗い。内外面ともに灰黄色を呈し、口縁部周囲は黒褐色となる。

*I21~I22*は鉢Bである。*I21*は椀状の体部から外側に2回屈曲し、端部が丸い。外面調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部はヘラケズリもしくは板ナデの後ナデを施す。内面は全体をヨコナデによって仕上げる。胎土は微小な赤色砂粒を含み、非常に精良である。内外面ともにやや黄褐色から褐灰色を呈する。*I22*は体部が内湾し、口縁部が外傾し、端部を丸く収める。外側は口縁部にヨコナデを施す。体部は摩減が進んでおり、調整は不明である。内面も同様に口縁部にヨコナデを施す。体部は縱方向の板ナデによって仕上げる。胎土はやや精良で、0.5mm以下の赤色砂粒や黒褐色砂粒を含む。内外面ともに灰白色から灰黄褐色を呈する。

*I23*は鉢Cである。浅い鉢で、皿状を呈する。ほぼ円形であるが、一部が片口状に広がり、口縁端部を丸く収める。内外面ともにユビナデで仕上げられており、外側の一部に粘土紐の接合痕が認められる。幅0.7cm程度の粘土紐を積み重ねて形成したと考えられる。胎土は精良で、0.5mm大の白色砂粒をまばらに含む。内外面ともに灰黄色から黄灰色を呈する。

*I24~I28*は鉢Dである。*I24~I28*はD-1、*I29~I32*はD-2に細分できる。*I24*は平底で内湾する体部をもち、口縁部が短く外に屈曲する。端部は下側に肥厚し、面をもつ。外面調整は口縁部にヨコナデ、体部上半に縱方向のハケメを施した後体部全体に縱方向のヘラミガキを行う。内面は口縁部に横方向のヘラミガキ、体部に縱方向のヘラミガキを施す。胎土は2mm以下の白色砂粒をわずかに含み、精良である。内面は灰白色から暗灰黄色。外側は黄灰色から明褐灰色を呈する。外側の上半には多くのススが付着している。*I25*は内湾する体部で、口縁部はくの字状に屈曲し、端部に面をもつ。摩耗が進んでおり、内外面ともに不明瞭であるが、体部外側には縱方向のハケメの後横方向のヘ

ラミガキが、体部内面には縱方向のハケメの後縦方向のヘラミガキが認められる。口縁端部は強いヨコナデにより1条の凹線が施される。胎土は比較的精良であるが、1~2mm大の白色砂粒を多く含む。内面は灰黄色から灰白色、外面は灰黄色から黄灰色を呈する。口縁部内面には薄くススが付着する。*I26*は内湾する体部をもち、口縁部がぐの字状に屈曲する。端部は上下に肥厚し、面をもつ。外面調整は口縁端部にヨコナデ、口縁部に縱方向のハケメの後横方向のヘラミガキ、体部に右上がりのタタキの後斜め方向のハケメ、横方向のヘラミガキを施す。体部の内面には斜め方向のハケメの後ヘラミガキが認められる。胎土は1~2mm大の赤色砂粒や石英を多く含み、粗い。内外面ともに灰白色を呈する。*I27*は内湾する体部をもち、口縁部がぐの字状に外に広がる。端部は丸い。外面調整は全体に右上がりのタタキを施した後に、口縁部にはヨコナデ、頭部から体部には縱方向のハケメ後ヘラミガキを加える。内面は口縁部にはヨコナデ、頭部には横方向のヘラケズリ、体部にはナデ後多方向のヘラミガキが認められる。胎土は精良で、1mm大の白色砂粒や石英をまばらに含む。内外面ともに灰黄色を呈し、体部の下半には黒斑及びススの付着が認められる。庄内3と考えられる。*I28*は内湾する体部を持ち、口縁部がぐの字状に屈曲する。外面は口縁部にヨコナデ、頭部から体部にかけては斜め方向のハケメの後横方向のヘラミガキを行う。内面は摩耗が激しく不明瞭であるが、体部に横方向のヘラミガキが認められる。胎土は0.5~1mm大の白色砂粒や石英を多く含み、やや粗い。内面は灰白色から灰黄色、外面は灰黄色を呈する。*I29*は内湾する体部をもち、口縁部も内湾しつつ上方に伸びる。外面調整は口縁部にヨコナデ、頭部に横方向のヘラケズリ、体部に右上がりのタタキの後横・斜め方向のハケメを施す。内面は口縁部から頭部にかけて横方向のヘラミガキ、体部にはナデを施す。胎土は1~2mm大の白色砂粒、石英を多く含み、粗い。内外面ともに灰色を呈する。*I30*は*I29*と同様の形態を持ち、同一個体である可能性も考えられる。外面調整は口縁部にヨコナデを施し、一部斜め方向のハケメも認められる。頭部から体部は右上がりのタタキを行った後横方向のハケメを施す。内面は口縁端部にヨコナデ、口縁部から頭部にかけて横方向のヘラミガキを施す。体部は上方に板ナデを施した後縦方向のヘラミガキを行う。胎土は1~2mm大の白色砂粒、石英を多く含み、粗い。内面は灰黄色から灰色、外面は灰白色から灰色を呈する。*I31*は体部がわずかに内湾し、口縁部が外側に屈曲する。口縁端部は丸く収める。外面調整は口縁部から頭部にかけて横方向のハケメが施されるが、体部以下は摩滅のため明らかではない。内面は口縁部から頭部に横方向のハケメ、体部にユビオサエの後板ナデが施される。頭部で粘土を繰り足して、口縁部を形成する。胎土は赤色砂粒や白色砂粒、石英を多く含み、やや粗い。内外面ともに浅黃橙色を呈し、外面の上部に黒斑が認められる。*I32*はゆるく内湾する体部をもち、口縁部が尖る。外面調整は口縁部にヨコナデ、体部に縦方向のハケメを施す。また、体部下半にはユビオサエの痕跡が残る。内面は縦方向のハケメもしくは板ナデを施し、頭部附近のみ横方向とする。胎土は比較的精良で、1mm以下の赤色砂粒や石英を含む。内外面ともに灰白色から橙色を呈する。

*I33~I35*は鉢Eである。*I33*は扁平な球状の体部から短く内湾する口縁部をもつ。口縁端部は丸く収める。外面調整は口縁部にはヨコナデを、体部には縦・斜め方向のハケメを施す。内面は口縁部にヨコナデ、体部上半には横方向の板ナデ、体部下半には横方向のヘラケズリを行う。体部上半には工具痕とみられるへこみが複数認められる。胎土は比較的精良であるが、1mm大の赤色砂粒を多く含む。内面は灰白色からぶい橙色、外面は白色から黒褐色を呈する。*I34*は扁平な球形を呈する体

部から、内湾し上方に伸びる口縁部をもつ。口縁端部は丸く收める。外面は口縁部から頸部にかけて強いヨコナデによるカキメ状の平行線が多数入る。体部上半には目の粗い縱方向のハケメが、下半には板ナデが施される。内面は口縁部から頸部にかけて斜め方向のハケメの後ヨコナデや横方向の板ナデが行われる。体部は縱方向の板ナデの後横方向のヘラケズリによって調整する。胎土は精良で、1 mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を含む。内外面ともに灰白色を呈し、体部下半に黒斑がみられる。口縁部が長く伸び、体部が小さいことから布留1に相当すると考える。*I35*は扁平な球形を呈する。外面は非常に摩滅が進んでおり不明瞭であるが、肩部にはヘラミガキ状の痕跡が認められる。内面は残存状況が良く、頸部から中央付近までヨコナデ、それ以下には縱方向の板ナデが施される。板ナデの痕跡から復元できる工具幅は約1 cmである。胎土は2 mm以下の赤色砂粒や白色砂粒、石英を含み、やや粗い土を用いている。内外面ともに橙色から灰白色を呈し、一部に黒斑が認められる。布留1に位置づけられる。

高杯(136～162) (図版18・19 写真図版33～36)

*I36～I45*は高杯Aである。*I36～I37*は大型のものである。*I36*は杯下半部が大きく広がり、なだらかな稜を持って屈曲し、上半部は外反する。摩滅により不明瞭ではあるが、外面は口縁部にヨコナデ、稜より下方に横方向のヘラミガキが施される。内面は横方向のヘラミガキがわずかに認められる。胎土は精良であるが、2 mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色からにぶい橙色を呈し、口縁部付近に黒斑がみられる。庄内1に位置づけられる。*I37*は杯下半部が大きく広がり、明確な稜を持って屈曲し、上半部は大きく外反する。口縁端部は肥厚し、面を形成する。外面調整は口縁端部にヨコナデを、杯上部には斜め方向のヘラミガキを、杯下半部から底部にかけては横方向のハケメの後縱方向のヘラミガキを施す。内面上部には横方向のヘラミガキ、下半部から底部には斜め方向のハケメの後放射状にヘラミガキを施す。接合痕から、稜となる箇所で粘土を繰り足していることがわかる。胎土は非常に精良で、1 mm以下の白色砂粒をわずかに含む。内外面ともに灰白色から灰黄褐色を呈する。V-4に属すると考えられる。*I38～I45*は小型のものである。*I38*は杯部のみ残存する。底部はほぼ水平で、体部がやや外反しつつ伸びる。口縁端部は丸く收める。調整は全面に強いヨコナデが施される。胎土は比較的精良で、1 mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を含む。内面は灰白色から暗灰黄色、外面は灰白色を呈する。庄内4とみられる。*I39*は杯部のみ残存する。底部はほぼ水平で、体部がやや外反しつつ伸びる。口縁端部は丸く收める。調整は体部外面にはヨコナデが認められ、底部にはハケメの後ヨコナデが施される。内面は体部にヨコナデが行われる。見込み部は不明瞭であるが、ヘラミガキが施されている可能性が高い。粘土の接合痕から、杯部の製作は円盤状の粘土板を作成し、そこに口縁部となる粘土紐を付け足していくという順序が推測できる。胎土は比較的精良であるが、1 mm以下の白色砂粒や石英を多く含む。内面は灰黄色から暗灰黄色、外面はにぶい黄橙色から灰黄褐色を呈する。庄内4とみられる。*I40*は端部が角張り、外反する脚部をもち、杯部には明確な稜線が入る。外面調整は稜線より上方の杯部には横方向のヘラミガキが、それ以下では縱方向のヘラミガキが施される。なお、脚部は縱方向のヘラミガキの前に横方向のヘラミガキを行っているようである。内面は杯部に横・縱方向のヘラミガキ、脚部上半をナデ、脚部下半を横方向のヘラミガキで仕上げる。胎土は精良で、1 mm大の赤色砂粒や白色砂粒をまばらに含む。内

外面ともに灰白色からにぶい橙色を呈する。庄内2か。*III*は杯部とわずかな脚柱部の上端が残存する。杯底部は水平に広がり、杯部は外傾し、直線的に伸びる。口縁端部は丸く收める。外面調整は全面に継及び横方向のハケメを施した後、杯体部に継方向のヘラミガキを行う。わずかに残存する脚部には横方向のヘラミガキが施されていたようである。内面は横・斜め方向のハケメの後放射状にヘラミガキを施す。脚部との接合は「付加法」であったとみられる。杯部は、粘土の接合痕から円盤状の底部を作成し、そこに口縁部となる粘土紐を付け足していくという順序で製作されたと考えられる。口縁部を付け足す場所にはハケメを施し、凹凸をつける。胎土は比較的精良であるが、2mm大の赤色砂粒や白色砂粒をまばらに含む。内面は灰白色から暗灰黄色を、外面は灰白色を呈し、内面には黒斑が認められる。庄内4とみられる。*II2*は杯部が水平に開き、明確な稜をもって斜め上方に屈曲する。脚柱部はわずかに膨らみをもちつつ外傾する。外面調整は口縁部にヨコナデを施し、杯部にはハケメの後ナデを行う。脚柱部は板ナデを行った後ナデで仕上げる。内面は杯部上半にヨコナデ、下半に横方向のハケメを施す。脚柱部の半ばまではヨコナデが認められるが、それより奥には絞り目が顕著に残る。杯部と脚部の接合は「脚頂部凸面接合」による。胎土は非常に精良で、1mm以下の赤色砂粒や黒褐色砂粒をまばらに含む。内面は灰黄褐色、外面は褐色から灰白色を呈し、稜より下方にススが付着する。庄内4～布留1と考えられる。*II3*は杯部が水平に開き、明確な稜をもって斜め上方に屈曲する。外面調整は、杯部の棱より上方は横・斜め方向のハケメの後継方向のヘラミガキ、稜より下方には多方向のハケメを施す。内面は杯上部にヨコナデの後横方向のハケメを行う。見込み部はヨコナデによって仕上げる。「脚頂部凸面接合」により、杯部と脚部を接合する。杯部の製作は、粘土の接合痕から円盤状の粘土板を作成し、そこに口縁部となる粘土紐を付け足していくという順序が推測できる。他の高杯に比べて器厚が厚い。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒を含む。内面はにぶい黄橙色、外面は灰白色を呈する。稜より下方の一部にススが付着する。*III*は下方に稜をもつ椀状を呈し、口縁端部はやや角張って面をもつ。外面調整は稜より上方にはヨコナデが、稜より下方にはハケメの後ナデが施される。内面は口縁部に継方向のハケメが認められる。口縁部以下はハケメの後にナデが施されたとみられる。底部周辺には幅0.9～1cm程度の板状工具痕が複数観察できる。脚部との接合は「脚頂部凸面接合」と思われる。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒を含む。内面は灰黄褐色から黒褐色を、外面は黄灰色から灰白色で、一部黒褐色を呈する。外面は稜線より上方に、内面は口縁部沿いにススが多く付着する。*II5*は中央部に稜をもち、端部が丸い杯部から脚部がわずかに内湾しつつ伸び、端部は肥厚し、接地面を形成する。外面は口縁端部をヨコナデし、杯上半部には横方向のヘラミガキを施す。杯下半部には継・斜め方向のハケメの後強い板ナデを行う。脚部上半は継方向のハケメの後継方向のヘラミガキを、下半には継方向のハケメを施す。内面調整は口縁部に横方向のハケメを行った後全体に放射状のヘラミガキを施す。杯中央部には幅1mmの沈線が1条入る。脚部には径1cmの円形透孔が5ヶ所穿孔される。また、脚部の上方には幅1cm程度の板状工具痕が複数確認できる。胎土は1.5mm以下の赤色砂粒や白色砂粒、石英を含み、比較的精良である。内外面ともに灰白色を呈する。

II6～*II8*は高杯Bである。*II6*は杯部のみ残存する。杯部は中央付近に段をもち、下半はほぼ水平に、上半部はわずかに内湾しつつ広がる。外面及び内面の上半には横方向の細かいヘラミガキが緻密に施され、内面下半にはハケメの後ヨコナデを行う。脚部との接合は「脚頂部凸面接合」で、接合

面にはより強固に接合するためにつけられたとみられる放射状の刻み目が残る。胎土はやや粗く、1mm以下の赤色砂粒や黒褐色砂粒を多く含む。内面は灰白色から褐色を、外面は灰白色から淡赤橙色を呈する。*I47*は中空の脚柱部をもち、杯部は中央付近に段をもち下半はほぼ水平に広がる。杯上半部はわずかに内湾しつつ広がり、口縁端部を上方につまみ上げる。外面調整には杯部にハケメ後横方向のヘラミガキが、脚柱部に縱方向の板ナデが施される。内面は摩減が進んでおり不明瞭であるが、杯部にはハケメ状の痕跡が認められる。脚柱部にはナデが施され、絞り目が残る。「脚頂部凸面接合」により、杯部と脚部を接合する。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒を含む。内面は黄灰色から橙色、外面は褐色から橙色を呈する。*I48*は中実の脚柱部をもち、杯部は中央付近に段をもち、下半は外傾しつつ広がる。杯上半部はゆるく外反しつつ広がり、口縁端部を斜め上方につまみ上げる。脚据部は直線的に外傾し、端部は尖り、接地面をもつ。外面は杯部に縱方向のハケメによる調整を施した後、横方向の細かいヘラミガキを行い、最後に縱方向のヘラミガキによって仕上げる。脚柱部には横方向の細かいヘラミガキを施し、脚据部には縱方向のヘラミガキを施す。内面には杯部上段は縱方向のヘラミガキ、下段は横方向のハケメの後横方向のヘラミガキを施す。底部には縱方向のヘラミガキを施す。脚据部はナデによって仕上げる。直径1cmの透孔を4ヶ所穿孔する。胎土は1mm大の赤色～褐色砂粒を多く含むが、比較的精良である。内外面ともに灰白色からにぶい黄橙色を呈する。

I49～*I51*は高杯Cである。*I49*は杯部から脚柱部までが残存する。口縁部は上方に立ち上がり、端部は尖る。脚柱部は外傾しつつ広がる。脚柱部下半は欠損しているものの、他の楕型高杯と同様に脚柱部は短く、脚据部が大きく広がっていたものと推測できる。杯部外面には縱方向のヘラミガキを、脚柱部には横方向のヘラミガキを施す。内面は摩減が進んでおり、不明瞭であるが、ナデやヘラミガキによって調整されていると思われる。胎土は精良で、1mm以下の砂粒をまばらに含む。内面は褐色を、外面はにぶい赤橙色を呈する。内外面ともに二次焼成を受けており、一部が赤灰色に変色する。*I50*は、残存状況はあまりよくないものの、脚据端部以外を復元することができた。口縁部は上方に立ち上がり鋭く尖る。外面は摩減が進んでおり、調整は不明であるが、内面は杯部にはナデ、脚部には斜め方向のハケメが確認できる。径1.6cmの円形透孔が現状で2ヶ所確認でき、本来は4ヶ所穿孔されていたものとみられる。杯部と脚部の接合は、脚部を先に製作し、杯部を付け足す「附加法」によると考えられる。胎土は1mm以下の白色砂粒・赤色砂粒を多く含む。内面にはにぶい黄橙色から灰白色を呈し、外面は淡橙色から明褐色を呈する。*I51*は完形に復元することができた。内湾する杯部で、短い脚柱部を経て、直線的に外傾する脚据部をもち、口縁端部・脚据端部とともに尖る。内外面ともに摩減が進んでおり不明瞭であるが、杯部外面には横方向のヘラミガキ、脚部外面には縱方向のヘラミガキが施される。杯部内面は縱～斜め方向のヘラミガキ、脚部内面には横方向のハケメが施される。径1cmの円形透孔が4ヶ所穿孔される。胎土は比較的精良であるが、2mm以下の砂粒を多く含む。内面は灰褐色から浅黄褐色、外面は灰白色を呈する。*I52*は杯部下半～脚据部である。短い脚柱部で、脚据部が直線的に外に広がる。他の高杯Cに分類したものに比べて、脚据の径が大きい。脚据端部は尖る。摩減が進んでおり、調整は不明瞭であるが、外面は杯部にヘラミガキ、脚柱部に板ナデ後横方向のヘラミガキ、脚据部に縱・斜め方向のハケメが確認できる。内面は杯部にナデ、脚柱部に絞り目、ヘラケズリ、脚据部に横・縱方向のハケメがみられる。径0.9cmの透孔が現

状で3ヶ所認められ、本来は4ヶ所に穿孔されていたと推定できる。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、やや粗い。内面は灰黄色から灰白色、外面は灰白色を呈する。**I53**は杯部の残存状況が良くないものの、完形に復元することができた。椀状の杯部に非常に短い脚柱部がつき、やや外反しつつ脚裾部が広がる。口縁端部・脚裾端部ともに丸い。他の高杯Cと比較して、脚柱部が非常に短く、脚裾部が広がらないという特徴が指摘できる。外面は杯部にナデ、脚柱部に縱方向のハケメ、脚裾部に横向のハケメ後ヨコナデを施す。内面は摩滅が進んでいるため不明瞭であるが、脚部はヨコナデが施されているとみられる。胎土はやや粗く、1mm以下の赤色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色から褐灰色を呈する。**I54**は脚部である。やや外反する脚部で、端部にわずかに面をもつ。他の高杯Cは、脚柱部と脚裾部は明瞭に屈曲するものが多いが、**I54**は明確な屈折点をもたない。外面は杯部・脚部ともにヨコナデが、内面は杯部にナデ、脚部にハケメが施される。胎土は1mm以下の砂粒を多く含むが、精良である。内外面ともににぶい橙色から明褐灰色を呈する。

I55は高杯Dである。口縁部が水平に長く伸び、端部が上下に肥厚することで面を作る。面には4条の擬凹線を施した後、竹管文を受けた円形浮文をつける。外面は口縁端部にヨコナデ、杯部に縱・斜め方向のハケメの後縦方向のヘラミガキを、内面は口縁端部にヨコナデ、杯部に横方向のハケメの後斜め方向のヘラミガキを施す。胎土は2mm大の白色砂粒をまばらに含むものの、比較的精良である。内外面ともににぶい黄橙色から灰黄褐色を呈する。V-4か。

I56~I62は高杯の脚部である。**I56**は中空の脚部で、直線的に広がる。外面調整には縦方向のナデ後横方向のヘラミガキが、内面調整にはナデ、ヘラケズリが施され、内面の奥には絞り目が認められる。胎土は1mm以下の砂粒を多く含み、やや粗い。内外面ともに灰白色を呈する。**I57**は杯の底部から脚柱部が残存する。杯底部はほぼ水平に伸び、脚柱部は中空で、直線的に広がり、脚裾部で明瞭に屈曲する。外面調整は杯部には横方向のヘラミガキ、脚柱部には縦方向の板ナデの後横方向のナデを行い、その後横方向のヘラミガキで仕上げる。脚柱部下端から脚裾部にかけては縦方向のハケメも認められる。内面は杯部には放射状にハケメを施した後ヘラミガキを行う。脚柱部にはナデ、脚裾部にはハケメの後ナデを施す。杯部と脚部の屈曲点には粘土の接合痕が認められる。胎土は精良で、1mm以下の砂粒をまばらに含む。内外面ともに灰白色から明褐灰色を呈する。**I58**は中空の脚部で、脚柱部から脚裾部への屈曲はやや緩やかである。脚裾端部は尖り、接地面をもつ。外面調整には縦方向のハケメが施され、内面は上方をナデ、下方を横方向のヘラケズリによって仕上げる。径1.3cmの円形透孔が3ヶ所に穿孔される。胎土は2mm以下の石英や白色砂粒を多く含み、やや粗い。内面は灰黄色から灰黄褐色、外面は灰白色から黒褐色を呈する。**I59**はラッパ状に広がる脚部で、脚柱部と脚裾部で明確な屈曲点をもたない。脚裾端部は尖る。外面調整は全体に多方向のヘラミガキを行い、杯部との接合箇所と脚裾端部にヨコナデを施す。内面は杯底部にはヘラミガキが、脚部にはヘラケズリや横方向のハケメが認められる。脚柱部奥には絞り目もみられる。脚柱頂部にヘラミガキが認められる。「付加法」による製作である可能性が高い。約0.8cmの円形透孔が4ヶ所に穿孔される。胎土はやや粗く、2mm以下の赤色砂粒や白色砂粒を多く含む。内面は灰白色を、外面は浅黄橙色から浅黄色を呈する。**I60**は杯部下半から脚裾部が残存する。脚柱部は中実で、脚裾部が明瞭に屈曲し広がる。形状から高杯Bである可能性が考えられる。外面調整は杯部を縦方向のハケメ後横方向のヘラミガキ、脚柱部を横方向のヘラミガキ、脚裾部を縦方向のハケメ後ナデで仕上げる。内面は杯部には

不明瞭であるもののナデやヘラミガキが、脚据部にはハケメの後ナデを施す。径1.2cmの円形透孔が4ヶ所に穿孔される。胎土は1.5mm以下の砂粒を多く含むが、比較的精良である。**I61**は直線的な短い脚部で、端部は尖る。高杯Cの脚部である可能性が考えられる。外側調整は杯部には横方向のヘラミガキ、杯下端部には縦方向のヘラミガキの後横方向のヘラミガキ、脚部にはヨコナデを施す。内側調整は杯部にハケメ後ヘラミガキ、杯底部にヨコナデ、脚部にヨコナデを施す。胎土は精良であるが、1mm大の赤色砂粒や白色砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色を呈する。**I62**は直線的な短い脚部をもち、端部を丸く収める。高杯Cである可能性が考えられる。杯部と脚部の境に帯状の粘土を張り付けた補強している。外側は杯部にヨコナデ、脚部に縦・横方向のヘラミガキを、内側は杯部にナデ、脚部に斜め方向のハケメを施す。脚端部はヨコナデを行なう。胎土は精良で、1mm大の白色砂粒をまばらに含む。内側は黄灰色から灰白色、外側は黄灰色を呈する。

器台(163～168) (図版19 写真図版36)

I63は器台Aである。浅い椀状を呈し、口縁端部が尖る。中央部には脚部を差し込み接合したと考えられる孔がみられる。外側は杯体部に横方向のヘラミガキを、口縁端部はヨコナデを施す。内側は摩滅が進んでおり、調整は不明である。胎土は1～2mm大の砂粒を多く含み、粗い土を使用している。内外面ともに灰白色から黄灰色を呈する。内面上方は熱を受けており、黒変している箇所が認められる。

I64～I66は器台Bである。**I64**は逆円錐形の浅い受け部をもち、口縁端部を上方につまみ上げて面をつくる。外側調整は口縁部にヨコナデ、体部には横方向のヘラミガキが施される。口縁端部の面には強いヨコナデによってつけられた3条の擬凹線が認められる。内側にはヨコナデの後放射状にヘラミガキを施す。胎土は0.5mmを超える砂粒は無く、非常に精良である。内側は灰白色から褐灰色、外側はにぶい橙色を呈する。**I65**は逆円錐形の浅い受け部をもち、口縁部を斜め上方につまみ上げ、端部を丸く収める。脚部は円錐形を呈し、端部は角張り、接地面を形成する。外側調整は口縁端部にヨコナデ、受け部体部に縦方向のヘラケズリの後ナデ、脚部に縦方向のヘラケズリの後ナデを施す。内側は受け部に放射状のヘラミガキ、脚部に斜め方向のハケメを施す。径1.2cmの円形透孔が現状で3ヶ所確認できるが、本来は4ヶ所であった可能性が高い。受け部中央に孔を設け、脚部を差し込み接合していたと考えられる。胎土は1mm以下の砂粒をまばらに含むものの、非常に精良である。内外面ともに灰白色からにぶい黄橙色を呈する。**I66**は脚部である。円錐形を呈し、端部は細く丸める。外側は上半を縦方向の板ナデを、下半は横方向のハケメを施す。内側は上半をユビオサエで成形した後ヘラケズリを行い調整する。下半は斜め方向のハケメを施した後端部をヨコナデする。直径0.8cmの円形透孔を4ヶ所穿孔する。胎土は非常に精良で、1mm未満の白色砂粒を含む。内外面ともに橙色から明赤褐色を呈し、外側には黒斑がみられる。

I67～I68は器台Cである。**I67**は内溝する脚部である。端部は角張り、接地面が水平となる。外側はヘラミガキを行い、端部にはナデを施す。内側には斜め方向のハケメを施す。直径1cmの円形透孔を4ヶ所穿孔する。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒をまばらに含む。内側は黄灰色から灰黄色を、外側は黄灰色から灰色を呈し、一部黒褐色となる。**I68**は内溝する脚部をもち、端部は尖る。外側にはナデを、内側には板ナデを施す。内側には、板ナデを施す際にいたとみられる工具痕が多数

認められ、幅0.9~1.1cmを測る。直径0.6~0.7cmの穿孔が施されており、現状で3ヶ所みられる。残存状況から判断すると、本来は6ヶ所穿孔されていた可能性が高い。*I67*と比べて器厚が厚い。胎土は1mm大の白色砂粒を含み、やや粗い。内面は黒色から黄灰色、外面は黄灰色から黒色を呈し、外側のはうがやや明るい色調を呈する。

製塩土器(169~174) (図版19 写真図版36)

*I69~I71*は製塩土器である。いずれも脚台直式である。体部は欠損し、脚部のみ残存する。*I69*は脚部が直線的に伸び、端部は尖る。底部内面にはユビオサエが顕著に認められる。また、外面にもユビオサエの痕跡がみられる。なお、ユビオサエの後には、内外面ともにナデが施される。胎土は1~2mm大の砂粒を多く含む。灰白色から灰赤色を呈し、特に脚部内面の赤みが強い。*I70*は脚部がわずかに外反し、先端は肥厚する。今回出土した他の製塩土器と比較して脚部の器厚が厚い。脚部の調整は内外面ともにヨコナデが施される。胎土は1~2mm大の砂粒を多く含む。内外面ともに赤褐色から褐灰色を呈し、外面には被熱により黒変している箇所が認められる。*I71*は脚部が外反し、端部は丸く肥厚する。脚部外面はナデが施されるが、内面にはユビオサエが施される。脚部の成形は粗雑で、器厚の違いや歪みが大きい。胎土は1~4mm大の砂粒を含み、他の製塩土器に比べて、粗い。*I72*は脚部が外反し、端部はつまむように成形される。内外面ともにユビオサエがみられ、脚部内面の上方はナデによって仕上げられる。胎土は1~2mm大の砂粒を多く含み、4mm大のものもわずかに入る。内外面ともに灰白色~灰赤色を呈する。*I73*は脚部が外反し、端部は尖る。胎土は1mm大の砂粒を含むが、比較的精良である。外面は灰白色で、一部明赤灰色に変色する。内面は一部灰白色が残るもののはば全面で明赤灰色を呈する。*I74*は脚部がゆるく外反し、端部を丸く収める。器厚は他の製塩土器に比べて薄い。胎土中には1~2mm大の砂粒が多く含まれる。内外面ともに明褐灰色から灰黄褐色を呈する。

文様片(175~180) (図版20 写真図版37)

*I75*は壺の頸部である。頸部に突帯を貼り付け、その頂部及び上下の裾部に刺み目を施す。胎土は、1~2mm大の白色・赤色砂粒を多く含み、やや粗い。内面はにぶい褐色を、外面はにぶい橙色から黄灰色を呈する。なお、突帯より上部にススが付着する。*I76*は壺の肩部と考えられる。外面はタタキを施した後に板ナデ及び縦方向のハケメで調整している。その後、縦方向に2条のヘラ描き沈線が刻まれる。内面はユビオサエの後、縦方向の板ナデにより整形される。胎土は1mm以下の砂粒をまばらに含む比較的精良なものを用いている。内外面ともに灰白色を呈する。*I77~I79*は小片であるため、器種は不明であるが、壺もしくは壺の体部であろう。いずれも沈線が数条施される。線刻は直線的で、先端の細い工具を用いて鋭く施される。胎土はわずかに砂粒を含むものの精良で、内面は灰白色を、外面は褐灰色から灰白色を呈する。*I77~I79*は胎土及び施文の特徴から同一個体である可能性が考えられる。*I80*は水平口縁高杯の口縁端部である。下方に伸ばすことで面を形成し、ヘラ描きにより鋸歯文を施す。また、上面には4条からなる波状文が施文される。胎土は精良で、にぶい黃褐色を呈する。弥生土器であり、IV様式の後半に属するものと思われる。

(5) 包含層出土遺物（図版20 写真図版37）

壺(181～184)

*181*は壺Aの口縁部である。口縁部は上下に肥厚し、面を持ち、3条の擬凹線が施される。内外面ともに摩耗しており、不明瞭であるが、外面にはハケメが施されているとみられる。胎土は粗く、3mm以下の白色砂粒や黒褐色砂粒を多く含む。内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色からにぶい赤褐色を呈する。

*182*は壺Bの口縁部である。口縁端部はわずかに外側に屈曲し、面をもつ。外面はヨコナデ、内面には斜め方向のハケメが施される。胎土は0.5mm以下の白色砂粒をまばらに含み、非常に精良である。内面は灰黄色、外面は灰黄褐色を呈する。外面にはススが多く付着する。庄内4か。

*183～184*は壺Fである。*183*は口縁部～頭部で、外反する頭部から口縁部がわずかに外反しつつ上方に伸びる。内外面ともに摩減しており、調整は不明瞭であるが、ヨコナデを施されたものと考えられる。口縁部には5条の凹線が認められる。胎土は3mm以下の白色砂粒や石英を多く含み、粗い。内外面ともににぶい黄橙色からにぶい黄褐色を呈する。胎土中の角閃石は顕著ではなく、地元で製作されたとみられる他の土器の胎土と類似しており、在地産である可能性が高い。*184*は口縁部～頭部である。外傾する頭部から口縁部が内傾して伸びる。調整は全体にヨコナデが施され、内面にはユビオサエの痕跡が残る。また、内面の頭部下端には縱方向のハケメが認められる。外面の口縁部下端には強いヨコナデによって3条の凹線がつけられる。胎土は比較的精良で、1mm以下の白色砂粒を含む。雲母や角閃石を多く含む胎土を用いており、譜岐からの搬入品と判断できる。内面は黄灰色、外面は褐灰色から灰黄色を呈する。内面の頭部にススの付着が認められる。

2 石製品（図版21 写真図版38・39）

*S1*は深成岩製の敲石である。旧河道埋土である黒色シルト～細砂層（調査区東壁第21層に相当）から出土した。角を落として整形しており、円柱状を呈する。端部を欠損しており、残存長13.9cm、幅6.7cm、厚さ6.3cm、重さ836.0gを測る。下端部及び側面の一部に敲打痕がみられる。

*S2*は花崗岩質の敲石である。旧河道埋土である黒色シルト層（調査区東壁第19層に相当）から出土した。梢円形を呈し、長さ8.1cm、幅6.3cm、厚さ6.0cm、重さ414.0gを測る。上下両端に敲打痕がみられる。

*S3*は細粒砂岩製の小型の砥石である。旧河道（調査区中央部アゼ南壁第10層）から出土した。長さ12.9cm、最大幅4.8cm、最大厚4.1cm、最小厚2.0cmを測り、重さは230.5gである。金属用の手持ち砥石であると考えられる。4面の砥面が形成されており、いずれの砥面も大きく内湾し、よく使用されている。また、各面ともに被熱痕が認められる。上面には平行する3条の線刻とそれに直交する1条の線刻がなされる。非常に緻密な石材で製作されており、仕上げないし研ぎ直し用である可能性が考えられる。

*S4*はSH01内から検出された台石である。長軸32.5cm、短軸22.4cm、厚さ10.5cmを測り、重さは12.8kgである。表面の風化のため不明瞭ではあるが、石材は花崗斑岩である可能性が高い。上面や下面、側面の2面に摩耗痕、敲打痕がみられ、上面が最も摩耗・敲打される。下面及び側面の摩耗・敲打はわずかで、明瞭ではない。SH01は焼失住居であり、*S4*の上面も被熱痕跡が認められることか

ら、焼失時にSH01内に置かれていたことが明らかである。SH01北東辺中央に接して置かれており、高床部が途切れる箇所に位置している。壁に隣接して置かれており、対辺側には焼土がみられ跡と考えられることから、*S4*はSH01の入り口に置かれ、ステップとして転用された可能性がある。

3 木製品（図版21 写真図版39）

*W1*は紡織具の可能性が考えられる。旧河道中の黒色シルト～細砂層（調査区東壁第21層）から出土した。板目方向に木取りを行う。薄い棒状の形状を持ち、片方の端部は欠損している。残存する側は、先端が丸く削り出される。残存長6.1cm、最大幅2.0cm、最小幅1.2cm、厚さ0.9cmを測る。樹種同定の結果、スギであると判断された。

*W2*は柱材である。SH01の主柱穴であるSP19中から出土した。立位で検出され、残存状況も良いことから原位置を保っていたと考えられる。長さは約17cm残り、直径は約15cmである。樹種同定の結果、コナラ属コナラ亜属コナラ節と判断された。

表3 飯田遺跡出土石製品観察表

番号	出土遺構	器種	石材	法量(cm)			法量(g)	残存
				長さ	幅	厚さ		
S1	旧河道	敲石	深成岩	(139)	6.7	6.3	836.0	上部欠損
S2	旧河道	敲石	花崗岩	8.1	6.3	6	414.0	完存
S3	旧河道	砥石	細粒砂岩	12.9	4.8	2.0~4.1	230.5	完存
S4	SH01	台石	花崗斑岩	32.5	22.4	10.5	12820.0	完存

表4 飯田遺跡出土木製品観察表

番号	出土遺構	種別	樹種	法量(cm)			法量(g)
				長さ	幅	厚さ	
W1	旧河道	木製品	スギ	(6.1)	2.0(最大) 1.2(最小)	0.9	
W2	SH01-SP19	柱	コナラ節	17.2	15.5	12	

第4章 自然科学分析

第1節 飯田遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

((株) 加速器分析研究所)

1 測定対象試料

飯田遺跡は、兵庫県姫路市飯田448（北緯34.81499°、東経134.671384°）に所在し、沖積地に立地する。測定対象試料は、堅穴住居跡に伴う土坑、柱穴から出土した木炭3点である（表5）。試料はいずれも柱材と考えられ、弥生時代末（庄内期）に位置づけられている。

2 測定の意義

堅穴住居跡に伴う土坑、柱穴より出土した柱材の絶対年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ビンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表5に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表5）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表5に、補正していない値を参考値として表6に示した。¹⁴C年代と

- 誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表5に、補正していない値を参考値として表6に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表6に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表5、6に示す。

試料の ^{14}C 年代は、1が $1810 \pm 20\text{yrBP}$ 、2が $1830 \pm 20\text{yrBP}$ 、3が $1880 \pm 20\text{yrBP}$ である。历年較正年代 (1σ) は、1が $141 \sim 242\text{cal AD}$ の間に3つの範囲、2が $138 \sim 215\text{cal AD}$ の範囲、3が $76 \sim 137\text{cal AD}$ の範囲で示される。

なお、試料1～3が含まれる1～3世紀頃の历年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾崎2009、坂本2010など)。この日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を历年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表5 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-160431	1	IIZ SH01 中央土壌	木炭	AaA	-27.85 ± 0.49	1810 ± 20	79.83 ± 0.23
IAAA-160432	2	IIZ SP17	木炭	AAA	-28.67 ± 0.49	1830 ± 20	79.60 ± 0.23
IAAA-160433	3	IIZ SP19	木片	AAA	-27.21 ± 0.54	1880 ± 20	79.12 ± 0.23

[#8070]

表6 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし Age(yrBP) pMC(%)	曆年較正用 yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
			141calAD-159calAD(12.8%) 166calAD-196calAD(23.3%) 209calAD-242calAD(32.1%)	130calAD-255calAD(91.5%) 300calAD-318calAD(3.9%)
IAAA-160431	1,860 ± 20	79.36 ± 0.22	1,809 ± 23	141calAD-159calAD(12.8%) 166calAD-196calAD(23.3%) 209calAD-242calAD(32.1%)
IAAA-160432	1,890 ± 20	79.01 ± 0.22	1,832 ± 23	138calAD-215calAD(68.2%)
IAAA-160433	1,920 ± 20	78.76 ± 0.21	1,881 ± 23	76calAD-137calAD(68.2%) 126calAD-243calAD(95.4%) 70calAD-214calAD(95.4%)

[参考値]

引用・参考文献

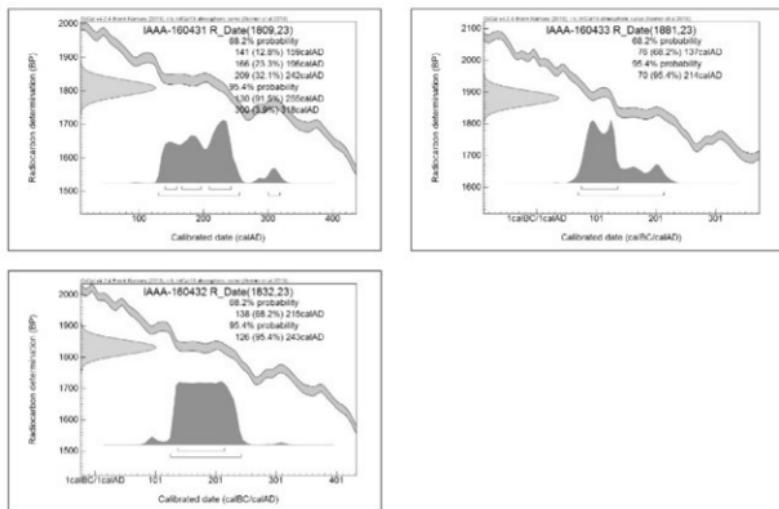
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代. 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松本武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭. 同成社. 225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム 予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19 (3), 355-363



第14図 曆年較正年代グラフ（参考）

第2節 飯田遺跡における出土木製品の樹種同定

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

飯田遺跡は、弥生時代末～古墳時代初頭の大規模集落として知られる長越遺跡に隣接し、同時期の遺構が検出されている。

本報告では、出土した木材、炭化材について、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

1 試料

試料は、飯田遺跡から出土した木製品3点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表7に記す。

2 分析方法

木製品は、木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製して実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表7に示す。木製品は、不明木製品が針葉樹のスギ、柱が広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。また、炭化材は、広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節であった。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔隙部は1～2列、孔隙外で急激に管径を減じた後、漸減しながら火炎状に配列する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

4 考察

樹種同定を実施した木製品2点は、伊東・山田(2012)の木器分類を参考にすれば、建築部材(柱)と

用途不明(不明木製品)に分けられる。また、炭化材は、その他(炭化材)に分類される。これらの木製品と炭化材は、針葉樹のスギと広葉樹のコナラ節に同定された。

同定された各種類の材質をみると、針葉樹のスギは、木理が直通で割裂性と耐水性が比較的高い。広葉樹のコナラ節は、重硬で強度が高い。

器種別にみると、柱は、コナラ節に同定され、強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。炭化材の破片もコナラ節に同定されており、柱穴から出土している状況を考慮すれば、同じく柱材の一部が炭化・残存した可能性がある。

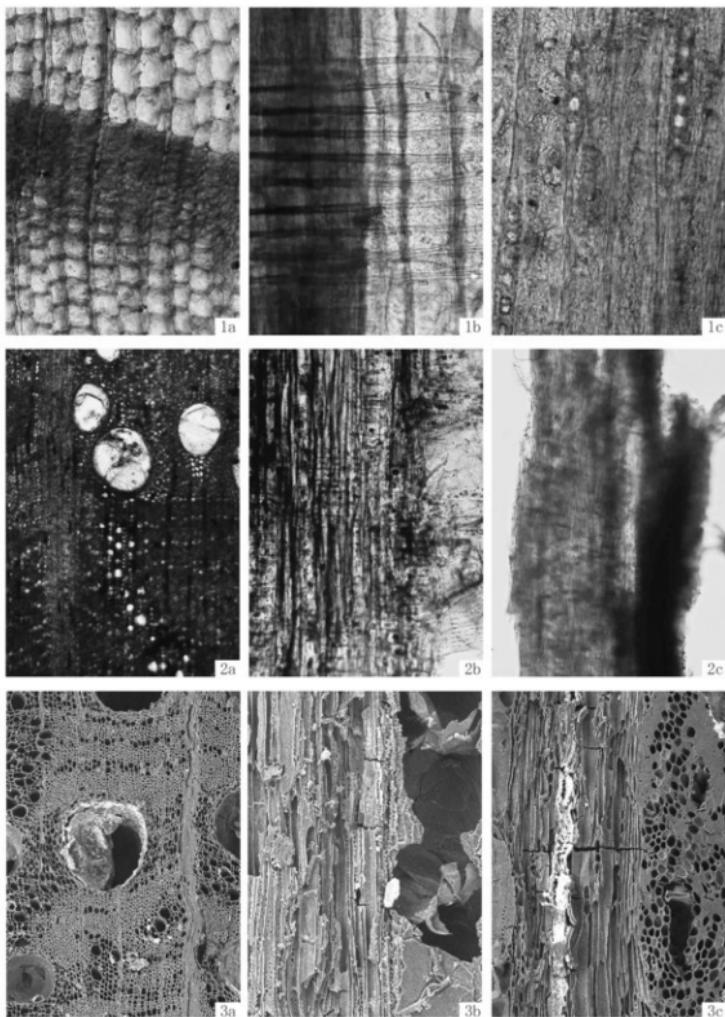
一方、不明木製品は、板目板状を呈する。器種は不明であるが、スギが利用されている状況から、強度よりも加工性等を重視した用材選択が推定される。

表7 飯田遺跡の樹種同定結果

登録番号	報告番号	器種	地区	遺構	層位	木取り	種類
2014130-4	W1	不明木製品	2区東壁際	流路	東壁第21層	板 目	スギ
2014130-5	W2	柱材	1区	SP19		芯持材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		炭化材	1区	SP17		破 片	コナラ属コナラ亜属コナラ節

引用文献

- 林 昭三.1991.日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫.1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料.31.京都大学木質科学研究所.81-181.
- 伊東隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料.32.京都大学木質科学研究所.66-176.
- 伊東隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料.33.京都大学木質科学研究所.83-201.
- 伊東隆夫.1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料.34.京都大学木質科学研究所.30-166.
- 伊東隆夫.1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料.35.京都大学木質科学研究所.47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編).2012.木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社.449p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L. and Gasson P.E. (編).2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修).海青社.70p.
- [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L. and Gasson P.E.(2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 鳥地 謙・伊東隆夫.1982.図説木材組織.地球社.176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編).1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修).海青社.122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



1. スギ(報告番号 W1)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(報告番号 W2)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節(SP17出土炭化材)
 a : 木口, b : 柱目, c : 板目

— 100 μ m:2a
 — 100 μ m:1a, 2b, c
 — 100 μ m:1b, c
 — 100 μ m:3a
 — 100 μ m:3b, c

第 15 図 飯田遺跡の木材・炭化材

第3節 飯田遺跡における出土土器の胎土分析

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

姫路市に所在する飯田遺跡は、播磨平野西部を流れる船場川下流域の右岸に広がる沖積低地上に位置する。本報告では、飯田遺跡から出土した、土師器について、その材質(胎土)の特性を明らかにすることにより、各土器間での胎土の類似性あるいは特異性を見出し、飯田遺跡における土師器の製作事情に関わる資料を作成する。

1 試料

試料は、飯田遺跡から出土した土師器とされる土器片5点である。器種は、壺が2点、甕が3点である。壺のうち、1点は讃岐系、1点は山陰系という所見が示されている。

各試料には試料番号1～5が付されている。各試料の報告番号、器種などは一覧表にして表8に示す。

2 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片及び岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は有効である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片及び微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレバラート全面を行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3 結果

観察結果を表9、図16～20に示す。以下に鉱物片と岩石片の種類構成、砂粒全体の粒径組成、碎屑物・基質・孔隙の割合の順に述べる。

1) 鉱物片・岩石片の種類構成

試料番号1：鉱物片は、斜長石が多く、次いで石英と角閃石が多く、少量の黒雲母を伴う。

岩石片では突出して多い種類ではなく、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、花崗岩類がや

や多い傾向を示し、他に微量の安山岩や斑レイ岩、変質岩などが含まれる。凝灰岩及び流紋岩は結晶質である。

試料番号2：鉱物片は少量の石英と斜長石及び微量の角閃石からなる。岩石片は凝灰岩の多いことが特徴であり、他に少量の多結晶石英や火山ガラス、微量のチャート、頁岩、砂岩の堆積岩類、流紋岩・ディサイト、花崗岩類などが含まれる。凝灰岩及び流紋岩は結晶質であり、火山ガラスは平板上のバブル型を呈する。

試料番号3：鉱物片は角閃石が突出して多く、他に少量の石英と斜長石、微量のカリ長石や黒雲母などが含まれる。岩石片は全体的に微量であり、頁岩、凝灰岩、花崗岩類、斑レイ岩などが含まれる。

試料番号4：鉱物片は石英と斜長石が比較的多く、少量のカリ長石と微量の角閃石や黒雲母などが含まれる。岩石片は特に多い種類ではなく、チャートや頁岩の堆積岩類、凝灰岩や流紋岩・ディサイト及び安山岩の火砕岩・火山岩類、さらに花崗岩類及び粘板岩などが多いがそれも少量ずつ含まれる。

試料番号5：鉱物片は斜長石が多く、次いで石英が多い。他に少量の角閃石と微量のカリ長石を含む。岩石片は少量の花崗岩類と微量の変質岩が含まれるのみである。

2) 砂粒全体の粒径組成

試料番号1、3、5の3点は細粒砂をモードとし、次いで中粒砂の割合も比較的高い。試料番号2と4はともに粗粒砂をモードとするが、試料番号4は中粒砂の割合も比較的高いのに対し、試料番号2は粗粒砂以外の粒径の割合は低い。

3) 碎屑物・基質・孔隙の割合

碎屑物の割合は、いずれも20%前後であり、試料間で特に顕著な差異は認められない。その中で試料番号3は他の試料よりも碎屑物の割合が高く、試料番号2は他の試料よりも低い傾向が認められる。

4 考察

2010年度の飯田遺跡の発掘調査により出土した土師器の胎土分析(以下前報とする)では、播磨産という所見の示された試料のほとんどが、結晶質の凝灰岩の多い組成であった。その組成は、今回の分析の試料番号2の組成にはほぼ相当する。兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析における組成の分類名ではF6類とした胎土である。F6類の鉱物・岩石組成については前報でも述べたように飯田遺跡周辺の地質学的背景と整合すると考えられた。すなわち、結晶質の凝灰岩や流紋岩・ディサイトは、姫路市内に分布する丘陵を構成している中生代白亜紀の相生層群の中の上部亜層群に相当する伊勢層に由来し、花崗岩類は、飯田遺跡至近の北西方の丘陵の北側に分布する丘陵(桜山貯水池を開いている)を構成している白亜紀・古第三紀の斑状角閃石黒雲母花崗閃綠岩(桜山岩体)に由来すると考えられる。さらに火山ガラスは、姫路市中心市街地を取り囲む丘陵の縁辺に形成された山麓緩斜面堆積物中に挟まれるテフラ層に由来すると考えられた(以上、猪木(1981)、日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)、山元ほか(2000)の地質記載参照)。以上のことから、今回の分析における試料番号2とされ

た土師器についても飯田遺跡を含む播磨平野西部で作製された可能性が高いと考えられる。

前報において播磨産の所見が示された試料の中には、F類ではなくA類に分類された胎土も認められた。A類の特徴は、堆積岩類と火碎岩・火山岩類及び花崗岩類の3者を同量程度に含むことであるが、今回の試料の中では、試料番号4の胎土がA類に分類される。A類についても前報では播磨平野西部の地質学的背景に整合する組成として播磨産の所見を支持する胎土であると考えた。したがって、試料番号4についても播磨平野西部産である可能性が高いと考えられる。なお、発掘調査者所見では、試料番号4は山陰系とされているが、試料番号4に含まれる凝灰岩と流紋岩・デイサイトは結晶質であることなども考慮すれば、山陰産というよりも播磨産である可能性の方が高いと考えられる。

試料番号1の鉱物・岩石組成は、上述したA類の組成から堆積岩類が欠けた組成に相当すると言えるが、含まれる凝灰岩及び流紋岩・デイサイトがやはり結晶質であることから、播磨平野西部産である可能性がある。堆積岩類が計数されなかった組成については、播磨平野西部域内での局所的な堆積物の組成の差異によるものと考えられる。

試料番号5の岩石組成は花崗岩類のみである(分類名はC類に相当する)ことから、試料番号5の材料採取地は、花崗岩類の分布域を背景とする地域であることが推定される。前報では、同様にはば花崗岩類のみの岩石組成を示す試料について、桜山岩体からなる丘陵内の谷内の堆積物を想定することにより、播磨産の可能性があると考えた。しかし、試料番号5の場合は、鉱物組成に黒雲母が認められていないことから、角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなる桜山岩体由来の砂であることは想定し難い。角閃石閃緑岩などの分布域に由来する砂が材料とされている可能性があると考えられるが、現時点ではその具体的な地域性を推定できる資料はない。

試料番号3の胎土の特徴は、多量の角閃石の鉱物片である。これまでの兵庫県下における胎土分析にも同様の組成は、しばしば認められており、B類の分類名を付けている。組成から推定される地質学的背景は、角閃石黒雲母花崗閃緑岩の分布を主体とし、周辺に堆積岩類や斑レイ岩なども分布するような地質である。また、これまでの分析事例では、同様の組成を示す試料は、多くの場合、生駒西麓産の所見が示されている。上述した地質学的背景は、生駒山地周辺の地質とも整合することから、現時点では生駒西麓産の可能性があると考えられるが、今後の検討が必要である。

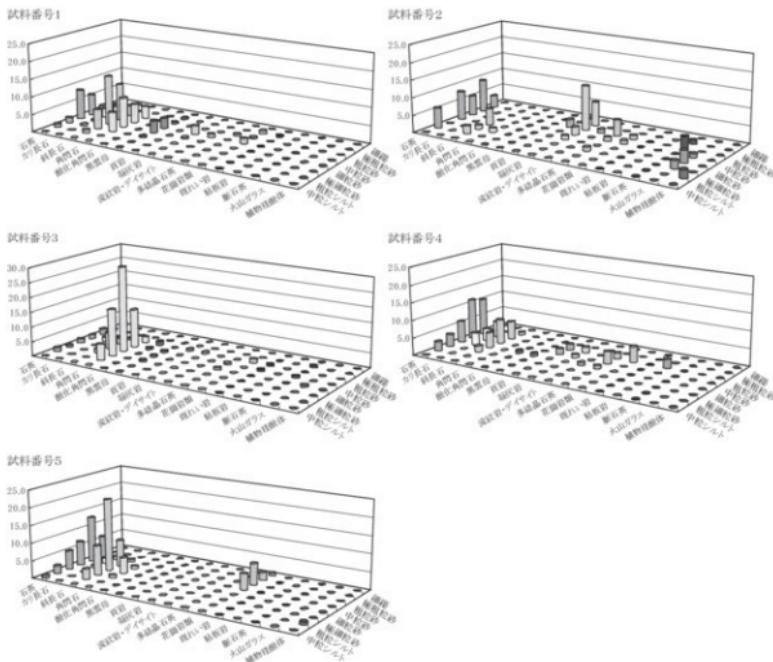
(矢作健二・石岡智武)

引用文献

- 猪木幸男1981.20万分の1地質図幅「姫路」地質調査所.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高1999.瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集.120-121.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会1987.日本の地質6 近畿地方.共立出版.297p.
- 山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和2000.龍野地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅).
地質調査所.66p.

表8 試料一覧及び胎土分類結果

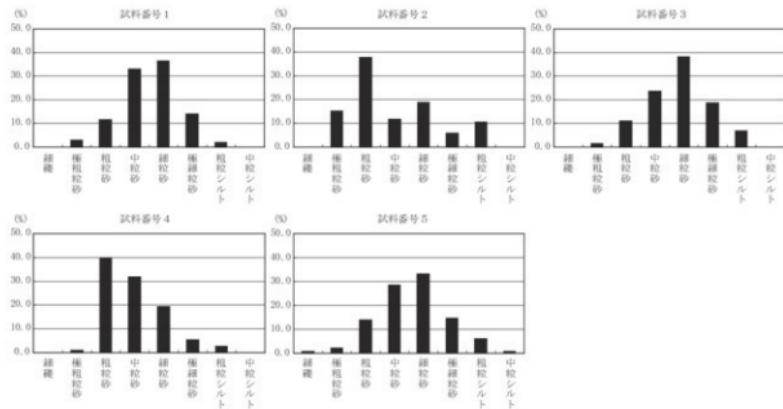
試料番号	報告番号	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	出土年月日	胎土分類
1	48	讃岐系	壺	1	SH01	東壁第21層	2015.01.28	A'
2	82	土師器	甕	2	流路	東壁第21層	2015.01.28	F
3	93	土師器	甕	2	流路	東壁第21層	2015.02.19	B
4	100	山陰系	壺	2	流路(微高地斜面)	東壁第23層	2015.02.04	A
5	103	土師器	甕	2	流路	東壁第21層	2015.01.28	C



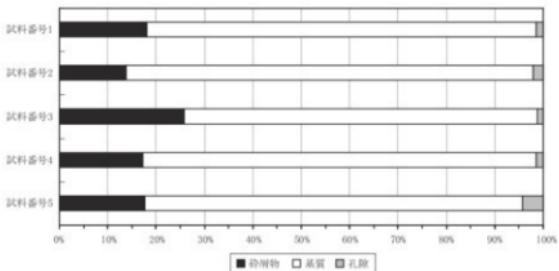
第16図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

表9 薄片観察結果

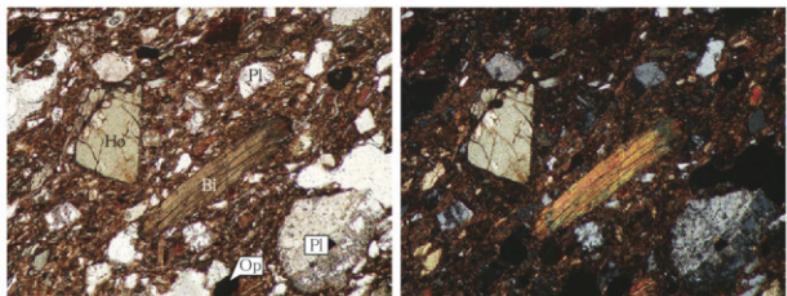
試料番号	砂 粒 分 区 分	砂 粒 の 様 類 構 成															合計
		鉱 物 片			岩 石 片			その他の種類									
		石英 カリ 長石	斜方輝石 角閃石 内石	酸化角閃石	黑雲母 透明白雲母	チヤート 矽岩	凝灰岩 成岩	安山岩 流紋岩・デイサイト	多結晶石英 花崗岩類	斑れい岩 珪長岩	ホルンフェルス	粘板岩 板岩	脈岩 変質岩	珪化岩 火山ガラス	砂混じり粘土塊		
1	細粒															0	
	極粗粒砂	1				1									1	6	
	粗粒砂	3	4	6	7	1										23	
	中粒砂	12	5	21	11	6			5	2	1					66	
	細粒砂	17	1	28	1	17	7	1			1					73	
	極細粒砂	3	1	11	11	1	1									28	
	粗粒シルト	2		2												4	
	中粒シルト															0	
	基質															889	
	孔隙															15	
2	備考	基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで構成される。変質岩は結晶質である。変質岩は、苦鉄質岩の風化岩。パブルウォール型火山ガラス、緑巣石、植物珪酸体あり。															
	細粒															0	
	極粗粒砂	3						1	6						1	1	
	粗粒砂	8					2	11	1	4	1			3	1	32	
	中粒砂	5						2		1	1				1	10	
	細粒砂	7	4			1	1								3	16	
	極細粒砂		1		1					1					2	5	
	粗粒シルト	5		2											2	9	
	中粒シルト														0		
	基質															513	
3	孔隙															13	
	備考	基質は褐色粘土鉱物、炭質物などで埋められる。凝灰岩はやや結晶質である。火山ガラスはパブルウォール型。															
	細粒															0	
	極粗粒砂	1													1	2	
	粗粒砂	3	1	3	2		1	1	2	1				1	1	16	
	中粒砂	2	2	3	19	1	1			1	1			1	2	34	
	細粒砂	2	8	42	1					1					1	55	
	極細粒砂	1	2	23	1										27		
	粗粒シルト	2		8											10		
	中粒シルト														0		
4	基質															408	
	孔隙															7	
	備考	基質は非品質な淡褐色粘土、炭質物などで埋められる。角閃石の多くは弱酸化の状態となっている。緑巣石あり。															
	細粒															0	
	極粗粒砂	1													1		
	粗粒砂	12	5	6	1		2	2	2	2	5	1	1	3	1	45	
	中粒砂	13	4	8	1		2	1		4				2	1	36	
	細粒砂	7	4	5	1	1	2		1	1					22		
	極細粒砂	4		2											6		
	粗粒シルト	3													3		
5	中粒シルト															0	
	基質															534	
	孔隙															9	
	備考	基質は、褐色粘土、炭質物、石英、長石類などで埋められる。ジルコン、植物珪酸体あり。															
	細粒															1	
	極粗粒砂														3		
	粗粒砂	8	1	1							8					18	
	中粒砂	17	2	10	1					6				1		37	
	細粒砂	9	1	27	6										43		
	極細粒砂	7		11	1										19		
	粗粒シルト	3		4											1	8	
	中粒シルト	1													1		
5	基質															573	
	孔隙															31	
	備考	基質は、雲母鉱物、褐色粘土鉱物、酸化鉄などで埋められる。パブルウォール型火山ガラス、緑巣石あり。															



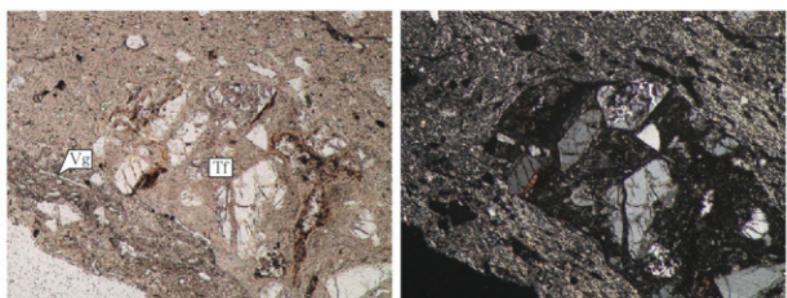
第 17 図 胎土中の砂の粒径組成



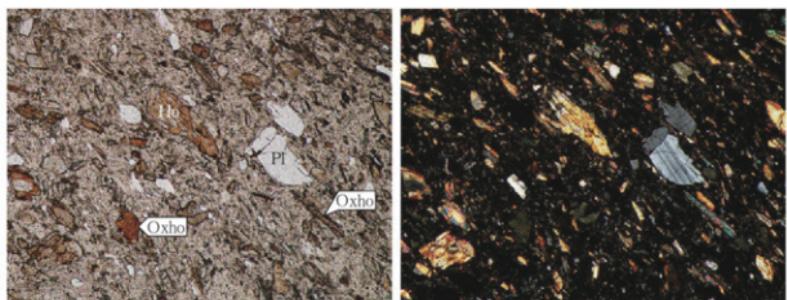
第 18 図 碎屑物・基質・孔隙の割合



1.試料番号1(報告番号48 讀岐系 壺)



2.試料番号2(報告番号82 土師器 壺)



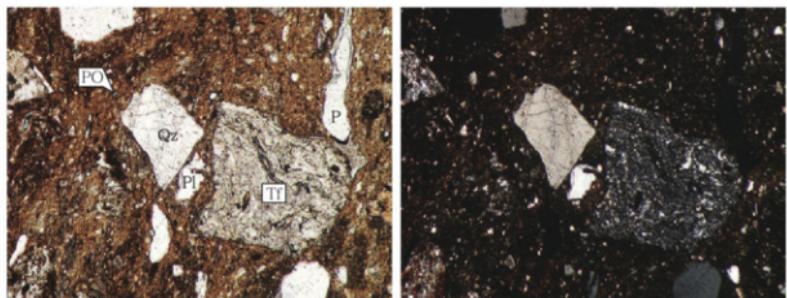
3.試料番号3(報告番号93 土師器 壺)

Pl:斜長石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, Bi:黒雲母, Op:不透明鉱物, Tf:凝灰岩,
Vg:火山ガラス,

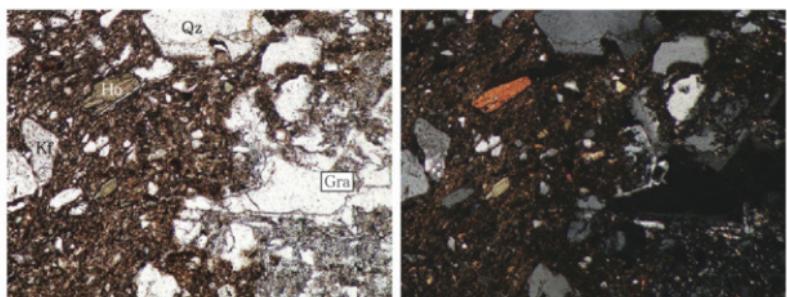
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第19図 飯田遺跡胎土薄片(1)



4.試料番号4(報告番号100 山陰系 壺)



5.試料番号5(報告番号103 土師器 壺)

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Tf:凝灰岩, Gra:花崗岩,

PO:植物珪酸体, P:孔隙,

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第20図 飯田遺跡胎土薄片(2)

第5章 結語

(1) 遺構

調査面積320m²という狭い範囲に、堅穴住居跡1棟、掘立柱建物跡4棟、土坑6基、溝4条とピット數十基と、多くの遺構を検出することができた。本調査区の西側で隣接して行った平成20年度の調査においても、約440m²の狭い範囲に堅穴住居跡が多数見つかっており、当該地には高い密度で遺構が分布していたことがわかる。本調査区及び平成20年度調査区の南半は旧河道であり、遺構は北半の微高地上に集中する。

堅穴住居跡SH01は平成20年度調査においても検出されていたものであるが、今回の調査により、2本柱で隅丸方形の住居跡であることが明らかとなった。堅穴住居跡の西側及び東側にはし字・逆し字状の高床部が認められる。2つの柱穴内にはいずれも柱材が残存し、放射性炭素年代の測定では、曆年較正年代で中央土坑から出土した炭化材が141～242calAD、SP17から出土した炭化材が138～215calAD、SP19から出土した柱材が76～137calADとの値が示されている。前回調査において行った、SH01内出土の炭化材の分析では、曆年較正年代で79～209calADとの結果が出ており、今回の分析結果と大きな齟齬はないといえる。柱材は、樹種同定の結果、いずれもコナラ属コナラ亜属コナラ節であることが判明した。なお、前回調査では柱材はコナラ属コナラ亜属クヌギ節、垂木はヒノキとの分析結果が出ている。堅穴住居に用いられた建築部材の樹種同定では、播磨町大中遺跡で柱材などにコナラ属コナラ亜属コナラ節及びクヌギ節が、加古川市溝ノ口遺跡では垂木にコナラ属コナラ亜属クヌギ節が用いられていることが明らかとなっている。また、加東市三草諏訪ノ下遺跡や神戸市西区吉田南遺跡では堅穴住居跡内からコナラ属コナラ亜属の部材が出土しており、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての播磨地域ではコナラ属コナラ亜属を建築部材として多く用いていたといえるだろう。前回調査の報告によるとSH01は布留傾向窓がみられる時期と想定されている。今回の調査ではSH01埋土中より、因輪VI～2期に位置づけられる窓が出土しており、西播磨編年における庄内2～3の時期と考えられ、前回調査で想定された時期とも合致する。

4棟検出された掘立柱建物跡は、いずれも1間×2間の小規模なもので、その主軸方向から「北西・南東」、「北東・南西」、「北・南」の3パターンがみられる。SB02には柱材の周囲に入念に円礫を組んだものや掘形埋土内に円礫を入れるものが多い。掘立柱建物が築かれた場所は、旧河道に隣接しており、水分を多く含んだ軟弱な地盤であったと考えられ、石組みや埋土中に円礫を入れることによって柱を補強していたとみられる。掘立柱建物跡に復元できたもの以外にも多数の柱穴が確認でき、本来はより多くの建物が築かれていたことが推測できる。時期が想定できる遺物は少ないが、SB03の柱穴からは庄内4に位置づけられる窓が出土している。

今回検出した遺構は、堅穴住居跡・掘立柱建物跡をはじめ、溝や土坑など多くの切り合い関係が認められる。遺構の切り合い関係を示すと

SH01→SB02→SB03→SB04

SD01→SK05

SK03→SK04

SD02→SH01
SD02→SD03→SB02
SD04→SB02・SK05

となる。SB01はどの遺構とも切り合っていないが、SH01と近い主軸方向をとることから同時期の可能性がある。ここから考えられる遺構形成の順番は

SD02→SH01・SB01・SD01・SD03・SD04→SB02・SK03・SK05→SB03・SK04
である。SH01は上述の通り庄内2～3とみられ、SB03は庄内4の壺、SK03は庄内3の壺が出土しており、出土遺物の順序も上述の想定と概ね整合する。なお、SK06・07は他の遺構と切り合い関係ないが、SK06から庄内4～布留1の壺、SK07から庄内3～4の壺が出土することから、SK07はSB03とはほぼ同時期、SK06はSB03よりも新しく位置づけられる。

(2) 遺物

本調査では、庄内式土器や弥生時代のV様式の系譜をひく土器が多く出土した。壺や壺が多く、鉢や高杯、器台なども認められる。また、少量であるが、製塩土器も出土した。

時期としてはV期～布留1の範疇に収まり、その中でも、庄内3以降のものが主体を占める。播磨産のもの以外に、河内や山陰、吉備、四国東部など他地域の技術、胎土を用いて製作されたものも認められる。胎土分析の結果、他地域系とした土器の中には播磨地域で産出したと考えられる土を用いて製作されているものも確認された。

(3) 災害痕跡

今回の調査では柱穴断面や遺構検出面上で、液状化現象に伴う噴砂が認められた。液状化現象は震度5弱以上で発生するとされる。柱穴の断面では、遺構検出面の下に存在する砂層から砂粒が供給されることが確認できた。ただし、今回確認できたものは砂脈のみで、砂が噴出した地表面に形成される噴砂丘がみられないため、本来は遺構検出面より上方にまで噴出していただとの考えられる。このことから、飯田遺跡が立地する地域では、古墳時代前期以降に震度5弱以上の地震が1回以上発生したことがわかる。

また、調査区北壁には、地滑りの痕跡が残る。地滑りは旧耕土層まで影響しており、その上層の盛土層までは及ばない。昭和50年には、今回の調査区の場所に建築物及び道路が建設されているため、それに先駆けて盛土が行われたものと考えられ、地滑りは少なくとも昭和50年以前に発生していることがわかる。地滑りの発生要因としては、豪雨や地下水位の上昇など水に関係するものと地震の振動によるものがある。上述の通り液状化現象の痕跡も確認できることから当地域に震度5弱以上の地震が起こったことは明らかであるが、川に隣接することから水の影響も大きく、地滑りの要因を限定することはできない。

(4)まとめ

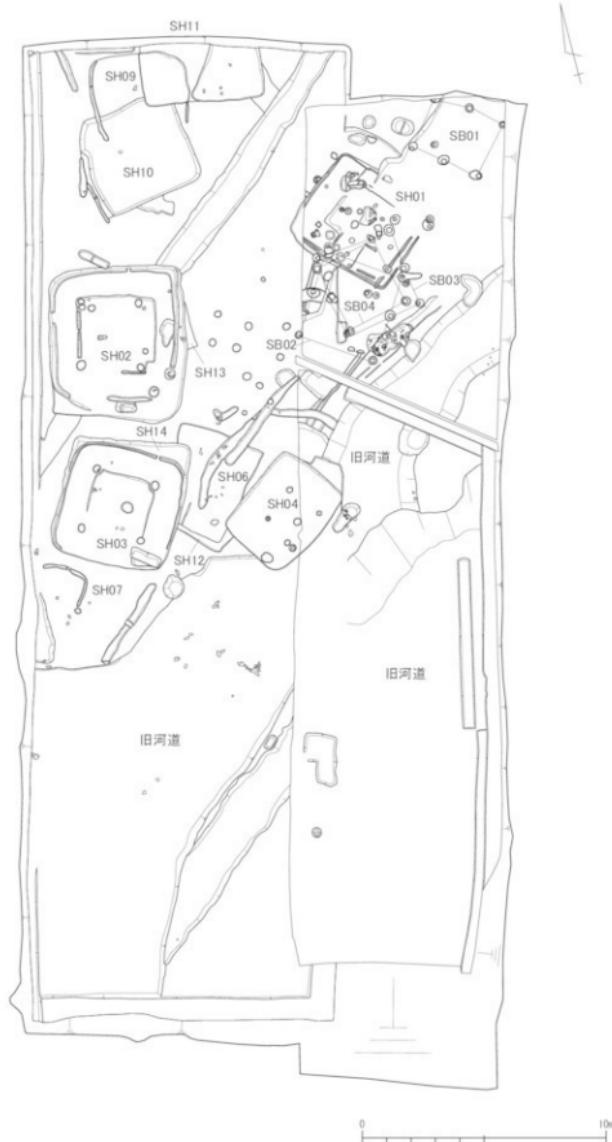
飯田遺跡は、姫路バイパス建設に伴って昭和49・50年度（1974・1975年度）に調査が行われた長越遺跡に隣接しており、平成15・20年度に行われた調査から、本来長越遺跡の一部であったと考えられている。長越遺跡では多量の庄内式土器や他地域からの搬入土器が出土しており、古墳時代初頭の播

磨の土器編年を考える上で非常に重要な遺跡である。今回の調査において、堅穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が検出されたことで、集落の範囲が、南東の河道の際まで広がっていたことが明らかとなった。西側に隣接する平成20年度調査では、今回の調査区に比べて柱穴の数が少なく、掘立柱建物跡は確認されていない。その一方で、堅穴住居跡は密集して築かれており、微高地の中心部には堅穴住居、端部には掘立柱建物というように、使用目的に応じて築く場所を変えている可能性が考えられる。ただし、前回調査区との重複地点から柱穴や構などが新たに検出されており、前回調査区の中心部においても未検出の掘立柱建物跡が存在していた可能性も残る。今後は、長越遺跡や畠田遺跡など周辺の状況とも合わせて、より詳細に検討を行っていく必要があろう。

畠田遺跡では、河内や吉備、山陰、讃岐など様々な地域から搬入された土器や播磨地域の土を用いて他地域の技術で製作された土器が出土することから、他地域からの人の移動と一定期間の居住が想定できる。これまでの調査成果から長越遺跡及び畠田遺跡は地域間交流の拠点的集落であったとされており、今回の調査によりその性格を再確認することができた。出土した土器は上述の通り庄内1～布留1にかけてのものが大半を占め、集落が営まれた期間もこの時期に限られると考えられる。船場川の対岸に築かれた畠田遺跡では、弥生時代中期から古墳時代後期を経て中世まで長期間継続して集落が存続しており、対照的である。長越遺跡・畠田遺跡のこれまでの調査において出土した土器も同時期のものがほとんどであり、今回の調査成果とも整合する。中でも庄内3以降のものが主体を占めることから、当遺跡は庄内3以降に最も盛行したものと考えられる。

参考文献

- 加東郡教育委員会1991『下三草・諱訪ノ下遺跡』
神戸市教育委員会2006『吉田南遺跡 第17・18次調査 発掘調査報告書』
高橋謙1988「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告9』岡山県立博物館
谷口恭子2000「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」
『庄内式土器研究XXII』庄内式土器研究会
長友朋子・田中元浩2007「西播磨地域の土器編年」「弥生土器集成と編年—播磨編一」大手前大学史学研究所
兵庫県教育委員会2006『溝ノ口遺跡』
兵庫県教育委員会2007『大中遺跡III』
広瀬和雄1978「小島東遺跡」「岬町遺跡群発掘調査概要」大阪府教育委員会



第 21 図 積穴住居跡・掘立柱建物跡分布図（右：本調査区 左：平成 20 年度調査区）

表 10 板田遺跡出土土器観察表

番号	種別	器種	直徑・底径・高さ	直径				色調	備考	
				口径	筋高	腹径	底径			
1	上部器	甕	SH01 丸底甕	外面 口縁部ヨコナラ、腹部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、腹部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(14.4)	(4.5)	3.53 褐紅	灰褐 に淡黄褐	底部1.6 山形県	
2	上部器	甕(底部 SH01)	外面 有上部のタマ。底部ヨコナラ 内面 横方向に横方に凹むので、底径4.4 - 5.8 (cm)	(13.6)	(3.9)	3.22	底径5.6	内面と外に黒斑		
3	上部器	甕(底部 SH01 中央部)	外面 雷風に上り不規則ヘタリ。 内面 ヨコナラ	(13.6)	(3.9)	3.22	底径5.6	内面と外に黒斑		
4	上部器	甕(底部 SH01 中央部)	外面 雷風に上り不規則ヘタリ。 内面 体溝等のため要不規則な凹凸がある。 底部ヨコナラ	(5.4)	(4.5)	4.45 黄褐 灰褐	底径1.3	外側1.10 外側1.20		
5	上部器	甕台	SH01 SP02	外面 雷風に上り不規則な凹凸がある。 内面 雷風部ヨコナラ	(8.7)	3.27	3.27 黄褐 灰褐	底径1.28		
6	上部器	高杯	SH02 SP06	外面 雷風部ヨコナラ、腹部ヨコナラ 内面 雷風部ヨコナラ、腹部ヨコナラ	(8.1)	1.34 黄褐 灰白	底径1.48 灰白	脚部安定在 内面1.48		
7	上部器	甕	SH03 SP27	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(13.7)	(3.7)	3.77	底径5.6 灰白	外側1.30 外側1.10	
8	上部器	甕	SH03	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(13.5)	(3.5)	3.25	底径5.6 灰白	外側1.4 灰白	
9	上部器	甕	SH03	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(13.6)	(6.2)	6.01	底径5.6 灰白	外側1.4 灰白	
10	上部器	甕	SH03 - SH04中央	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(13.8)	(6.8)	6.01	底径5.6 灰白	外側1.4 灰白	
11	上部器	杯	SH03	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(10.0)	(4.9)	4.90	底径5.6 灰白	外側1.4 灰白	
12	上部器	甕	SH06	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(12.1)	(6.6)	10.65	底径5.6 灰白	外側1.3 外側1.2 外側1.2	
13	上部器	甕	SH06	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(14.6)	(9.5)	9.50	底径5.6 灰白	外側1.4 灰白	
14	上部器	甕(底部 SH06)	外面 横方向のタマ 内面 横方向のタマ	(7 - 8.8 cm)	(7 - 8.8 cm)	5.9	底径2.3 灰白	外側1.2 外側1.2		
15	上部器	高杯	SH06	外面 雷風部ヨコナラ 内面 雷風部ヨコナラ	(5.7)	14.13	14.13 黄褐 灰白	脚部安定在 脚部安定在 脚部安定在 脚部安定在		
16	上部器	脚・瓶	SH06	外面 沢ね方の板子 内面 沢ね方の板子	(24.2)	(20.2)	2.42	底径5.6 灰白	外側1.8 灰白	
17	上部器	甕	SH07	外面 口縁部ヨコナラ、ヨコナラ 内面 底部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(17.3)	24.8	(22.1)	底径5.6 灰白	外側1.4 灰白	
18	上部器	甕	SH07	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 横方向の板子	(14.1)	18.5	15.9	底径5.6 灰白	外側1.2 灰白	
19	直部器	直筒	SH07直筒	外面 上部ヨコナラ、下部ヨコナラ 内面 四隅ナラ	(14.4)	19.4	19.4	底径5.6 灰白	脚部~底部 外側1.2 外側1.2	
20	上部器	甕	SH07直筒	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(13.2)	6.21	6.21	底径5.6 灰白	外側1.4 外側1.4	
21	上部器	直筒	SH07直筒	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(16.4)	14.6	14.6	底径5.6 灰白	外側1.4 外側1.4	
22	上部器	直筒	SH07直筒	外面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ 内面 口縁部ヨコナラ、底部ヨコナラ	(15.9)	26.5	22.9	底径5.6 灰白	外側1.4 外側1.4 外側1.4 外側1.4	

番号	種別	形相	通體・筋上部	性状				性別	年齢	色調	尾長
				口端	吻端	頭部	四肢				
23	魚生土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部腹面の内側ヨコナギ、体部ヨコナギ、体部ヨコナナ、体部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(1537) (1586)	(209)	灰白	金褐色	[17脚部] / 2脚 [頭部] 1 - 2脚 [頭部] 1 - 8脚	[頭部上半部] にスカサウ	
24	魚生土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(62)	15脚	灰白	金褐色	頭部のみ金褐色	[頭部外面] に黒斑	
25	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(152)	7(1)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 6脚	[頭部下面] に黒斑	
26	魚生土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(115)	7(8)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 6脚	[頭部外面] に黒斑	
27	魚生土鰐	後	日生苗 東京21 - 2巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(120)	13(5)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 6脚	[頭部外面] に黒斑	
28	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(117)	5(0)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 2脚	[頭部外面] に黒斑	
29	土鰐	後	日生苗 東京21 - 2巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(175)	6(3)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 4脚	[頭部外面] に黒斑	
30	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(157)	14(7)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 2脚	[頭部外面] に黒斑	
31	土鰐	後	日生苗 東京21 - 2巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(182)	10(4)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 4脚	[頭部外面] に黒斑	
32	土鰐	後	日生苗 東京21 - 2巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(160)	6(4)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 4脚	[頭部外面] に黒斑	
33	土鰐	後	日生苗 東京21巻下巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(137)	9(9)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 4脚	[頭部外面] に黒斑	
34	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(117)	7(1)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 9脚	[頭部外面] に黒斑	
35	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(120)	7(5)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 6脚	[頭部外面] に黒斑	
36	土鰐	後	日生苗 東京21 - 2巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(108)	11(6)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 4脚	[頭部外面] に黒斑	
37	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(136)	7(0)	灰白	金褐色	[17脚部] 1 - 6脚	[頭部外面] に黒斑	
38	魚生土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(209)	14(0)	金褐色	金褐色	[17脚部] 1 - 2脚	[頭部外面] にスカサウ	
39	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(131)	12(9)	金褐色	金褐色	[17脚部] 1 - 3脚	[頭部外面] にスカサウ	
40	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(123)	5(6)	金褐色	金褐色	[17脚部] 1 - 7脚	[頭部外面] にスカサウ	
41	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(161)	2(7)	金褐色	金褐色	[17脚部] 1 - 8脚	[頭部外面] にスカサウ	
42	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(134)	1(7)	金褐色	金褐色	[17脚部] 1 - 6脚	[頭部外面] にスカサウ	
43	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(53)	未記	金褐色	金褐色	[17脚部] 1 - 3脚	スカサウ	
44	土鰐	後	日生苗 東京21巻	外側 口縫部ヨコナナ、頭部ヨコナナ、体部ヨコナナ	(65)	未記	金褐色	金褐色	[17脚部] 1 - 6脚	スカサウ	

番号	種別	筋程	部位	性状・先天性変位	経年変化						備考
					門歯	前歯	側歯	歯冠	外因	内因	
45	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。 内因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。 内因：ヨコナド。	(268)	(59)	偏位	偏位	にE/S偏位 偏位	口唇基2.5	濃舌筋 内因：スルサウ
46	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。 内因：ヨコナド。	(267)	(84)	偏位	偏位	偏位	口唇基1.5	濃舌筋 内因：スルサウ
47	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。(7~8mm)。 内因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。(6~8mm)。	(182)	(76)	偏位	偏位	偏位	口唇基1.6	濃舌筋
48	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。 内因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。(10~12mm)。	(268)	(121)	偏位	偏位	偏位	口唇基1.8	濃舌筋 筋分析結果1
49	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。 内因：口唇部筋緊張コナド。	(117)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基1.6	濃舌筋 筋分析結果2
50	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：口唇部筋緊張コナド。口唇開閉方向へのヘリカギ。(5~6mm)。 内因：口唇部筋緊張コナド。	(81)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基1.8	濃舌筋 筋分析結果3
51	筋生・筋動	筋	(東京21筋)	外因：頭部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：頭部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。頭部へリカギ。 筋筋へリカギ。	(143)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基2.3	筋筋へリカギ
52	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：頭部筋緊張コナド。(8~9mm)。 内因：頭部筋緊張コナド。	(172)	(73)	偏位	偏位	偏位	口唇基2.3	外因筋筋頭筋に黒線
53	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：頭部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：頭部筋緊張コナド。	(153)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.4	筋筋へリカギ
54	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：頭部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：筋筋へリカギ。(5~6mm)。	(40)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.4	筋筋へリカギ 外因筋筋頭筋に黒線
55	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：頭部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。	(34)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.4	筋筋へリカギ
56	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：頭部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：筋筋へリカギ。	(57)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.5	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
57	上顎骨	歯	上顎前歯	外因：頭部筋緊張コナド。 内因：筋筋へリカギ。	(34)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.5	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
58	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：(体部ヘリカギ)。(6mm)。	(41)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
59	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：(体部ヘリカギ)。(7mm)。	(57)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
60	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：(体部ヘリカギ)。(6mm)。 内因：筋筋へリカギ。(6~8mm)。	(68)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
61	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：(体部ヘリカギ)。 内因：筋筋へリカギ。	(122)	(25)	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
62	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：口唇部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：口唇部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。	(193)	(34)	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
63	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：ヨコナド。	(129)	(38)	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ
64	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：口唇部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：筋筋へリカギ。	(158)	(54)	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
65	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：口唇部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：筋筋へリカギ。	(143)	(88)	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
66	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：口唇部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：口唇部筋緊張コナド。	(32)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
67	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：口唇部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。(7mm)。 内因：口唇部筋緊張コナド。	(136)	(106)	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
68	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：口唇部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。 内因：筋筋へリカギ。	(136)	(81)	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ
69	上顎骨	歯	(東京21筋)	外因：口唇部筋緊張コナド。筋筋へリカギ。(4~5mm)。 内因：口唇部筋緊張コナド。(5mm)。	(310)	偏位	偏位	偏位	偏位	口唇基3.6	筋筋へリカギ 内因筋筋へリカギ

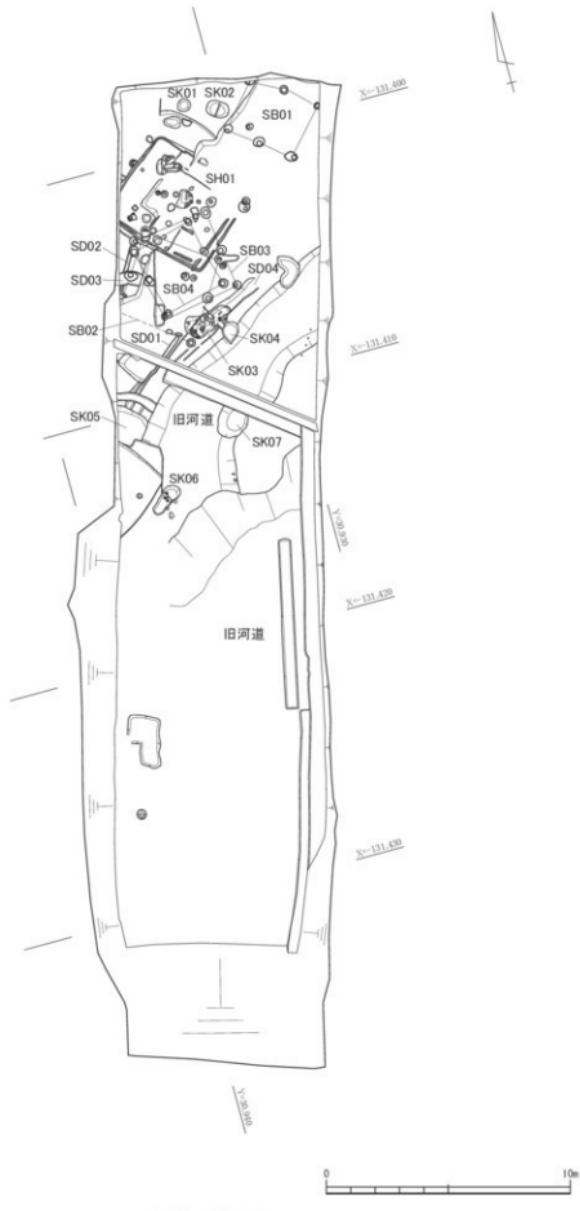
番号	種別	形相	通便・肛上腺	性状・他				法基(cm)	法基	基部	外因	色調	窓
				口部	咽部	喉部	気管						
70	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、体部とヨタナリ、体部キタリ半板ナリ。尾部ナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、体部キタリ。尾部ナリ。	(14.6)	(15.6)	(15.5)	22.5	12.5	脛膜	1.4	外因にスカサウ	
71	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 檻ナリ、ヨリ方上にヨリナリ。	(17.6)	(16.0)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.2	外因にスカサウ	
72	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、体部ヨリヨタナリ、体部キタリ半板ナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、体部ヨリヨタナリ、体部キタリ。	(10.3)	(8.6)	12.6	9.0	9.0	尻白	1.2	外因にスカサウ	
73	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部キタリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部キタリ。	(17.4)	(9.6)	22.4	12.5	12.5	尻白	1.2	外因にスカサウ	
74	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(15.9)	(5.5)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.0	外因にスカサウ	
75	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(15.6)	(3.5)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.6	外因内出に加腹	
76	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、体部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、体部ヨリヨタナリ。	(15.6)	(5.9)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.4	外因	
77	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、体部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、体部ヨリヨタナリ。	(14.6)	(3.9)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.9	外因外出にスカサウ	
78	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(15.6)	(4.2)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.6	外因外出に加腹	
79	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(14.4)	(7.6)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.2	外因	
80	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(14.7)	(5.1)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.4	外因内出に加腹	
81	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(12.6)	(8.0)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.3	外因外出にスカサウ	
82	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(15.6)	(6.2)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.6	外因内出に加腹	
83	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(13.8)	(8.2)	13.4	9.5	9.5	尻白	1.4	外因スカサウ	
84	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(17.4)	(8.7)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.4	外因外出にスカサウ	
85	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(21.6)	(4.4)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.9	外因分析	
86	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(16.5)	(6.8)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.4	外因	
87	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(12.6)	(3.8)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.2	外因外出にスカサウ	
88	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(14.8)	(7.2)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.4	外因外出にスカサウ	
89	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(14.3)	(4.4)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.4	外因	
90	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(13.3)	(3.5)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.2	外因外出にスカサウ	
91	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(15.9)	(9.5)	12.6	9.5	9.5	尻白	1.4	外因外出にスカサウ	
92	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(18.5)	(6.9)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.5	外因	
93	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(16.0)	(4.6)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.4	外因分析	
94	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(13.6)	(8.0)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.5	外因分析	
95	上端部	奥	(山田)直 (東京)21型	外面 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。外因 口閉塞ヨコナリ、尾部ヨリヨタナリ。	(14.0)	(5.0)	9.5	19.5	9.5	尻白	1.7	外因分析	

番号	種別	性別	通称・法上部位	直法			間接			側面
				外因	内因	操作	外因	内因	操作	
96	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(口唇屈曲コナド)、頭頸部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(144)	(5.2)	外因	内因	操作	山形系
97	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(144)	(6.7)	外因	内因	操作	山形系
98	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(137)	(5.5)	外因	内因	操作	山形系
99	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(132)	(4.2)	外因	内因	操作	山形系
100	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(135)	(4.6)	外因	内因	操作	山形系
101	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(132)	(9.1)	外因	内因	操作	山形系
102	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(158)	(7.3)	外因	内因	操作	山形系
103	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(162)	(4.4)	外因	内因	操作	山形系
104	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(149)	(4.5)	外因	内因	操作	山形系
105	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(126)	(3.4)	外因	内因	操作	山形系
106	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(96)	(3.1)	外因	内因	操作	山形系
107	坐骨上筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(130)	(4.2)	外因	内因	操作	山形系
108	坐骨上筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(133)	(10.8)	外因	内因	操作	山形系
109	坐骨上筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(128)	(4.9)	外因	内因	操作	山形系
110	坐骨上筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(24)	(4.5)	外因	内因	操作	山形系
111	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(30)	(4.0)	外因	内因	操作	山形系
112	上部筋	要	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(8.4)	(4.5)	外因	内因	操作	山形系
113	上部筋	休	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(87)	(6.0)	外因	内因	操作	山形系
114	上部筋	休	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(8.4)	(5.0)	外因	内因	操作	山形系
115	上部筋	休	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(90)	(6.5)	外因	内因	操作	山形系
116	上部筋	休	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(91)	(6.0)	外因	内因	操作	山形系
117	上部筋	休	山田筋(21巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(127)	(8.1)	外因	内因	操作	山形系
118	上部筋	休	山田筋(21～23巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(32)	(4.5)	外因	内因	操作	山形系
119	上部筋	休	山田筋(21～23巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(95)	(4.3)	外因	内因	操作	山形系
120	上部筋	休	山田筋(21～23巻)	外因(ヨコナド)、頭部偏向のアメ(108cm)、後日ヨコナド	(107)	(4.2)	外因	内因	操作	山形系

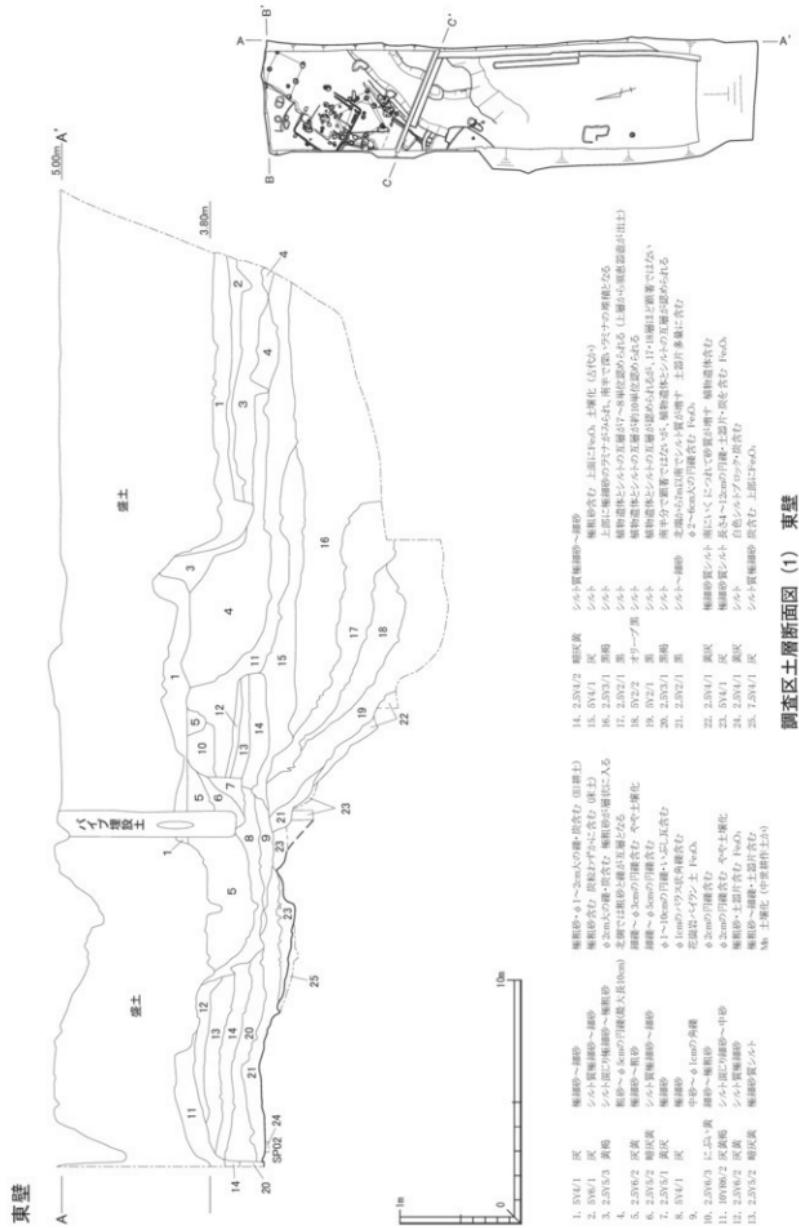
番号	種別	基種	通種	原生・次生部位	注記：他				花序	花序
					門	部	茎高	葉序		
121	上位葉	林	日田山苗 (東京21) ~ 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(14.5)	(4.3)	葉高 12.5cm	外葉 12.5cm	葉片 12.5cm	葉片 1.2
122	上位葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(22.8)	(4.5)	葉高 14.5cm	外葉 14.5cm	葉片 14.5cm	葉片 1.6
123	上位葉	林	日田山苗 (東京21) ~ 25cm	外面 口播部苗コナフ	(22.7)	(3.4)	葉高 14.5cm	外葉 14.5cm	葉片 14.5cm	葉片 1.6
124	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(24.2)	(2.4)	葉高 16.4cm	外葉 16.4cm	葉片 16.4cm	葉片 1.2
125	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(45.8)	(6.5)	葉高 20.3cm	外葉 20.3cm	葉片 20.3cm	葉片 1.8
126	上位葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(27.8)	(9.4)	葉高 18.7cm	外葉 18.7cm	葉片 18.7cm	葉片 1.0
127	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(29.7)	(8.0)	葉高 19.3cm	外葉 19.3cm	葉片 19.3cm	葉片 1.4
128	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(37.4)	(11.1)	葉高 21.5cm	外葉 21.5cm	葉片 21.5cm	葉片 1.6
129	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(32.2)	(8.9)	葉高 19.1cm	外葉 19.1cm	葉片 19.1cm	葉片 1.8
130	上位葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(32.6)	(17.6)	葉高 21.4cm	外葉 21.4cm	葉片 21.4cm	葉片 1.4
131	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(35.1)	(11.4)	葉高 21.4cm	外葉 21.4cm	葉片 21.4cm	葉片 1.6
132	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(41.2)	(17.5)	葉高 25.0cm	外葉 25.0cm	葉片 25.0cm	葉片 1.5
133	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(56)	(6.0)	葉高 19.0cm	外葉 19.0cm	葉片 19.0cm	葉片 2.5
134	上位葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(72.8)	(6.6)	葉高 38.8cm	外葉 38.8cm	葉片 38.8cm	葉片 1.5
135	土被葉	林	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(65)	(9.5)	葉高 34.5cm	外葉 34.5cm	葉片 34.5cm	葉片 1.5
136	生え土帶	高秆	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(30.2)	(4.6)	葉高 17.4cm	外葉 17.4cm	葉片 17.4cm	葉片 1.4
137	生え土帶	高秆	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(42.5)	(6.7)	葉高 24.5cm	外葉 24.5cm	葉片 24.5cm	葉片 1.4
138	上位葉	高秆	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(71.4)	(6.3)	葉高 35.5cm	外葉 35.5cm	葉片 35.5cm	葉片 1.5
139	上位葉	高秆	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(91.1)	(12.6)	葉高 50.0cm	外葉 50.0cm	葉片 50.0cm	葉片 1.5
140	上位葉	高秆	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(85)	(9.8)	葉高 45.0cm	外葉 45.0cm	葉片 45.0cm	葉片 1.3
141	上位葉	高秆	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(126.4)	(7.1)	葉高 63.2cm	外葉 63.2cm	葉片 63.2cm	葉片 1.4
142	上位葉	高秆	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(191)	(12.6)	葉高 95.5cm	外葉 95.5cm	葉片 95.5cm	葉片 1.5
143	上位葉	高秆	日田山苗 (東京21) 25cm	外面 口播部苗コナフ、内部 口播部苗コナフ	(55)		葉高 55.0cm	外葉 55.0cm	葉片 55.0cm	葉片 1.5

番号	種類	等級	直標・底標	直標		底標	内標	外標	色調	等級	備考
				寸法	重量(g)						
144	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：ヨコナギ、杯底底部：カツラナシナメ 内面：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ	(36.0)	(5.6)	灰灰 黒黒	灰灰 黒黒	灰灰 黒黒	口縁部1.3 杯底部2.6	スガサウ 工具の当たり感
145	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 内面：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 脚部：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 寸法：9cm、底径：10.5cm	(17.5)	13.4	13.0灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
146	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 内面：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 脚部：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 寸法：9cm、底径：10.5cm	(20.5)	(14.7)	7.2	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
147	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 内面：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 脚部：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 寸法：9cm、底径：10.5cm	(12.9)	16.1	13.6灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.2 脚部底部	
148	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 内面：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 脚部：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 寸法：9cm、底径：10.5cm	(11.2)	7.7	7.6灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.6 脚部底部	
149	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 内面：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 脚部：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 寸法：9cm、底径：10.5cm	(11.3)	8.9	11.3灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
150	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ 内面：白ナキアメ、杯底底部：カツラナシナメ	(11.7)	8.2	11.2灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
151	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～22銘	外側：ヨコナギ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(10.7)	6.4	7.6灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
152	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(10.4)	6.4	7.6灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
153	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：ヨコナギ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(6.5)	10.2	11.2灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
154	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(8.7)	11.0	11.2灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
155	全体	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(10.8)	5.3	11.2灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
156	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(5.0)	12.1	7.6灰白	灰白	灰灰 黒黒	口縁部1.4 脚部底部	
157	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(9.1)	14.2	9.5灰白	灰白	灰灰 黒黒	脚部底部	脚部底部内凹に工具の当たり感
158	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(6.9)	12.1	7.8灰白	灰白	灰灰 黒黒	脚部底部1.4 脚部底部	
159	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(6.5)	16.0	9.5灰白	灰白	灰灰 黒黒	脚部底部1.2 脚部底部	
160	上端部	高杯	(日系酒)(東京21)～23銘	外側：白ナキアメ、内面：白ナキアメ 内面：白ナキアメ、脚部：カツラナシナメ	(4.8)	5.6	5.6灰白	灰白	灰灰 黒黒	脚部底部1.0 脚部底部	仕上げやすさ

図 版



調査区平面図

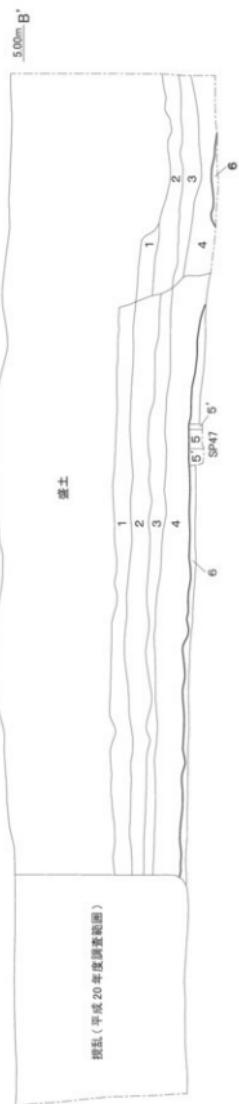


北壁

500m.B.

十一

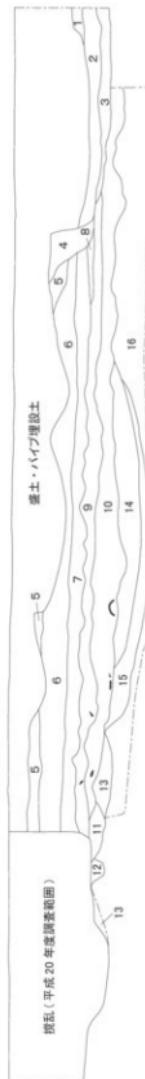
摸底（至第 20 年度調查結果）



壁南アゼ中央調査区

1

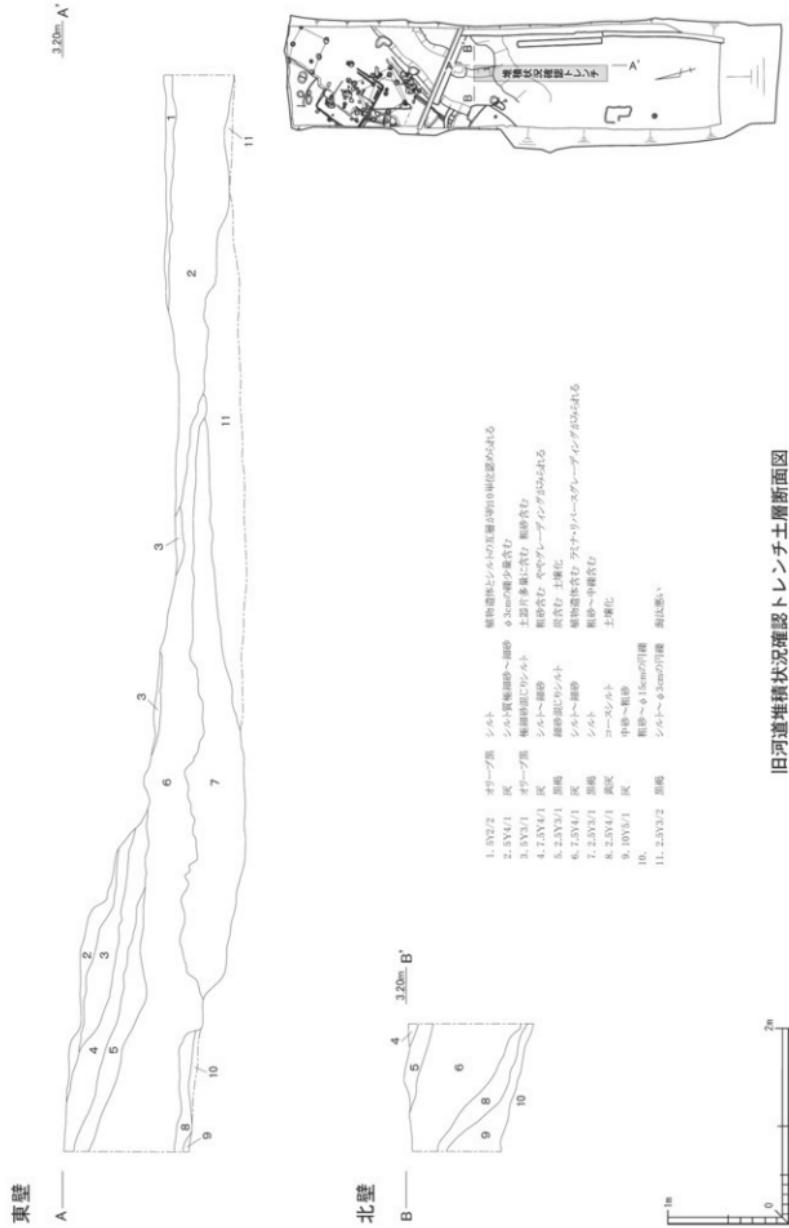
440m C³



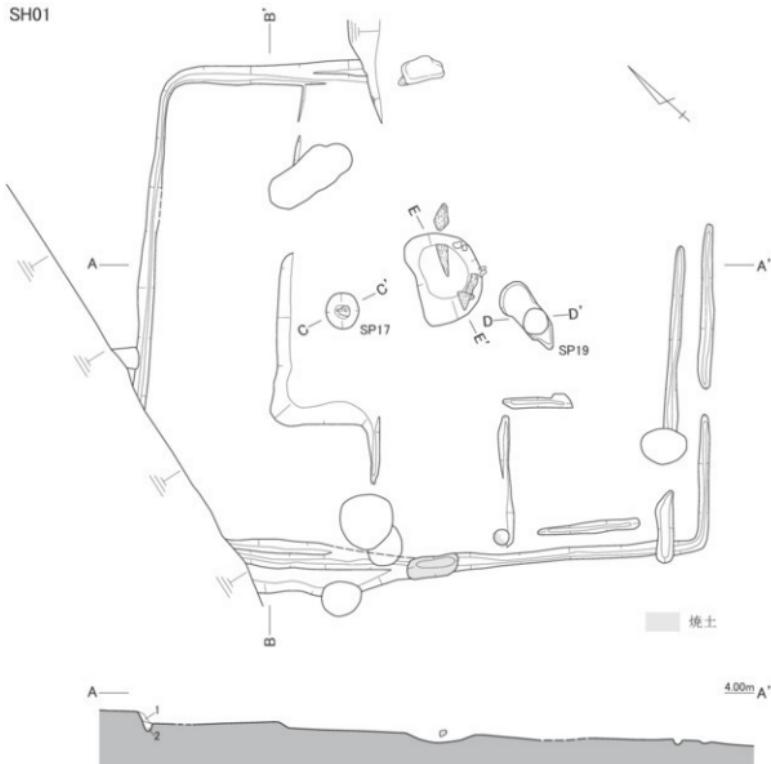
卷之三

植物遺体とシルトの互層
シルト
16. 5/41 広 離砂質シルト

תְּבִ�ָה וְתַּבְּרָא בְּמִזְבֵּחַ הַמִּזְבֵּחַ



SH01



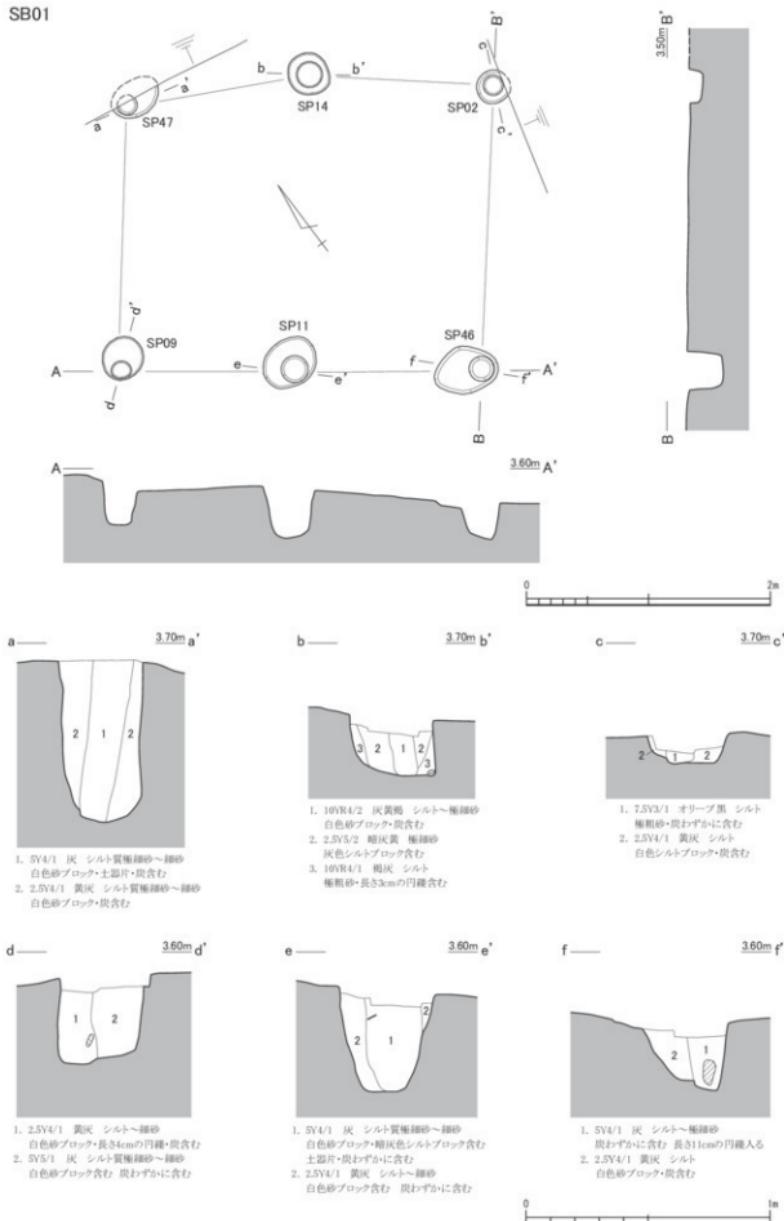
1. 2.5V4/1 黄灰 シルト質粘土砂
灰白色シルトブロック・炭含む
2. 10YR4/1 暗灰 シルト～粘土砂
灰多量に含む 灰白色シルトブロック含む



SH01 実測図

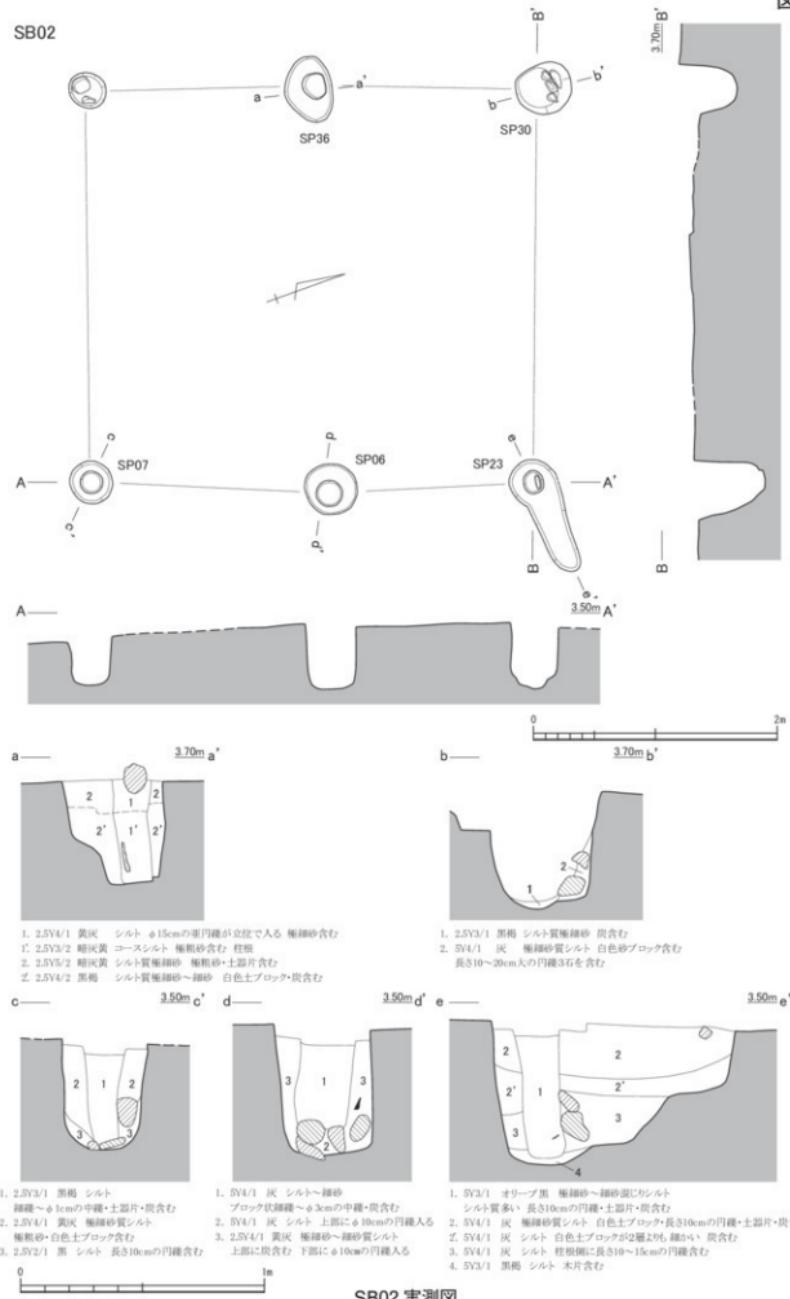
図版 6

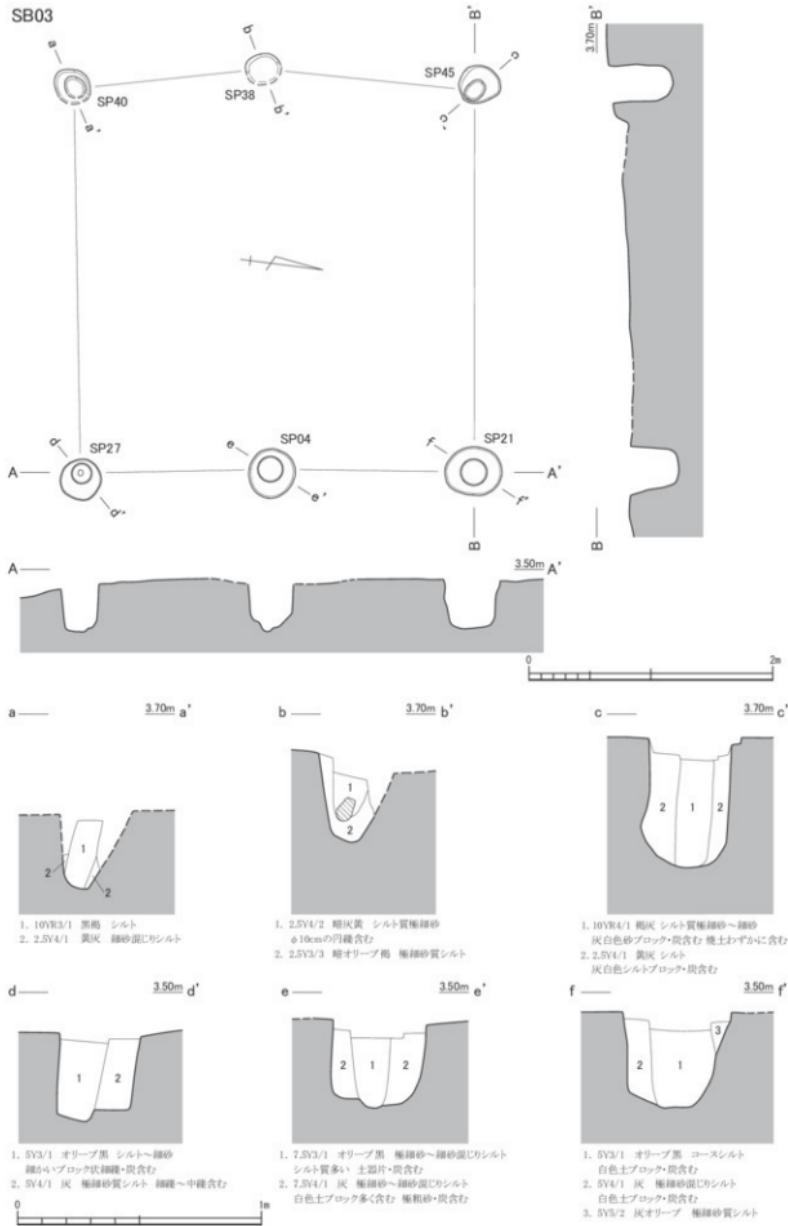
SB01



SB01 実測図

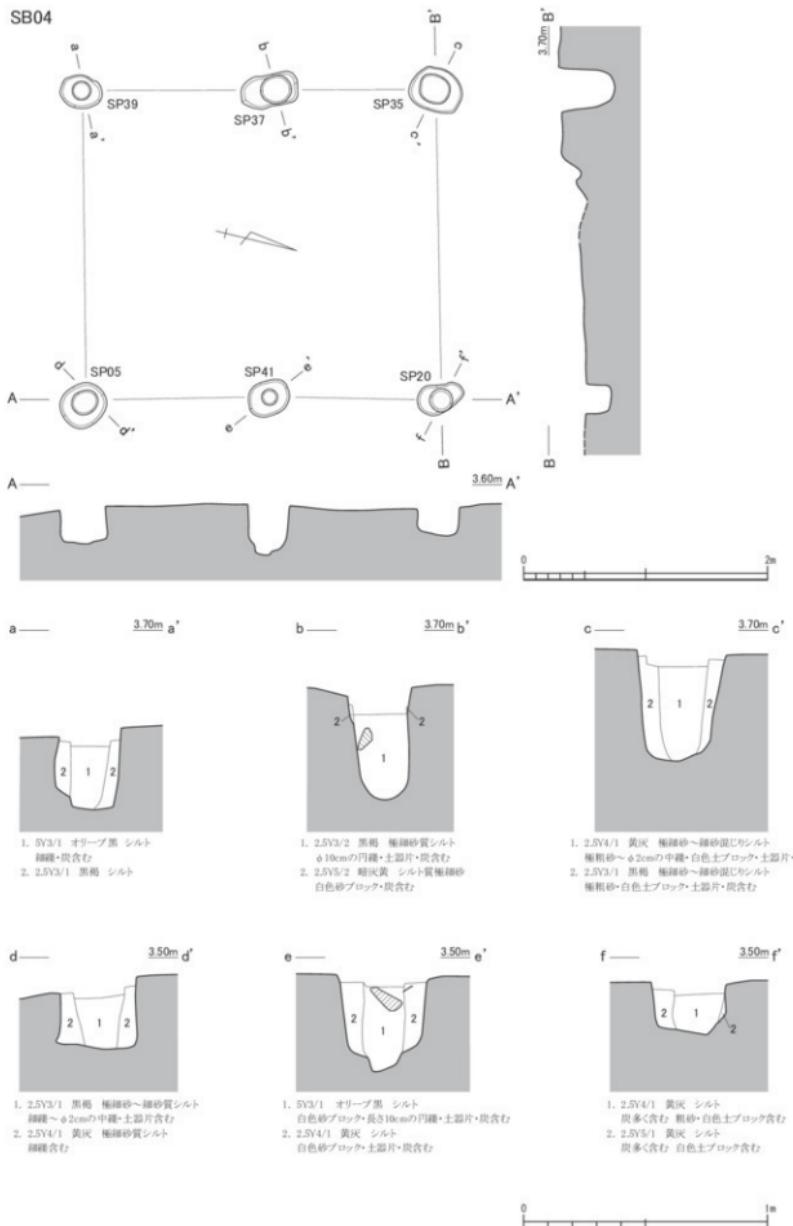
SB02





SB03 実測図

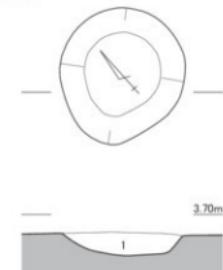
SB04



SB04 実測図

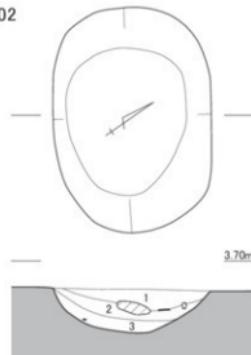
図版 10

SK01



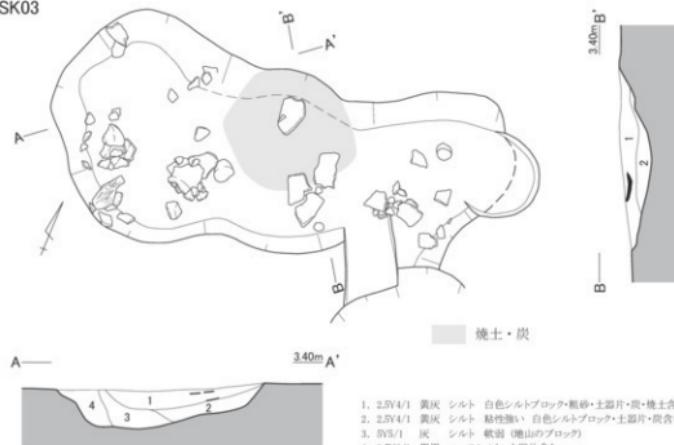
1. 2.5Y5/2 褐灰黄 シルト質極細砂 極粗砂・土器片含む

SK02



1. 2.5V4/1 黄灰 シルト質極細砂～細砂 極粗砂・土器片含む
2層との間に約4～13cmの円錐・土器片入る
2. 2.5V4/2 褐灰黄 シルト質極細砂～細砂 中や砂質分多い
3. 2.5V5/3 黄褐 極細砂質シルト 土器片含む ラミナがみられる

SK03



1. 2.5V4/1 黄灰 シルト 白色シルトブロック・粗砂・土器片・炭・焼土含む
2. 2.5V4/1 黄灰 シルト 黏性強い 白色シルトブロック・土器片・炭含む
3. 5V5/1 灰 シルト 炭弱 (埋山のラック)
4. 2.5V3/1 黒褐 ヨースシルト 土器片含む

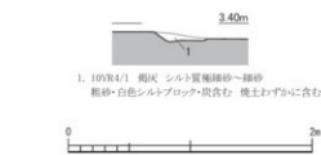
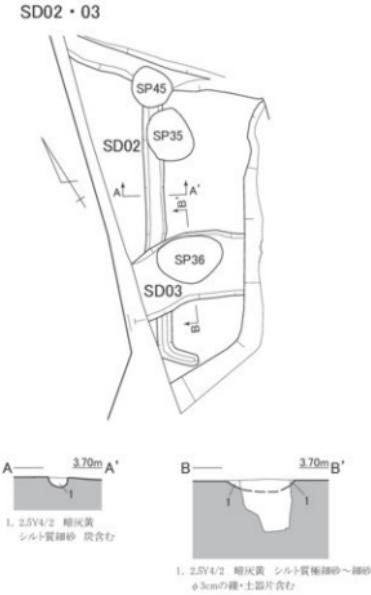
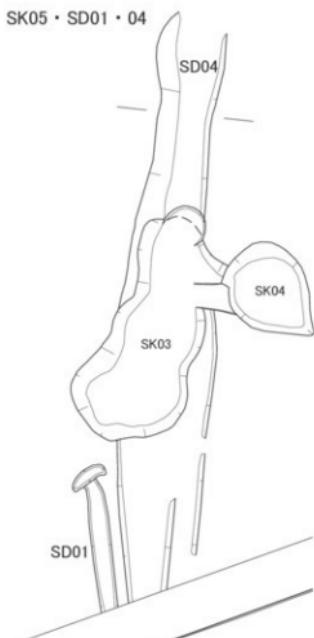
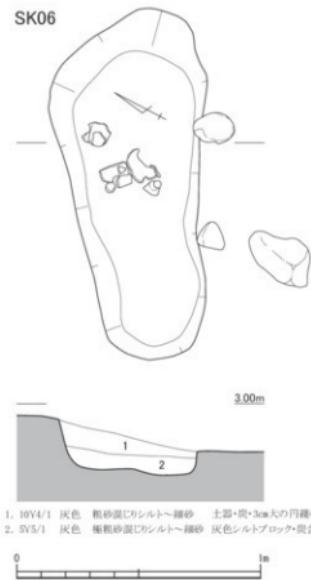
SK04



1. 10V6/1 灰 シルト 粘性強い 黄灰色(2.5V4/1)シルトブロック含む
2. 2.5V3/1 黑褐 シルト質極細砂～細砂
灰色(2.5V4/1)細砂・極粗砂ブロック・炭・焼土含む

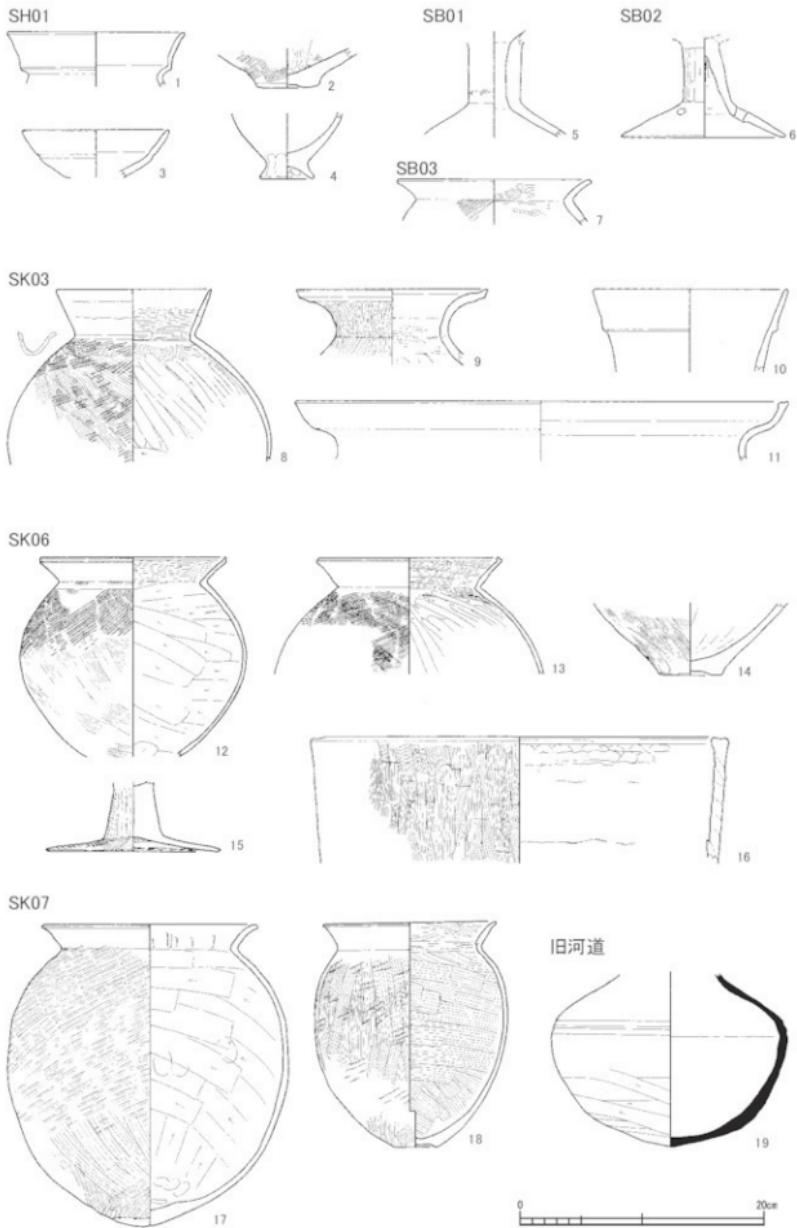


SK01～04 実測図

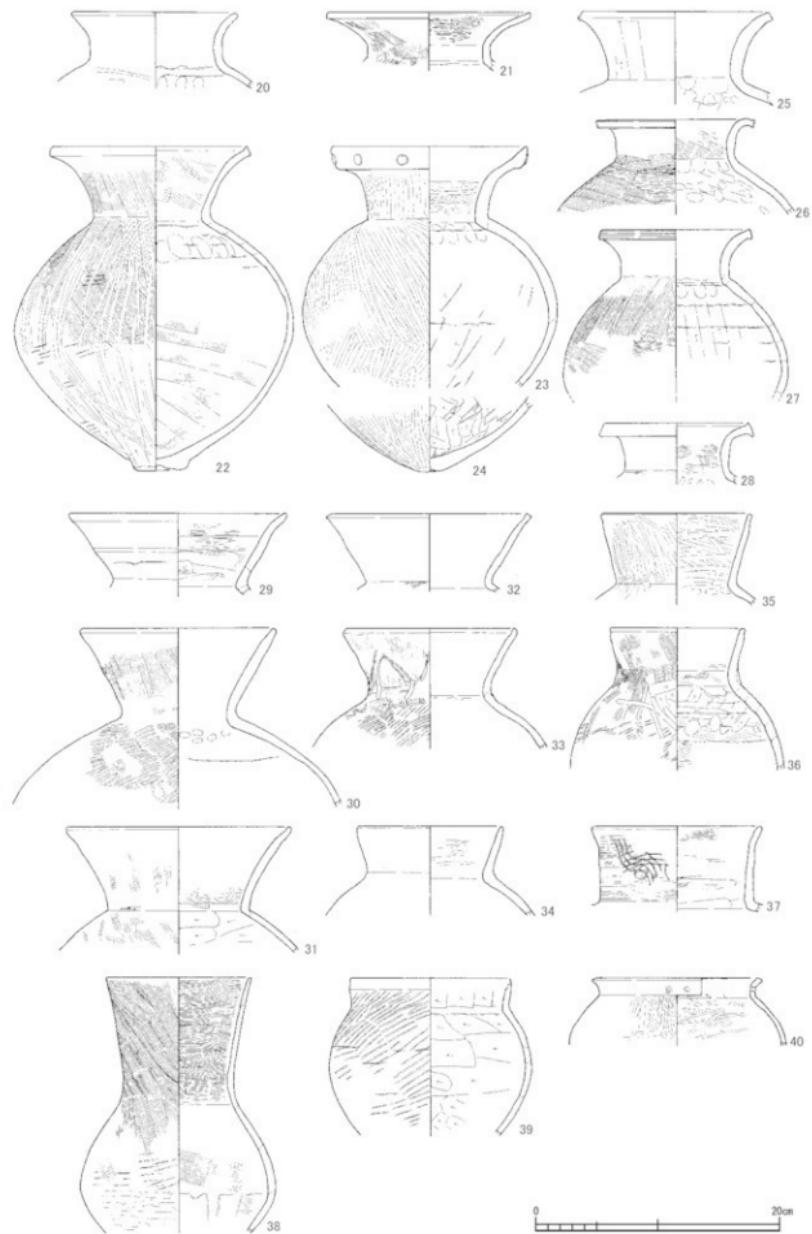


SK05 · 06、SD01 ~ 04 実測図

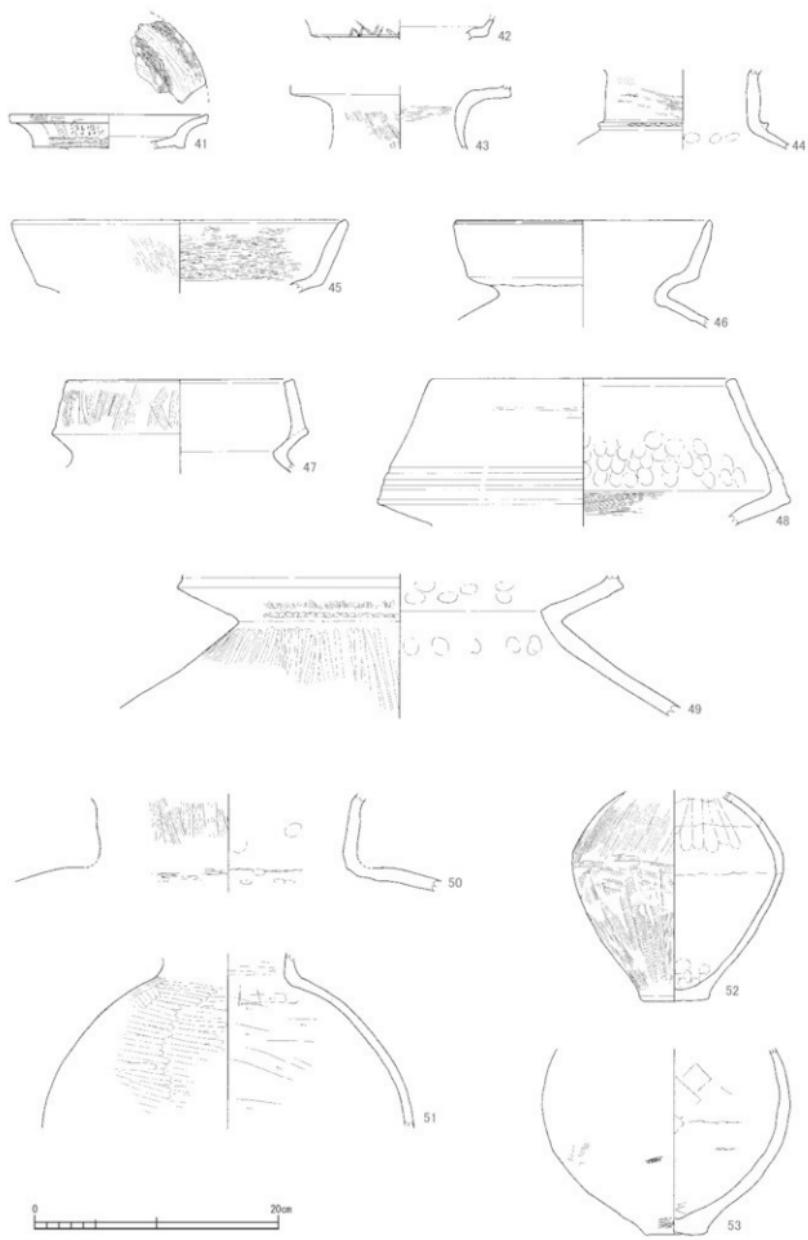
図版 12



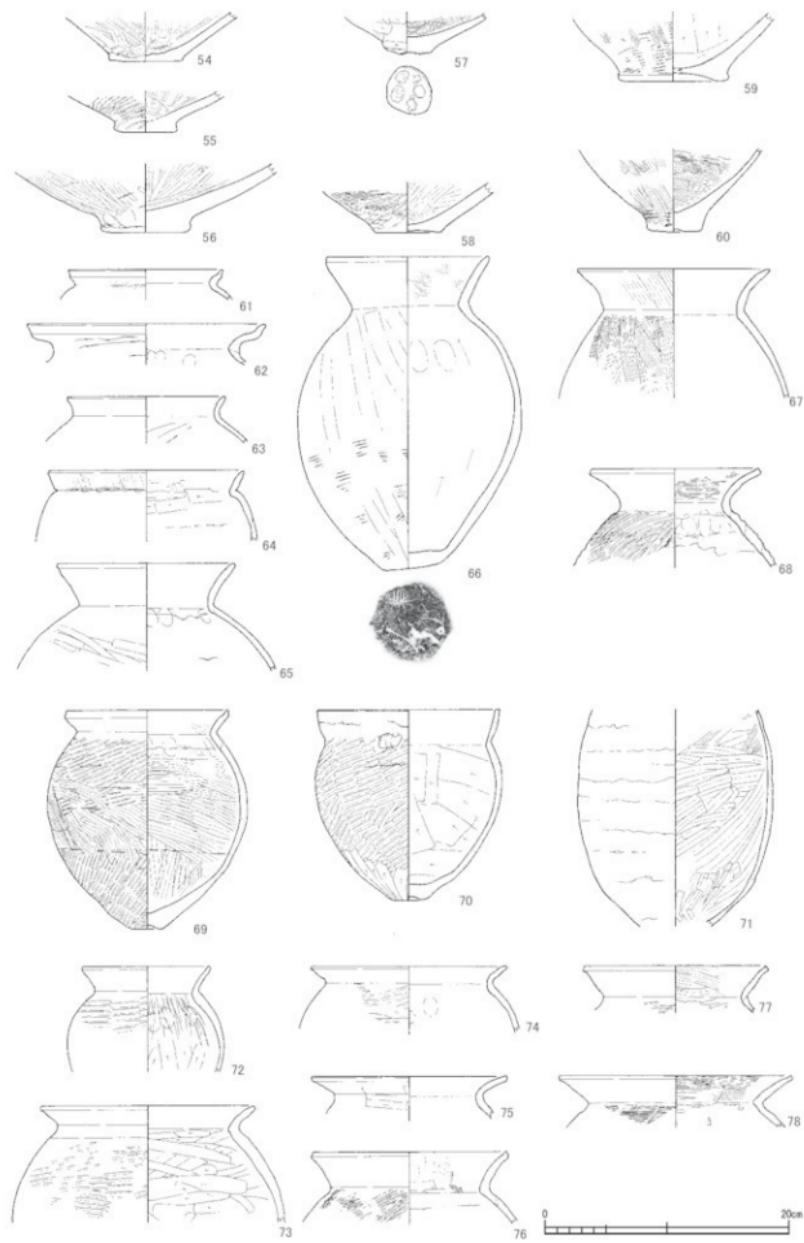
土器実測図 (1)



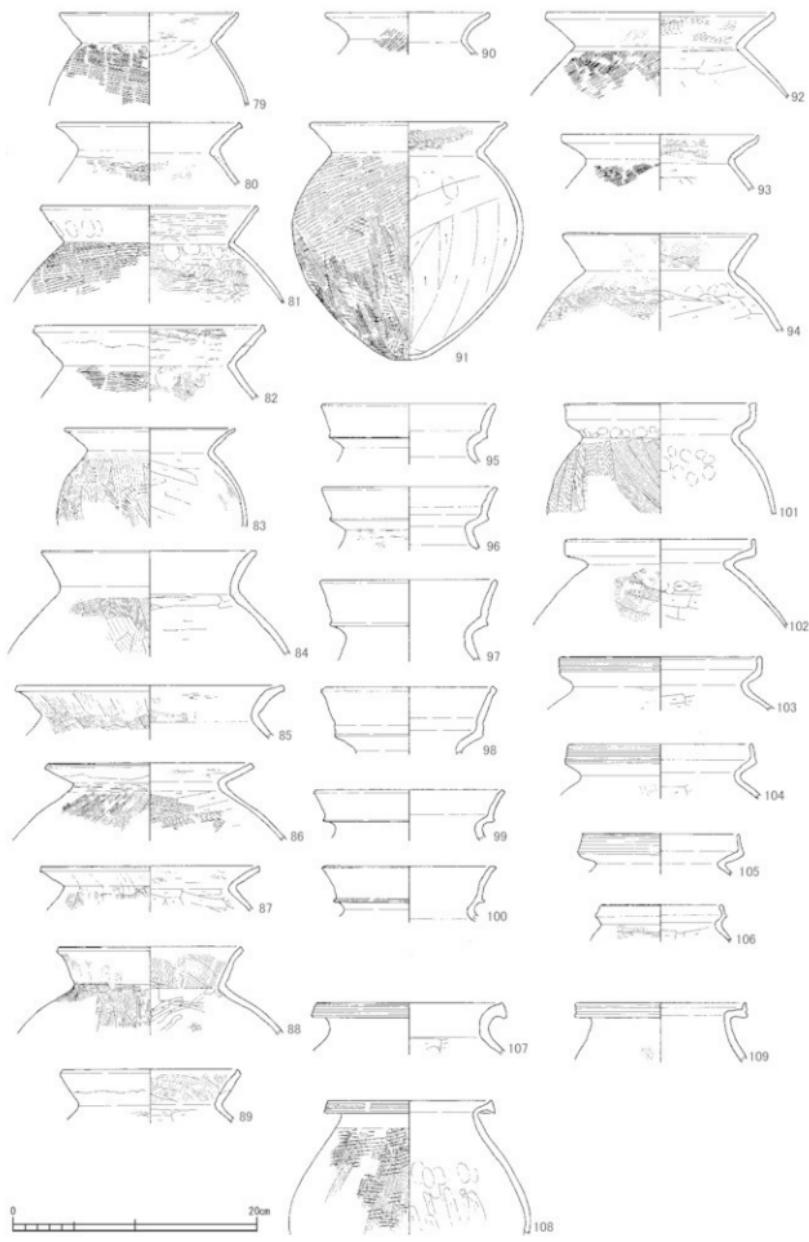
土器実測図 (2)



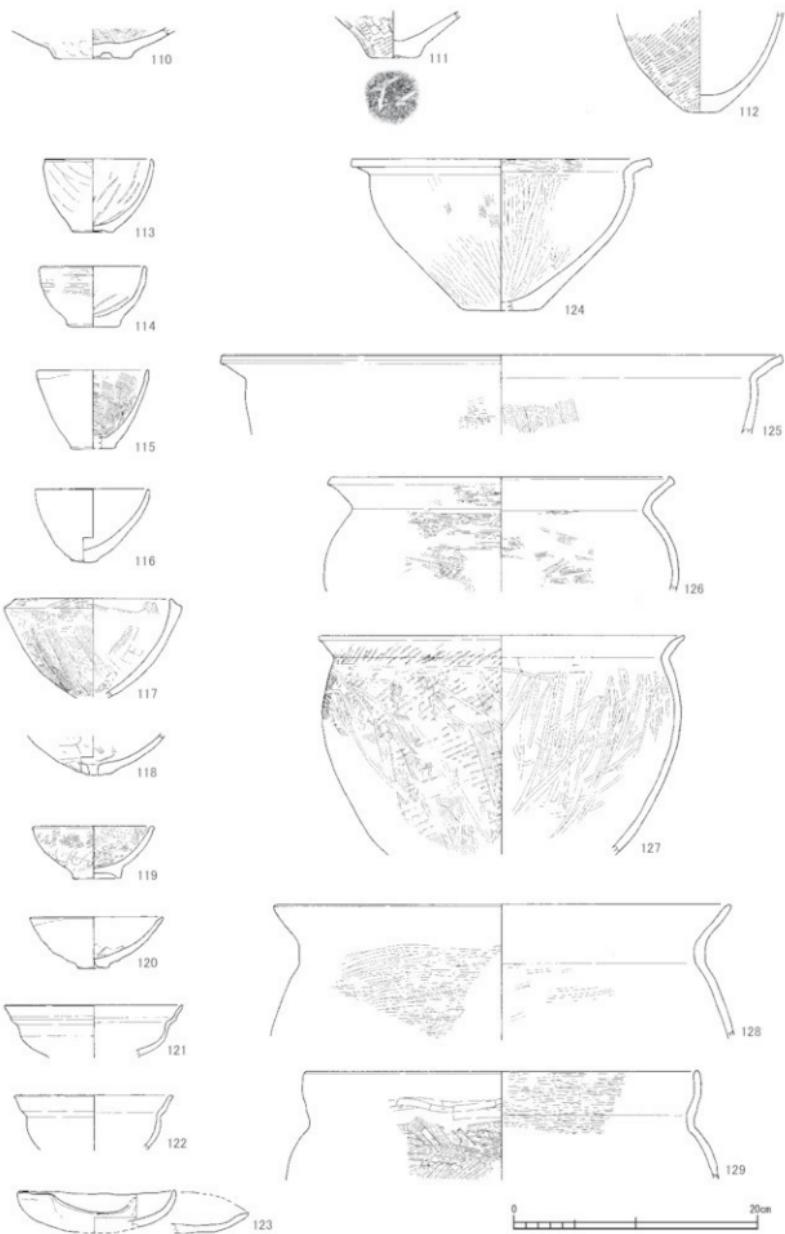
土器実測図 (3)



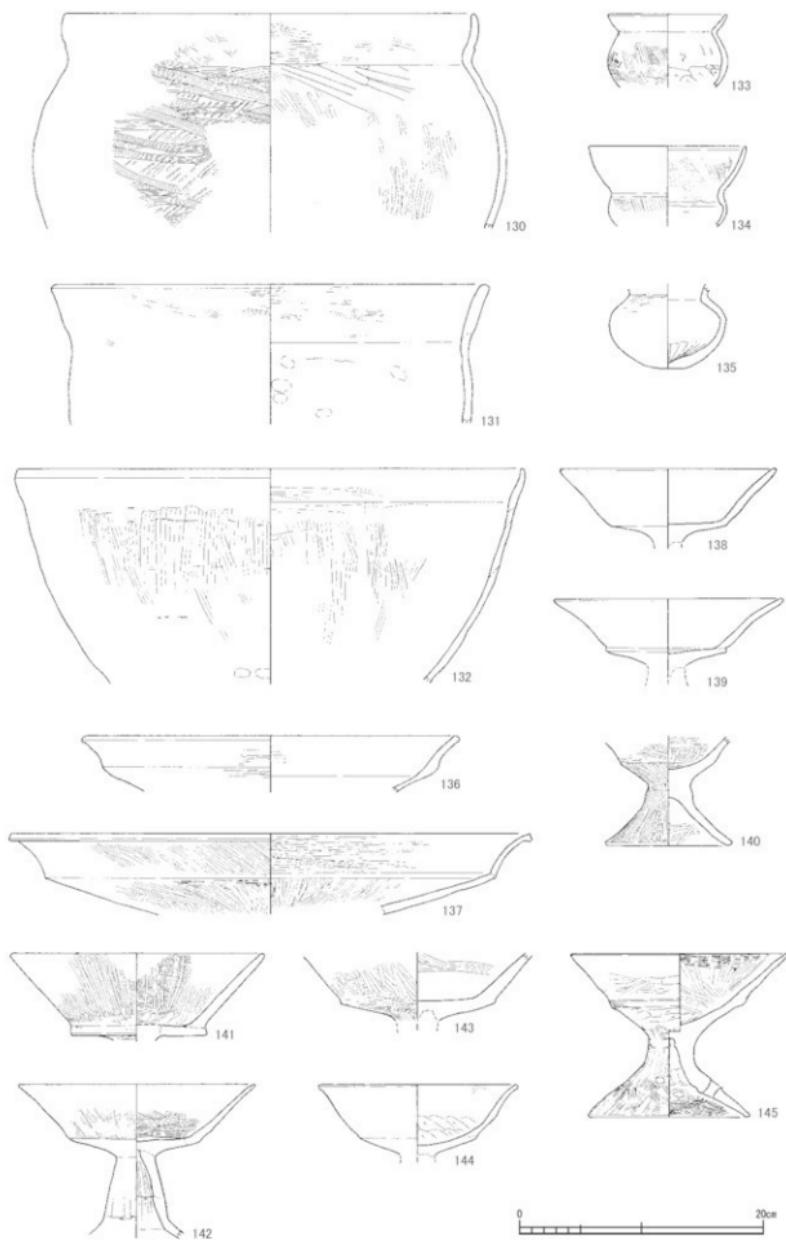
土器実測図 (4)



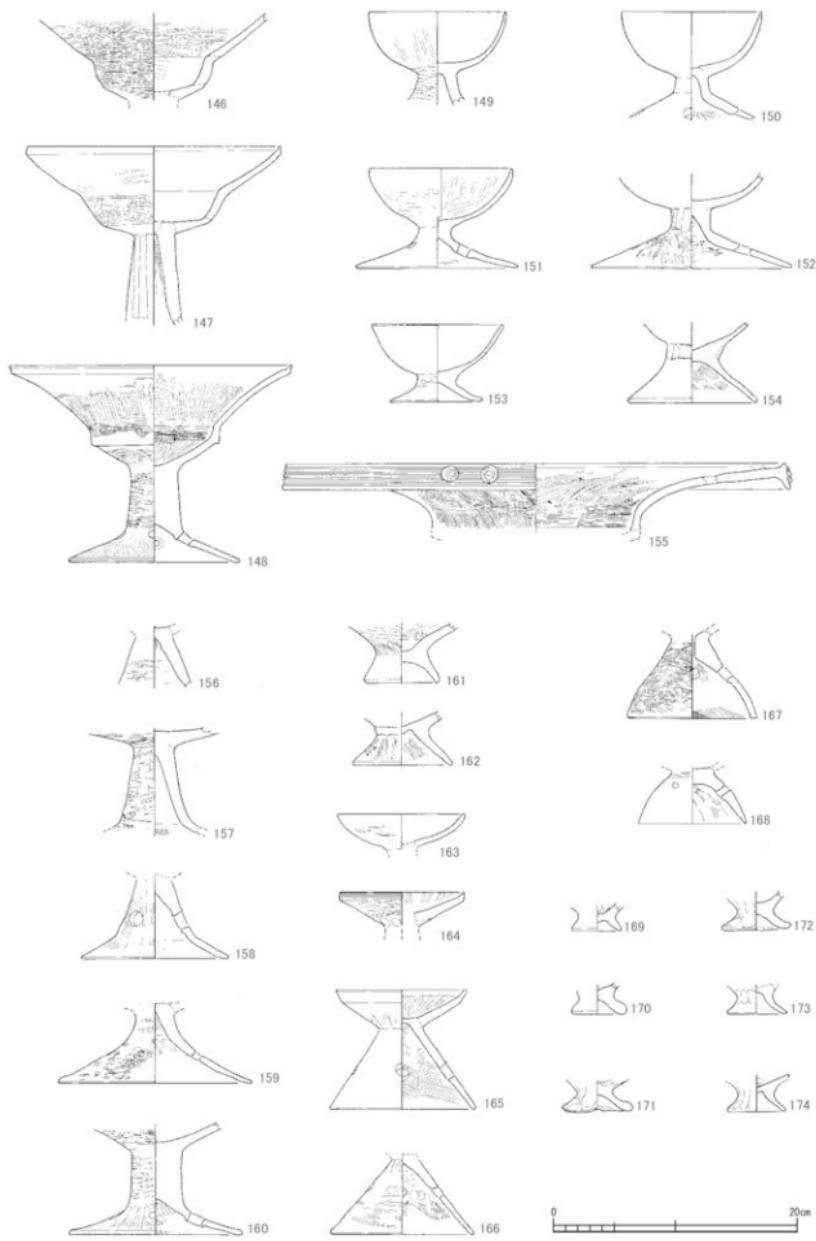
土器実測図 (5)



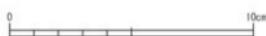
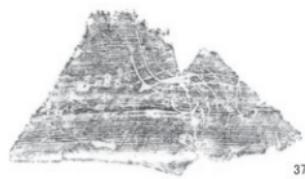
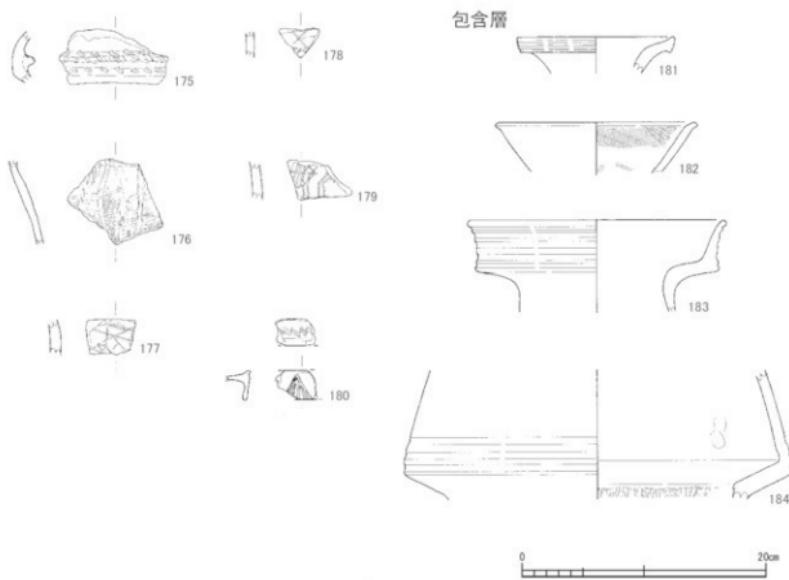
土器実測図 (6)



土器実測図 (7)



土器実測図 (8)



土器実測図 (9)・土器文様他拓影

旧河道



石製品・木製品実測図

写真図版



空中写真（北東上空から）



空中写真（南上空から）



調査区近景（北西上空から）



調査区近景（南上空から）



調査区全景（真上から）



船場川対岸からの風景（南東から）



調査区と船場川（北から）



調査区全景（南から）



1~2区全景（西から）



調査区全景（南東から）



遺構検出状況（南から）



遺構検出状況（北から）



SH01全景（北西から）



SH01全景（南から）



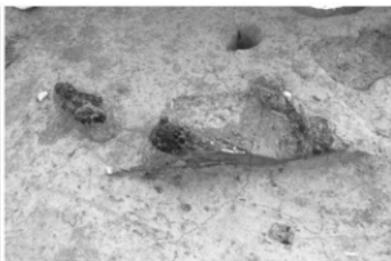
SH01炭化部材検出状況【平成20年度調査】(西から)



SH01炭化部材【平成20年度調査】(西から)



SH01北辺アゼ（東から）



SH01中央土坑（西から）



SH01南周壁溝沿い焼土（南東から）



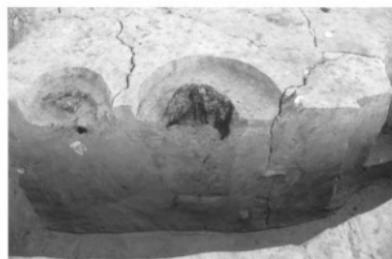
SH01周壁溝検出状況（南東から）



SH01周壁溝（東から）



SH01周壁溝とSP01（北東から）



SH01 SP17（南から）



SH01 SP19（南から）



SB01 (南西から)



SB01 SP02 (西から)



SB01 SP09 (南東から)



SB01 SP11 (南西から)



SB01 SP14 (南西から)



SB01 SP46 (南西から)



SB01 SP47 (南から)



SB02 ~ 04 (南西から)



SB02 SP06 (南西から)



SB02 SP06土器出土状況 (南西から)



SB02 SP07 (南西から)



SB02 SP07石組検出状況 (南西から)



SB02 SP23 (南西から)



SB02 SP30 (東から)



SB02 SP36 (南東から)



SB03 SP04 (東から)



SB03 SP21 (左) (東から)



SB03 SP27 (南東から)



SB03 SP45 (南から)



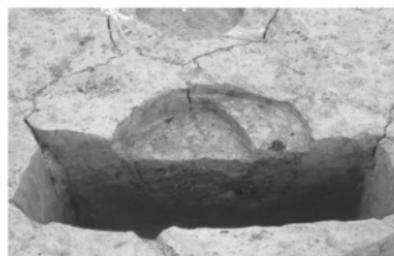
SB03 SP38(左)・SB04 SP37(右) (南東から)



SB03 SP40(右)・SB04 SP39(左) (北西から)



SB04 SP05 (南西から)



SB04 SP20 (南から)



SB04 SP35 (南から)



SB04 SP41 (南から)



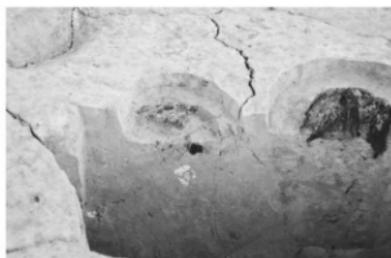
SP04噴砂検出状況 (南から)



SP10 (東から)



SP16 (南から)



SP18 (南から)



SP22 (南から)



SP26(左)・SP44(右) (南から)



SP28 (南から)



SP42 (南東から)



SP48(右)・SP49(左) (東から)



SK01 (北から)



SK02 (東から)



SK03 (東から)



SK03 南北アゼ (西から)



SK03 東西アゼ (南から)



SK04 (南から)



SK05 (南から)



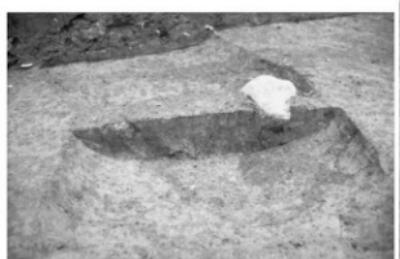
SK06 (北西から)



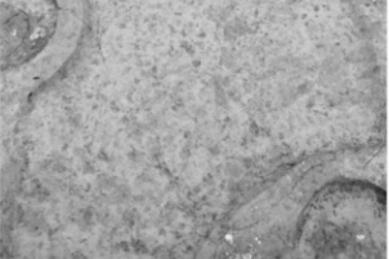
SK07 (西から)



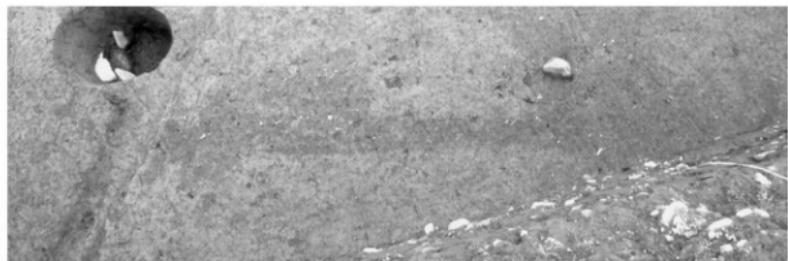
SD01 (南から)



SD03 (東から)



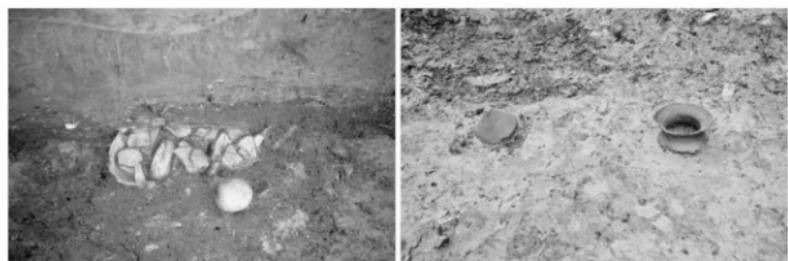
SD04 (南から)



SD02（西から）



旧河道検出状況（南から）



旧河道士器出土状況（1）



旧河道土器出土状況（2）



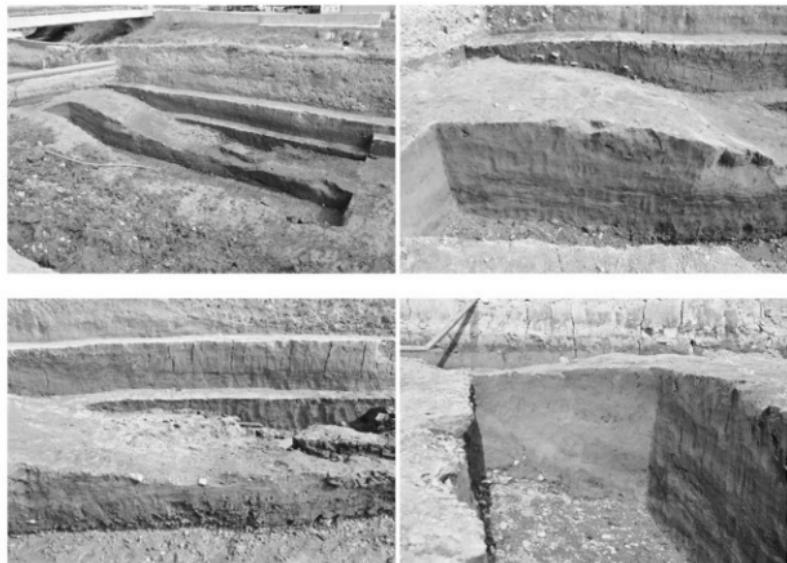
調査区東壁北半土層断面（西から）

調査区東壁南半土層断面（西から）



調査区北壁土層断面（南から）

調査区中央部アセ南壁土層断面（南から）



旧河道堆積状況確認用トレンチ土層断面



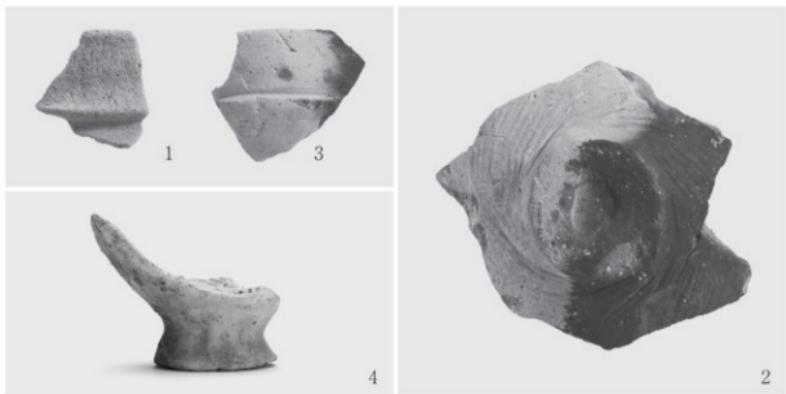
調査風景



現地説明会風景



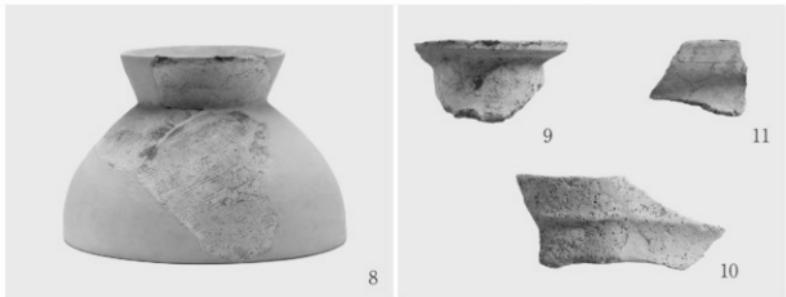
飯田遺跡現況（北東から）



SH01出土土器



SB01 ~ 03出土土器



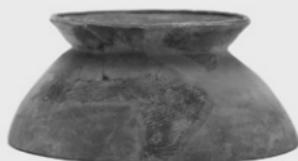
SK03出土土器



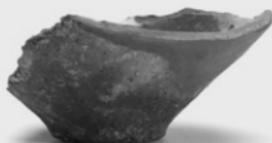
12



15



13



14



16

SK06出土土器



17



18

SK07出土土器



19



20



21



22



23・24



27

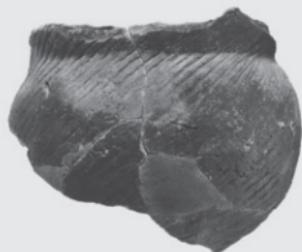


30

旧河道出土土器 (1)



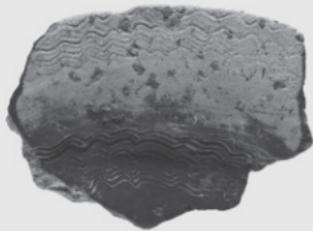
旧河道出土土器 (2)



39



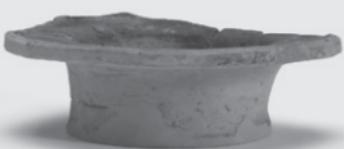
40



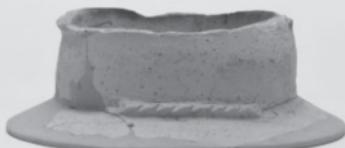
41



42



43

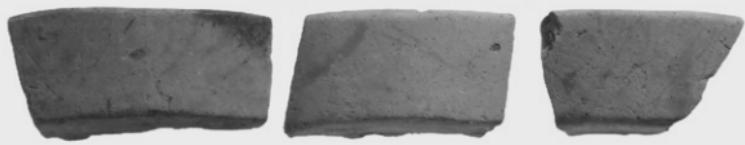


44



45

旧河道出土土器 (3)



45



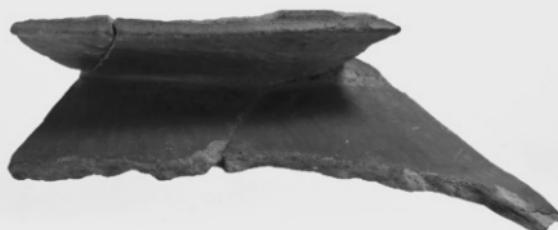
46



47

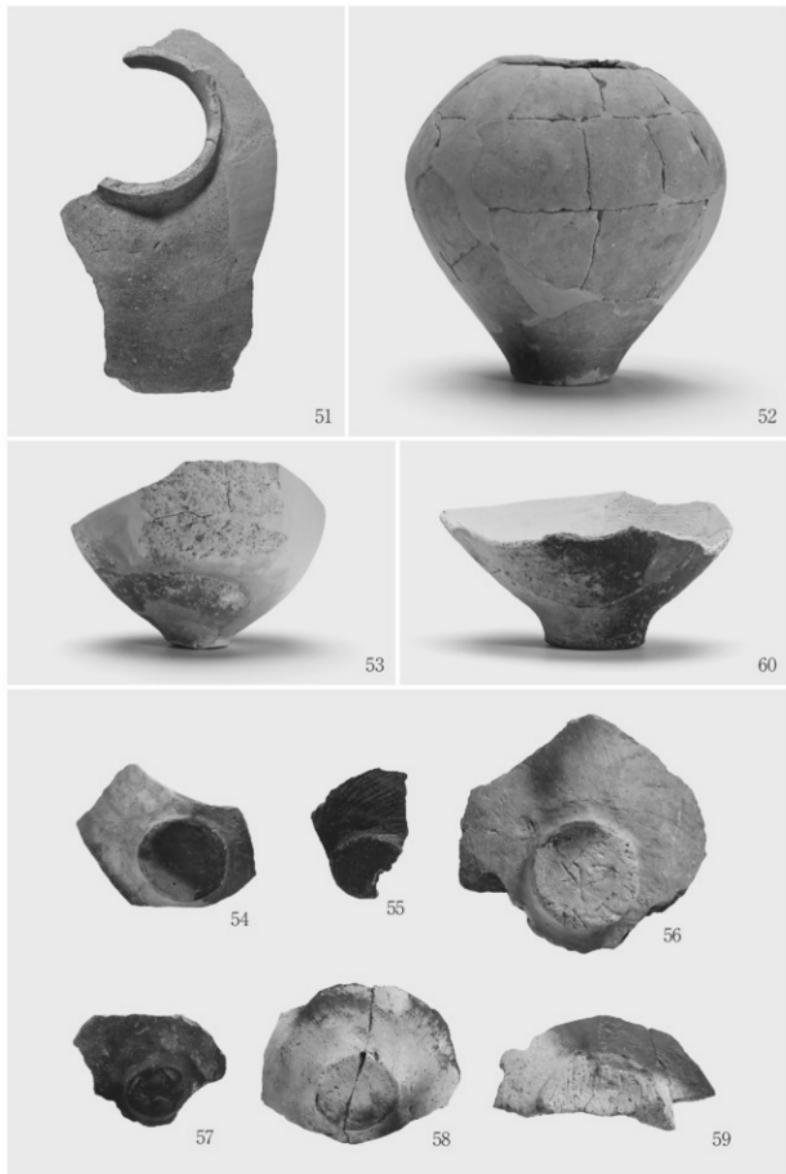


48

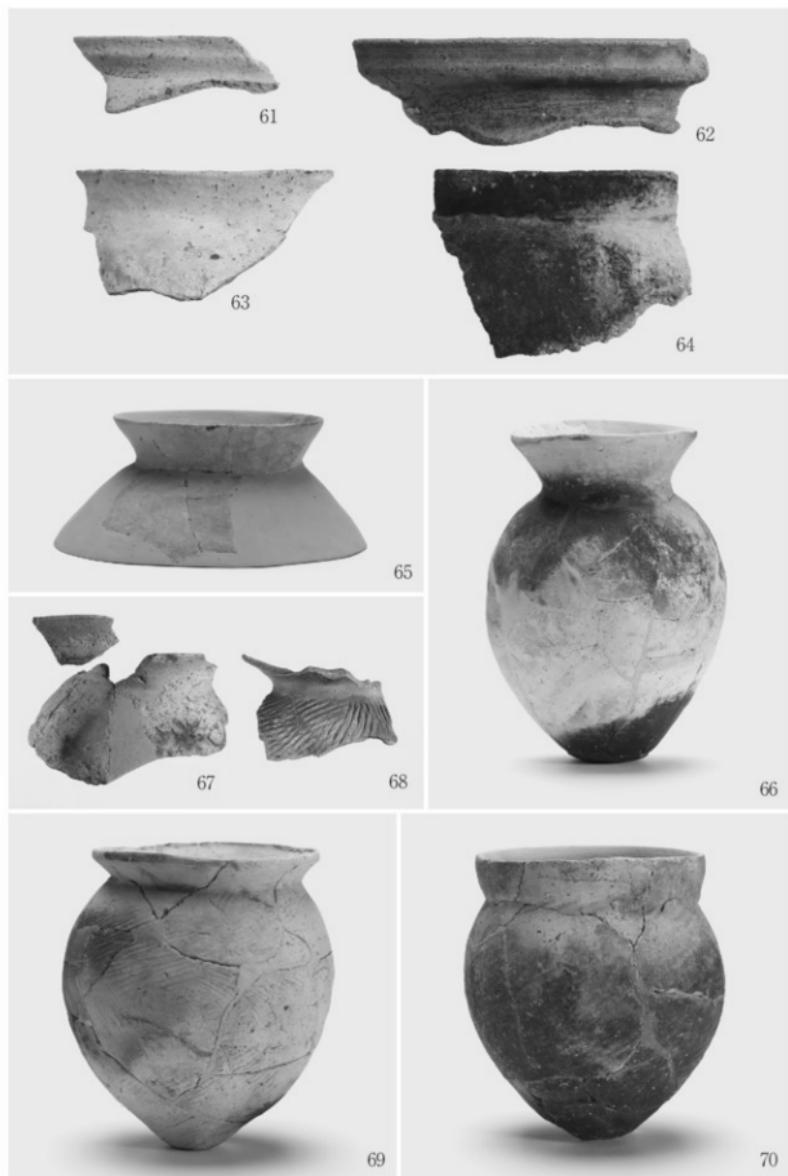


49

旧河道出土土器 (4)



旧河道出土土器 (5)



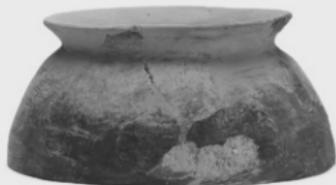
旧河道出土土器 (6)



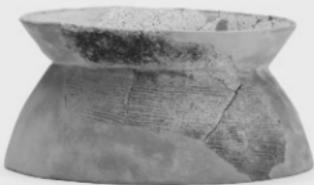
71



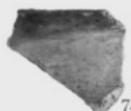
72



73



79



74



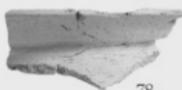
75



76



77



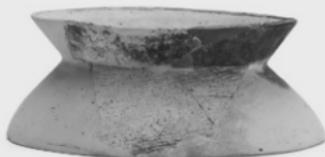
78



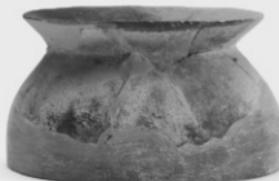
80



82

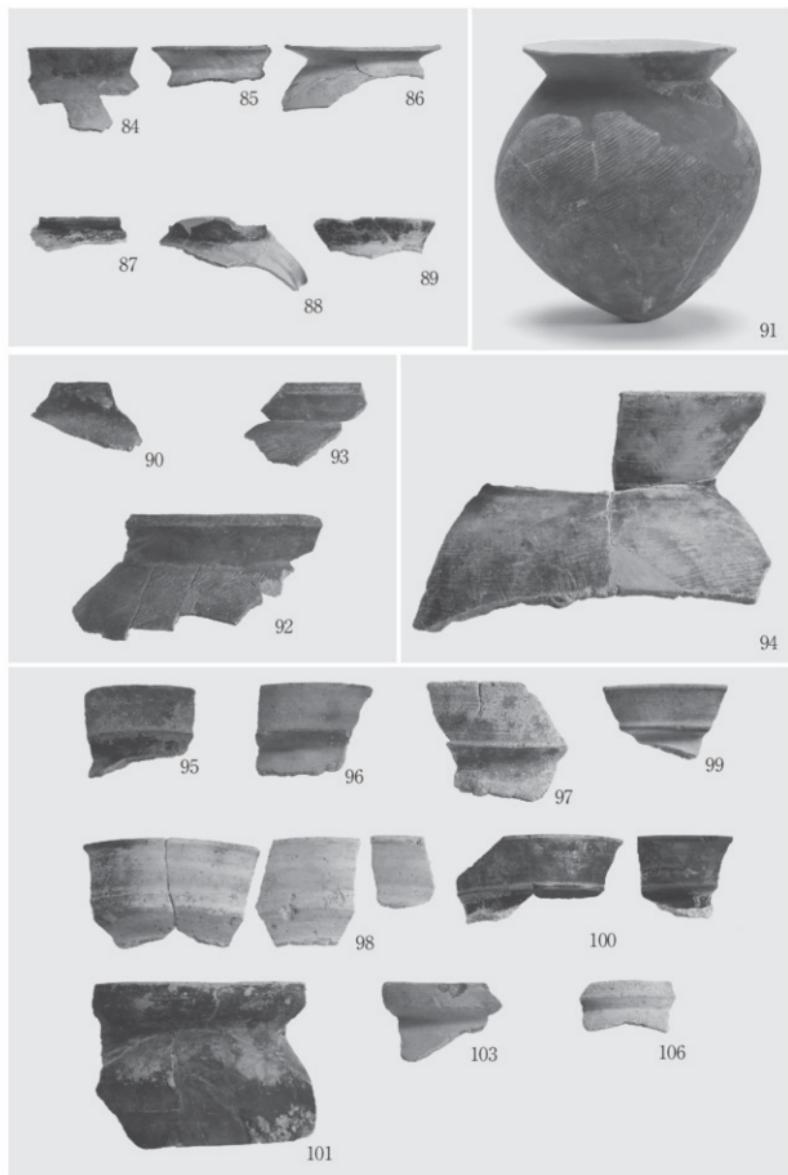


81



83

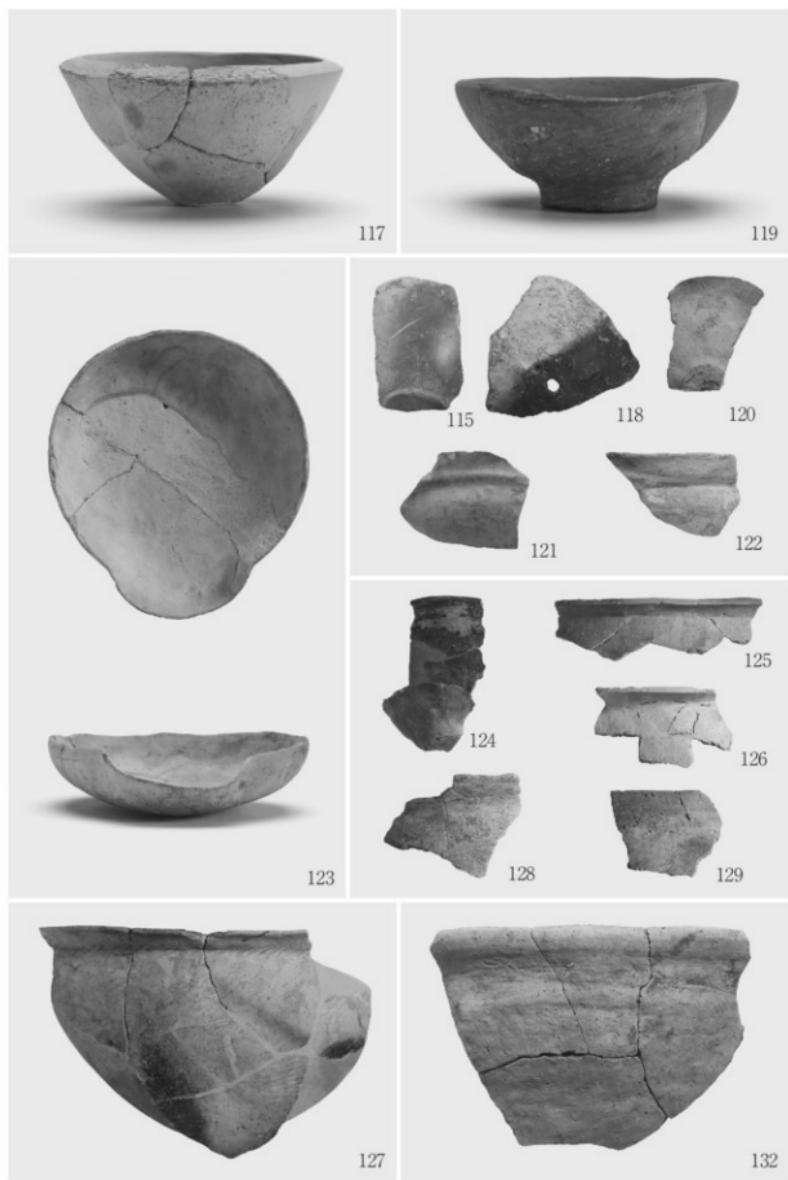
旧河道出土土器 (7)



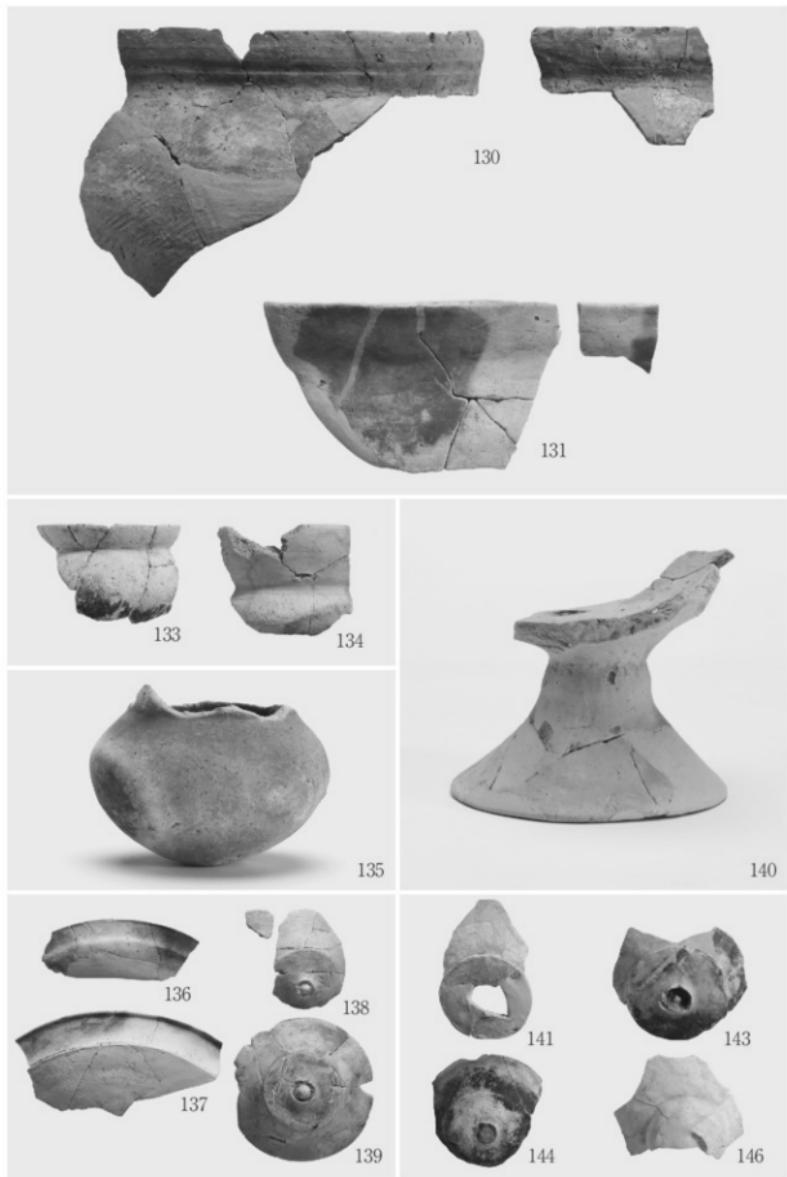
旧河道出土土器 (8)



旧河道出土土器 (9)



旧河道出土土器 (10)



旧河道出土土器 (11)



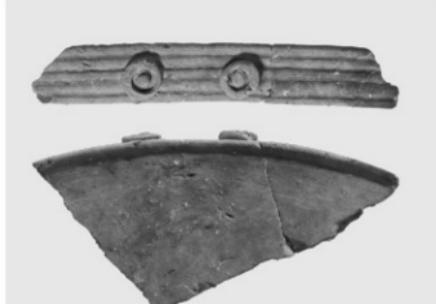
旧河道出土土器 (12)



153



154



155



156



157

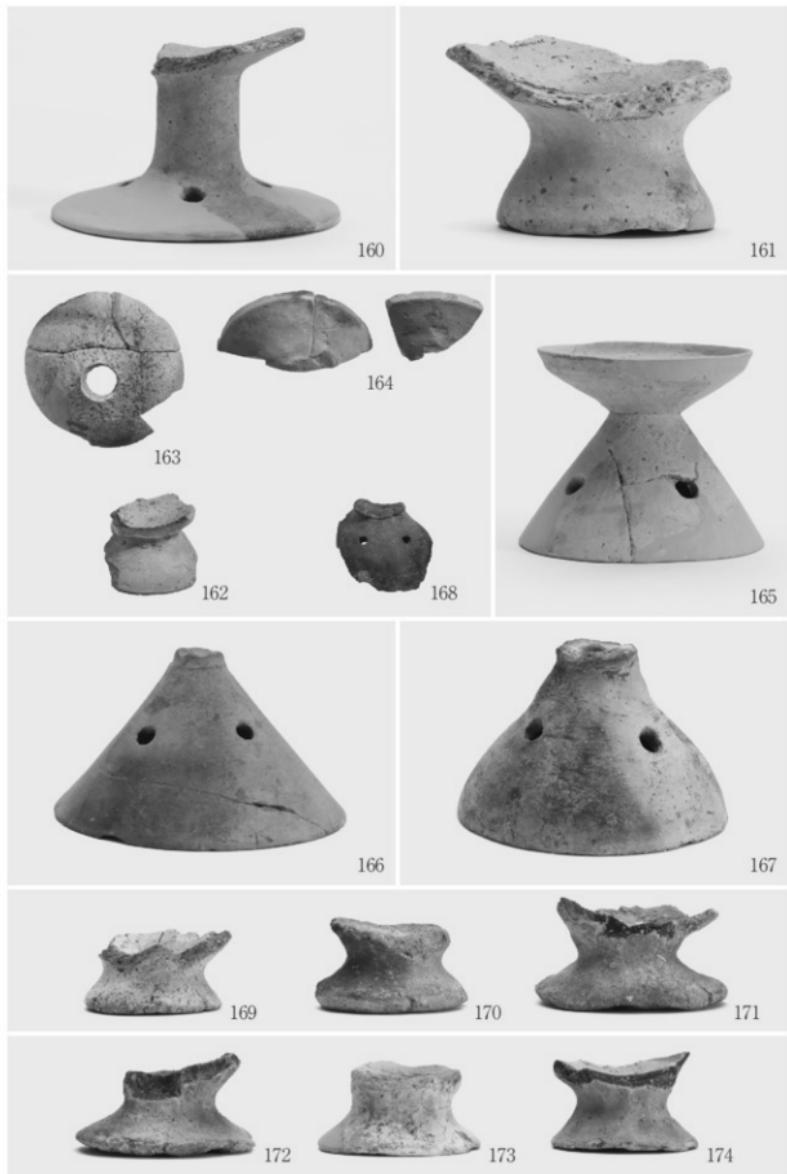


158

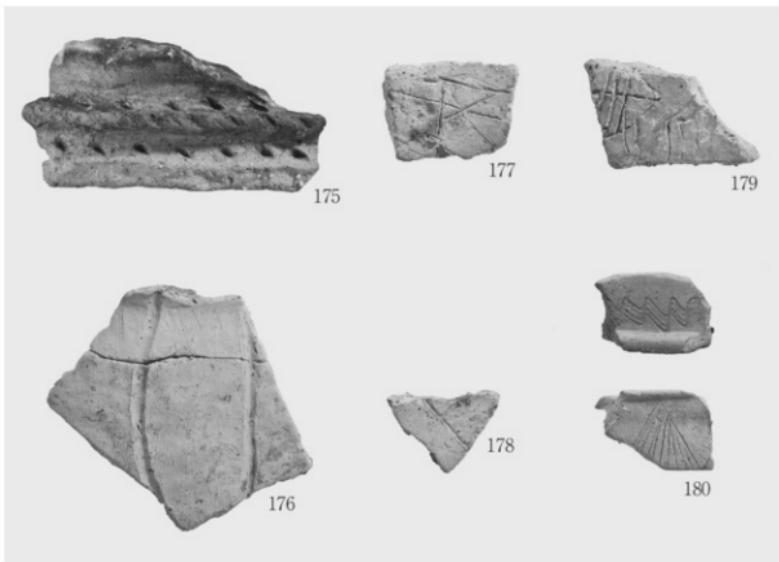


159

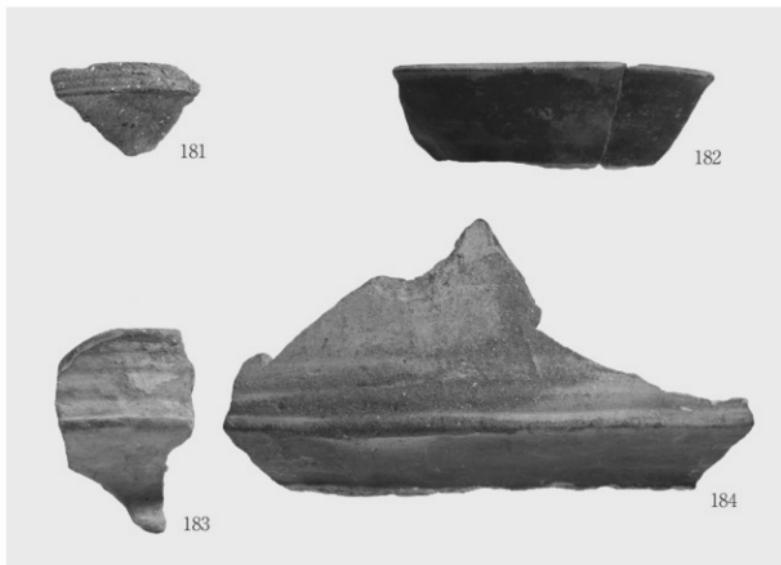
旧河道出土土器 (13)



旧河道出土土器 (14)



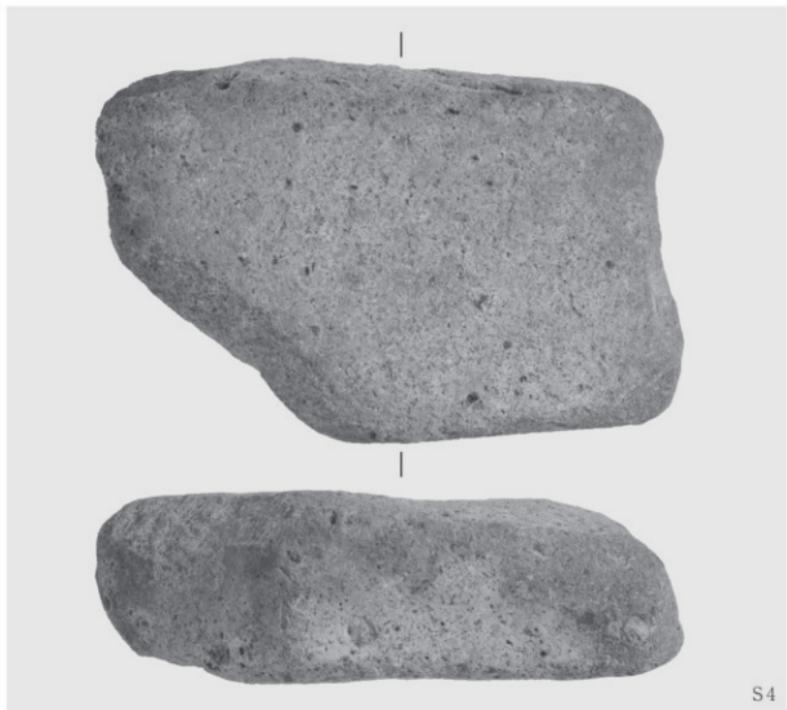
旧河道出土土器 (15)



包含層出土土器

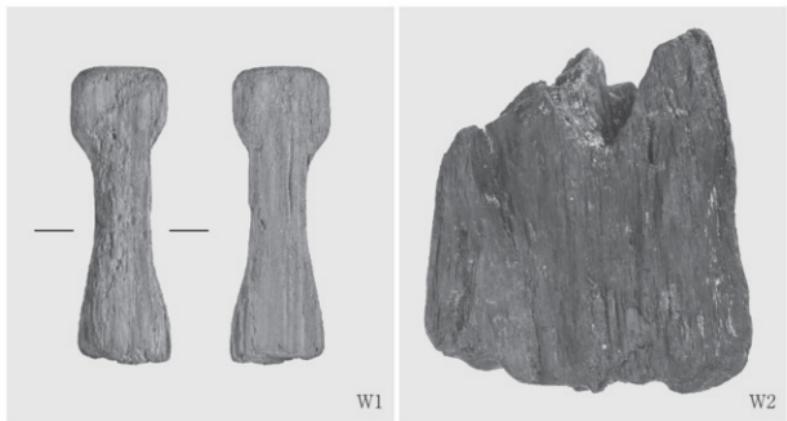


出土石製品 (1)



S4

出土石製品 (2)



W1

W2

出土木製品

報告書抄録

ふりがな	いいだいせき							
書名	飯田遺跡							
副書名	(二) 船場川水系船場川流域治水対策河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第488冊							
編著者名	渡瀬健太							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) TEL079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL078-362-3784							
発行年月日	平成29(2017)年3月24日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
飯田遺跡	姫路市飯田	28201	020940	34° 48° 53°	134° 40° 17°	20150114 ~20150225 (2014130)	320m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
飯田遺跡	集落跡	古墳時代	堅穴住居跡・ 掘立柱建物跡・ 柱穴・土坑・溝	古式土師器、弥生土器、 敲石、砥石		古墳時代前期初頭の 土器が主体を占める		
要約	<p>飯田遺跡は弥生時代終末から古墳時代前期初頭にかけての集落遺跡であり、当該期の兵庫県を代表する長越遺跡と一体の集落であったと考えられる。調査区は微高地と旧河道に分かれ、北西に広がる微高地上に堅穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が認められる。旧河道は北東側から南側にかけて認められる。堅穴住居跡は1棟検出した。方形で、高床部をもつ。焼失住居であり、炭化材が多くみられた。掘立柱建物跡は4棟検出し、いずれも1間×2間である。旧河道からは多くの土器片が出土した。大半が弥生時代終末から古墳時代前期初頭のものである。上層からは古墳時代後期末と考えられる須恵器壺が出土し、当該期にはほとんど埋没した状態であったことが分かる。今回の調査により、飯田遺跡・長越遺跡の東端を明らかにすることができた。微高地上のより高い場所に堅穴住居を築き、河道に近い場所に掘立柱建物を建てたといった景観が想定できる。</p> <p>出土遺物は、主に土師器が出土しており、庄内甕などがみられる。播磨産の土器だけでなく、河内や讃岐、吉備など他地域からの搬入品なども出土している。</p>							

兵庫県文化財調査報告 第488冊

姫路市

飯田遺跡

- (二) 船場川水系船場川流域治水対策河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成29(2017)年3月24日 発行

編集：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社 ソーエイ

〒673-0898 明石市樽屋町6番6号
